

RI*WAC

Research Institute for Women and Careers

日本女子大学現代女性キャリア研究所

RIWAC 管理番号	RJ00018
調査タイトル	「大学卒業後の生活・意識と大学評価に関する調査」
論文／雑誌名	『大学卒業後の生活・意識と大学評価に関する調査報告書 (1)－日本女子大学卒業生の調査から－』
著者	村松幹子・小林多寿子
掲載ページ	pp.1-83.
発行年	1998.05
出版社	日本女子大学総合研究所 「女子大学の将来展望に関する総合的調査」

はじめに

この報告書は、1996年度からはじまった日本女子大学総合研究所「女子大学の将来展望に関する総合的調査研究」プロジェクトの一環として実施した、日本女子大学卒業生の質問紙調査とインタビュー調査の成果をまとめた中間報告である。質問紙調査は1996年11月に、インタビュー調査は1997年3月から4月にかけておこなっている。本報告書の前半では、おもに質問紙調査の結果を、卒業生の大学評価やライフコース形成の観点から分析し、考察している。また後半ではインタビュー調査のなかで語られた話を卒業生のライフストーリーとして再構成してあり、これらの記述から、日本女子大学を卒業して16年から19年たった女性たちの生活や意識を、そしてなによりも彼女たちの現在をえがきだすことを試みている。

総合研究所の本研究プロジェクトは、今後の女子大学のありかたを考えるために、女子大学の理念や生涯発達の観点からみた女子大学での教育意義、女性の高等教育の動向をさぐることを主たる目的としている。その調査研究は、日本女子大学の卒業生だけでなく、他大学の実態や国際比較調査もふくめながらおこなわれており、1999年3月までの予定で、いま研究調査が継続中である。したがって、本報告書は、現在進展中のプロジェクトの一部をなすものであるが、本学卒業生の質問紙調査およびインタビュー調査を中間報告のかたちでまとめることによって、とくにインタビュー調査にご協力いただいた方々に経過報告をおこなうとともに、わたしたちがさらに研究を展開させていくための考察のステップにしたいと考えている。

本報告書は、中間報告であるため、生のデータに近いものをふくんでいる。卒業生たちの声できるだけ活かしたかたちで記すことで、彼女たちの現在がよりリアリティのあるものとして描きだせるのではないかとわたしたちは考えている。そして、調査対象者にフィードバックすることで、さらにあらたな反応を得て、今後の調査に活かしていくことができればと願っている。

本報告の質問紙調査の対象となったのは、1978年と1981年の卒業生から無作為に抽出した1052名である。そのうち回答を返送してくださったのは、514名の方々であった。そのなかで、調査票の最後のページにもうけた自由回答欄にたくさんのお話を書き記してくれた方があった。そのなかから、現在、首都圏に住む17名にインタビュー調査をお願いして、お話をうかがう機会をえている。いずれの方もいま仕事に家庭生活に充実した日々を送っているたいへん魅力的な方々ばかりであり、聞き手であったわたしたちはすっかり魅了されてしまった。調査の中間報告とあわせて、彼女たちのすてきな魅力の一端をすこしでも伝えることができれば幸いであるとおもう。

ご多忙ななか、快くご協力くださった方々に心より御礼申し上げます。

1998年5月

日本女子大学人間社会学部

小林多寿子

目 次

はじめに

第1章 卒業生による大学教育の評価	1
1. はじめに	
2. 調査の概要	
3. 卒業後の家庭生活, 職業キャリア, 社会的活動	
4. 大学での教育に関する評価	
5. 卒業生からの日本女子大学への希望	
6. まとめと今後の課題	
第2章 ライフコース (展望) パターン別にみた卒業後の生活と意識	15
1. はじめに	
2. ライフコース (展望) パターンの分布	
3. 親の価値意識と本人のアスピレーション	
4. 卒業後の家庭生活, 職業キャリア, 社会的活動	
5. 大学生活	
6. まとめ	
第3章 面接調査対象者における卒業後の生活と意識	27
1. 面接調査の目的	
2. 面接調査の方法	
3. 面接対象者の属性	
4. 職業キャリア形成	
5. 出身高校の影響	
6. 日本女子大学への意見	
第4章 卒業生たちのライフストーリー	39
1. 都立高校教師	
2. 百貨店勤務	
3. 化学メーカー勤務	
4. 情報サービス会社勤務	
5. 建築設計事務所自営	
6. 生命保険会社勤務	
7. 住宅メーカー勤務	
8. 社会福祉法人勤務	

9. 酒類販売自営
10. 研究所パートタイム
11. 塾経営
12. 流通関係パートタイム
13. ペーパー・アーティスト
14. 福祉関係パートタイム
15. 教育関連パートタイム
16. フリー編集者
17. 保育園パートタイム

自由記述	69
調査票	75
あとがき	85

第1章 卒業生による大学教育の評価

村松幹子

1. はじめに

近年、日本において女子の大学進学率が高まり、4年制大学と短期大学を合わせた進学率は、男子のそれを越えるようになった。その一方で、18歳人口の減少に伴う大学入学者数の減少、女子の大学進学者の共学志向の高まり、就職難などから、女子大学はその基盤を揺るがす大きな変化にさらされている。今後、女子大学は、生き残っていけるのか。この大きな問いにこたえるためには、女子のみの高等教育機関としての女子大学の独自の位置と役割を、現実の社会変化や今後の展望をふまえた上で、実証的に検討していくことが不可欠である。

本稿では、大学における女子教育の生涯発達の意義の調査研究グループの調査研究成果について報告する¹⁾。筆者らは、1996年度に大学の女子卒業生を対象に質問紙調査を実施した。この調査では、女子大学を卒業した女性が、どのような生活を送り、どのような意識をもっているのかについて、家庭生活、職業キャリア、社会的活動の領域を中心に明らかにし、現在の生活において大学や大学教育がどのような影響をもつのか、さらには卒業生自身が大学をどのように評価しているのかについて把握することを目的としている。そこで、対象者を大学を卒業して20年後の女性に設定し、日常生活における大学教育の影響を捉えることにより、女子大学の将来展望を検討する際の基礎資料を提供できると考えた。さらに、女子大学についてより一般的なデータを獲得するために日本女子大学および関東圏の女子大学の計2校の卒業生を、女子大学独自の影響を測定するための比較群として共学大学3校の女子卒業生を、対象者として設定した。また、日本女子大学卒業生については面接調査を実施し、質的データも得ている。

本稿では、以上の調査結果の内、日本女子大学卒業生対象の質問紙調査における「大学評価」に関する項目を中心に、単純集計結果をもとに報告する。

1) 本調査は、日本女子大学総合研究所「女子大学の将来展望に関する総合的調査研究」プロジェクト（研究代表者：牧野暢男，研究期間：1996年4月1日～1999年3月31日）の研究活動の一環として実施したものである。本プロジェクトでは、女子大学の理念、女子の大学への進学動向、大学における女子教育の生涯発達の意義、企業などの女子高等教育に対する意向、女子高等教育の国際比較の観点から、今後の女子大学のあり方を検討することを目的としている。なお、本稿の調査研究メンバーは、渡邊恵子、小林多寿子、井上信子、畠澤郎、村松幹子である。

2. 調査の概要

(1) 調査の目的

大学を卒業した後の女性が、家庭や職業、社会的活動などにおいて、どのような生活を送り、どのような意識をもっているかを明らかにし、それらに対する大学教育の影響を把握する。

(2) 調査内容

調査内容は、以下の6項目から構成されている。本稿では1. 3. 4. について述べる²⁾。

1. 職業について：職業キャリア、現職の有無とその理由、今後の職業キャリアについての展望
2. 価値観について：女性性、育児観・子ども観、リーダーシップ
3. 現在の生活について：結婚経験の有無、子どもの有無、社会的活動
4. 大学教育について：大学生生活の有用性とその内容、大学生生活の満足度、友人関係、教員からの影響、大学の将来への希望、娘の母校入学への意見
5. ライフコースについて：母親、父母の期待、大学卒業時のアスピレーション、現在
6. 自由回答

(3) 調査対象者および調査方法

調査は、1978（昭和53）年および1981（昭和56）年卒業の日本女子大学卒業生の中から無作為抽出した1,052名を調査対象者として、1996年11月に郵送法にて実施した³⁾。有効回答は、1978年卒業生（41歳中心）257票、1981年卒業生（38歳中心）257票の合計514票、回収率は48.9%である。回答者の出身学部は、家政学部（児童、住居、被服、家政経済、食物、理Ⅰ、理Ⅱの7学科）56.6%、文学部（国文、英文、史、社会福祉、教育の5学科）43.4%である。

3. 卒業後の家庭生活、職業キャリア、社会的活動

ここでは、回答者の属性に関するデータとして、家庭生活、職業、社会的活動の3つの領域別に傾向を把握することを目的とする。そこで、結婚および出産、大学卒業後の職業（初職、現職、今後の展望）、社会的活動経験についてみておこう。

(1) 家庭生活

回答者の家庭生活について、結婚、出産の状況をみておきたい。回答者の内訳は（表1-1）、「既婚者（再婚も含む）」が86.0%、「夫と死別または離別」が2.8%、「未婚」が11.2%である。初婚年齢は（表1-2）、26歳以下が67.5%、27歳以上29歳以下が21.5%、30歳以上が11.0%と、9割近くが20歳代で結婚を経験している。未婚者以外では、子どもがいない者が8.9%、子ども1人が19.2%、2人が52.3%、3人以上が19.6%である。「結婚に際しては、日本女子大学の卒業生

2) 本稿で報告した調査票項目作成にあたり、青井（1988）、柏木（1980）、牧野・村松（1994）、日本女子大学女子教育研究所（1968）を参考にした。

3) 調査対象者は次の点を考慮して2つの年齢層を設定した。第1に、大学の影響を測定するため卒業後15年以上の者、第2に、ライフステージの観点から35歳以上の者、第3に、男女雇用機会均等法施行（1986年）を30歳以前で経験した者とそれ以降の者である。

ということが1つの有利な条件となっていたと思いますか」の問いに対しては、「有利な条件になっていたと思う」33.6%、「そういうことはなかったと思う」35.2%、「むしろ不利な条件だったと思う」0.7%、「どちらともいえない・わからない」27.6%、「非該当」2.9%であり、不利になった者は少なかったようである。

表1-1 結婚経験の有無 N=508

既婚（再婚も含む）	86.0
夫と死別または離別	2.8
未婚	11.2

表1-2 初婚年齢 N=451

21～26歳	67.5
27～29歳	21.5
30歳以上	11.0

注：縦計100.0%，以下の表でも同様

(2) 職業

a. 卒業後初めて就いた職業

・9割がフルタイム就業 次に、卒業後の職業キャリアについてである。まずはじめに、職業キャリアのスタートにあたる初職について傾向をみていきたい。「あなたは最終学校修了後、これまでに職業に就いたことがありますか」という設問の結果（表1-3）、就職経験がある者は98.1%、就職経験が全くない者は1.9%で、ほとんどの者がフルタイムとして就職した経験をもっている。初職の仕事内容は（表1-4）、全体的には専門と事務に二分されているものの、家政学部で「専門」が、文学部では「事務」が多い。

表1-3 就職経験の有無 N=514

ある（フルタイム）	89.0
ある（パートタイム等）	6.8
ある（自営等）	2.3
ない	1.9

表1-4 初職の仕事内容

	家政学部 N=288	文学部 N=216	合計 N=504
専門	59.4	32.4	47.8
事務	29.5	55.1	40.5
販売	2.8	4.2	3.4
その他	8.3	8.3	8.3

・入職経路は「個人的縁故」「大学厚生課」 初職の入職経路は（表1-5）、「個人的縁故」「大学厚生課」が代表的なものとしてあげられる。学部別にみると、2学部とも「個人的縁故」が最も多いものの、家政学部では「大学の先生・先輩の紹介」が、文学部では「大学厚生課」や「広告」による入職が目立つ。また、「最初の就職に際しては、日本女子大学の卒業生ということが

表1-5 初職の入職経路

	家政学部 N=287	文学部 N=216	合計 N=503
個人的縁故	34.9	31.5	33.4
大学厚生課	19.9	31.0	24.7
大学の先生・先輩の紹介	15.3	4.6	10.7
広告	7.7	11.6	9.3
自分ではじめた	3.1	2.3	2.8
家業だった	2.4	2.8	2.6
その他	16.7	16.2	16.5

1つの有利な条件となっていたと思いますか」との問いに対しては、「有利な条件となっていたと思う」43.9%、「そういうことはなかったと思う」34.4%、「むしろ不利な条件だったと思う」1.0%、「どちらともいえない・わからない」20.7%という結果であった。

・20歳代で大半が初職を退職、一部は継続 次に、初職の退職経験についてである。最初の勤務先（会社等）を退職した経験がある者は82.3%、退職経験がない者は17.7%である。退職者の9割以上が20歳代で初職を辞めている。退職理由は（表1-6）、「結婚のため」40.2%、「出産・育児のため」16.5%と、この2つを合わせると半数以上を占め、結婚、出産・育児が退職の主な理由である。

表1-6 初職退職理由

	家政学部 N=235	文学部 N=178	合計 N=413
結婚のため	40.0	40.4	40.2
出産・育児のため	20.0	11.8	16.5
より魅力的な勤務先や仕事があったから	8.1	6.7	7.5
労働条件が悪いから	6.0	5.6	5.8
仕事つまらないから	1.7	6.7	3.9
夫の転勤のため	1.7	4.5	2.9
仕事以外のやりたいことをしたいから	2.1	3.4	2.7
専攻や資格が生かせないから	0.4	3.9	1.9
はじめから短期間働くつもりだったから	1.7	2.2	1.9
その他	18.3	14.8	16.7

b. 現在の職業

・有職者：無職者は1：1 では、現在の職業に関する結果をみてみよう。現在は、有職者が50.4%、無職者が49.6%とほぼ半々に分かれている（表1-7）。有職者の約半数が「パートタイム」である。仕事内容別にみると（表1-8）、専門職が半数を占めている。初職の仕事内容では学部間で差がみられたが、現職については特に異なる傾向はみられない。

表1-7 現職の有無 N=415

有職（フルタイム）	14.2
有職（パートタイム等）	22.7
有職（自営等）	13.5
無職	49.6

表1-8 現職の仕事内容 N=209

専門	47.4
事務	25.4
販売	7.2
その他	20.0

・現職の入職経路は大学関連以外 現職の入職経路は（表1-9）、「個人的縁故」25.5%、「広告」24.5%の2つで50.0%である。「桜楓会人材銀行」「大学の先生・先輩の紹介」など、大学を通じたの求職活動は、ほとんど行なわれていない。「現職の就職に際して、日本女子大学の卒業生ということが、1つの有利な条件となっていたかどうか」に対する回答は、「有利な条件となっていたと思う」17.3%、「そういうことはなかったと思う」45.2%、「むしろ不利な条件だったと思う」1.0%、「どちらともいえない・わからない」24.5%である。現職に就くにあたって、大学は特に影響を与えていないようである。

表1-9 現職の入職経路 N=208

個人的縁故	25.5
広告	24.5
家業だった	15.9
自分ではじめた	13.0
桜楓会人材銀行	1.9
大学の先生・先輩の紹介	1.9
その他	17.3

・有職理由は経済的理由、無職理由は家事・育児の都合 さらに、有職者、無職者それぞれに対して、現在の有職あるいは無職の理由について回答を求めた。まず、有職者の理由で最も比率の高い項目は（表1-10）、「生計の維持や補助、貯蓄のため」である。経済的理由としては第5位にも「自分自身の収入が欲しいから」があげられている。また、「自分の能力を生かしたいから」「生活に変化があって、充実感もてるから」などが上位を占めている。一方、無職の理由では（表1-11）、「家事や夫・子どもの世話に専念したいから」が48.8%、「夫や家族が反対するから」が3.3%、「老人や病人の世話があるから」が1.9%で、これら家事の都合に関する項目の合計で、54.0%にのぼる。また、「適当な仕事がないから」も16.4%である。

表1-10 現在有職の理由 N=297

生計の維持や補助、貯蓄のため	27.6
自分の能力を生かしたいから	25.3
生活に変化があって、充実感もてるから	12.8
家業だから	12.5
自分自身の収入が欲しいから	11.8
働くことが好きだから	3.4
社会に貢献したいから	2.4
仕事を通じて友人や知人が得られるから	0.7
その他	3.5

表1-11 現在無職の理由 N=213

家事や夫・子供の世話に専念したいから	48.8
適当な仕事がないから	16.4
経済的に働く必要がないから	7.5
時間や組織に縛られたくないから	6.1
自分の趣味を充実させたいから	4.7
疲れるから・健康上の理由から	3.8
夫や家族が反対するから	3.3
老人や病人の世話があるから	1.9
ボランティアなどの社会的活動をしたいから	0.9
その他	6.6

c. 今後の職業に関する展望

・有職者、無職者とも職業キャリア形成を希望 では、回答者は、今後の職業（キャリア）についてはどのような展望をもっているのだろうか。有職者、無職者それぞれについて結果をみることにする。まず、有職者の今後の職業（キャリア）展望では（表1-12）、「今の仕事をそのまま続けたい」という者が6割近くを占めている。その一方で「他の仕事に移りたい」13.1%、「今の仕事をやめるわけにはいかない」19.7%など、葛藤を抱えている場合も少なくない。一方、無職者では（表1-13）、「今後何か職業を「もちたいと思う」者が60.8%と「もちたいとは思わない」者よりも多くを占めている。

・無職者は能力の活用のため仕事を希望 さらに先の設問に「もちたいと思う」と回答した者に、なぜ今後職業をもちたいと思うのかたずねたところ（表1-14）、「自分の能力を生かしたいから」「生活に変化があって、充実感もてるから」など、能力の活用や生きがいとしての職業を望んでいることがわかる。有職者で経済的理由が上位にあげられていたことと対照的な結果である。

表1-12 職業（キャリア）展望（有職者）N=290

他の仕事に移りたい	13.1
今の仕事をやめるわけにはいかない	19.7
今の仕事をそのまま続けたい	59.7
その他	7.5

表1-13 職業（キャリア）展望（無職者）N=214

もちたいと思う	60.8
もちたいとは思わない	15.4
わからない	23.8

表1-14 今後仕事をもちたい理由 N=130

自分の能力を生かしたいから	32.4
生活に変化があって、充実感がもてるから	24.6
自分自身の収入がほしいから	16.9
生計の維持や補助、貯蓄のため	14.6
社会に貢献したいから	3.8
家業だから	1.5
仕事を通じて友人や知人が得られるから	0.8
働くことが好きだから	0.8
その他	4.6

(3) 社会的活動

・大学開放講座・市民講座への参加意欲 大学卒業後、職業以外の社会的活動に、どのように関わっているのでしょうか。7種類の社会的活動を設定し、「過去にしたことがあるもの」「現在しているもの」「今後したいもの」について回答を求めた（表1-15）。その結果、過去においては、「各種地域社会活動（PTA活動、自治会、町内会活動）」「趣味や資格を生かした活動」「大学開放講座・市民講座への参加」などが上位にあがっている。現在行っている活動としては、「各種地域社会活動」「趣味や資格を生かした活動」が多い。今後行いたいものは、「趣味や資格を生かした活動」「大学開放講座・市民講座への参加」「ボランティア活動（社会福祉、環境保護など）」があげられる。

表1-15 社会的活動

	過去にした	現在している	今後行いたい
各種地域社会活動（PTA活動、自治会、町内会活動）	35.6	39.4	4.6
趣味や資格を生かした活動	25.3	35.9	27.9
大学開放講座・市民講座への参加	20.5	7.4	27.9
ボランティア活動（社会福祉、環境保護など）	12.6	8.8	25.7
市民運動・住民運動	2.6	2.4	3.1
宗教活動	1.9	3.6	1.3
社会的に承認された活動（調停委員、民生委員）	1.1	1.4	9.3
その他	0.4	1.1	0.2

(4) まとめ

大学卒業後20年近くが経過し、卒業生の家庭生活や職業キャリア、社会的活動の状況も様々であることが明らかになった。これらの点について以下にまとめておく。

回答者のほとんどが20歳代に結婚しており、既婚者が9割近くを占めている。大学卒業後の最

初の就職では、個人的縁故、大学厚生課の情報あるいは大学の先生や先輩の紹介を通じて、フルタイム就労した者が大半を占めている。仕事内容は専門あるいは事務に2分されている。初職は20歳代で結婚や出産により退職した者が多い。

現在は、有職者、無職者がほぼ半分ずつに分かれ、有職者ではパートタイム就労者、専門的職業の者が多い。現職に就くにあたっては、個人的縁故や広告を頼りに求職をしており、初職時のように大学からの情報を活用したり、出身大学名が功を奏することはなかったようである。現在仕事をもっている理由としては、経済的理由が第1位にあがっているものの、能力の活用や生きがいの面も重視されており、今の仕事を続けたいと思っている者が多い。一方、無職者では、家事や育児、適当な仕事がないことが無職につながっている。しかし、今後も無職を希望する者よりも、仕事をもちたいと思っている者が多い。その理由としては、自己の能力の活用や生きがいあげられており、経済的理由はそれほど高くない。

社会的活動としては、過去、現在ともにPTA活動に代表される各種地域社会活動や、趣味や資格を生かした活動が多くみられるが、今後は大学開放講座などやボランティア活動への参加を望む者が多い。

4. 大学での教育に関する評価

さて、日本女子大学の卒業生は、現在、大学教育についてどのように評価しているのだろうか。ここでは、家庭生活、職業、社会的活動の3領域における評価、大学生活への満足度、友人関係、教員から受けた影響、娘の日本女子大学入学への意見について傾向をみていきたい。

(1) 家庭生活、職業、社会的活動における大学評価

・「役立っている」が6割 まず、日本女子大学で受けた大学教育が、これまでの生活に役立っているのかどうかについて把握するために、家庭生活、職業、社会的活動の3つの領域について4段階で回答を求めた(表1-16)。その結果、「役立っている」と「まあ役立っている」を合計すると、職業が66.9%、家庭生活が64.6%、社会的活動が59.4%と、どの領域でも約6割の者が大学教育が役立っていると回答している。ただし、家庭生活、職業では家政学部が、社会的活動では文学部が役立っていると認識している者が多い。

表1-16 家庭生活、職業、社会的活動における大学評価

	家庭生活 N=505	職業 N=493	社会的活動 N=490
役立っている	24.0	28.0	17.8
まあ役立っている	40.6	38.9	41.6
あまり役立っていない	26.5	21.1	29.4
役立っていない	8.9	12.0	11.2

・家庭生活、社会的活動では価値観の形成、職業では専門的知識や技能の獲得 では、具体的などのようなことが役立っているのだろうか。先の設問について「役立っている」「まあ役立っている」と回答した者に対して、3つの領域別に役立っていることを下表の11項目から選択してもらった(表1-17)。第1に家庭生活では、「自分の価値観を形成できた」42.7%、「専門的知識や

技能が身に付いた」18.9%、「よい友人を得た」15.1%、「生きていく上での精神的な支えを得た」12.9%などが上位にあげられている。とくに家政学部では「専門的知識や技能が身に付いた」と回答している者が25.5%を占めている。第2に職業では、「専門的知識や技能が身に付いた」が48.6%、「自分の価値観を形成できた」が19.1%と多い。家政学部では「専門的知識や技能が身に付いた」と回答した者が、文学部よりも24ポイント高い。一方、文学部では「自分の価値観を形成できた」「社会的に評価の高い大学を出た」の比率が高くなっている。第3に社会的活動では、「自分の価値観を形成できた」が36.6%、「人との付き合い方が身に付いた」が20.2%、「よい友人を得た」が13.1%と多い。とくに、家政学部では「自分の価値観を形成できた」が、文学部では「人との付き合い方が身に付いた」が顕著である。

表1-17 家庭生活，職業，社会的活動における評価の内容

	家庭生活 N=317	職業 N=325	社会的活動 N=282
自分の価値観を形成できた	42.7	19.1	36.6
専門的知識や技能が身に付いた	18.9	48.6	6.0
よい友人ができた	15.1	0.9	13.1
生きていく上での精神的な支えを得た	12.9	5.2	5.0
人との付き合い方が身に付いた	4.4	8.0	20.2
校風が身に付いた	2.8	0.6	3.2
社会的に評価の高い大学を出た	1.6	9.2	6.7
個人的に卒業生に助けられた	1.3	1.2	1.1
リーダーシップが身に付いた	0.3	2.2	5.3
よい教員と出会うことができた	0.0	2.8	0.7
同窓会の存在に助けられた	0.0	2.2	2.1

(2) 日本女子大学の生活への満足度

・「友人関係」に満足、「施設・設備」に不満 次に、日本女子大学での生活にどの程度満足していたか、8項目について4段階で回答を求めた(表1-18)。「非常に満足」の比率でみると、「友人関係」「校風」「サークル・クラブ活動」「授業やゼミなど」「教員の指導」「教員との交流」「施設・設備」「職員の学生に対する対応」の順に並んでいる。中でも、「友人関係」に「満足」(「非常に満足」+「どちらかといえば満足」という者は90.0%にのぼり、満足度が非常に高い。これらの満足度に関して学部別にみても、「教員との交流」「施設・設備」の項目で異なる傾向がみられる。つまり、「教員との交流」については、家政学部では「満足」(「非常に満足」+「どちらかといえば満足」)が58.0%であるのに対し、文学部では47.0%と11ポイント低い。また「施設・設備」では、家政学部で「どちらかといえば不満」(家政学部：43.7%、文学部：32.6%)が多い。

表1-18 日本女子大学の生活への満足度

	友人関係	校風	サークル	授業やゼミ	教員の指導	教員との交流	施設・設備	職員
N	501	495	471	499	497	493	497	489
非常に満足	32.1	17.6	15.6	9.4	9.3	7.9	4.4	4.3
どちらかといえば満足	57.9	69.3	50.7	67.4	63.8	45.2	52.8	69.2
どちらかといえば不満	9.0	12.1	28.0	20.8	23.7	41.4	38.8	24.5
非常に不満	1.0	1.0	5.7	2.4	3.2	5.5	4.0	2.0

(3) 大学時代の友人との関係

・現在つきあいがある者は6割 では、卒業後20年ほど経過した現在、大学時代の友人はどのような存在になっているのだろうか。「あなたは現在、大学時代の友人とどのくらいつきあっていますか」という質問に4段階で回答を求めた(表1-19)。その結果、「よくつきあっている」22.2%、「まあつきあっている」40.2%の合計62.4%が、大学時代の友人とつきあっていることがわかる。一方、「まったくつきあっていない」者は3.7%にすぎない。

・今後つきあいを続けたい者は9割 さらに、「大学時代の友人との関係を、どのようにお考えですか」とたずねたところ(表1-20)、「とても重要であり、大事にしていきたい」が38.7%、「何らかの形で付き合いは続けていきたい」が49.5%で、両者で88.2%を占める。多くの者が大学時代の友人関係を重視していることがわかる。

表1-19 大学時代の友人との
つきあい N=513

よくつきあっている	22.2
まあつきあっている	40.2
あまりつきあっていない	33.9
まったくつきあっていない	3.7

表1-20 友人関係についての希望 N=511

とても重要であり、大事にしていきたい	38.7
何らかの形で付き合いは続けていきたい	49.5
大学時代の友人関係よりも、今の人間関係を大事にしたい	10.2
その他	1.6

(4) 教員の影響

・教員から影響を受けた者は5割 次に、教員との関係についてみてみる。教員から受けた影響の有無について「あなたは大学時代の先生に、どの程度影響を受けましたか」という質問を設け、4段階で回答を求めた(表1-21)。その結果、影響を受けた者(「非常に影響を受けた」+「少し影響を受けた」)は53.4%、受けなかった者(「あまり影響は受けなかった」+「ほとんど影響は受けなかった」)は46.6%と、ほぼ半々である。

表1-21 大学時代の教員の影響 N=508

非常に影響を受けた	13.6
少し影響を受けた	39.8
あまり影響は受けなかった	35.8
ほとんど影響は受けなかった	10.8

・研究や仕事への姿勢、問題解決の方法、女性の生き方に影響 さらに、影響を受けた者に対して、その内容を8項目設定し、それぞれについて回答を求めた(表1-22)。その結果、「研究や仕事に対する姿勢を学んだ」「ものごとの考え方や学び方を学んだ」に「あてはまる」と答えた者が多く、「すこしあてはまる」と合計すると9割以上になる。また、女性教員の影響が強いこともうかがえる。この傾向はとくに文学部で多くみられる。

表1-22 大学時代の教員から受けた影響の内容

	姿勢	考え方	女性の生き方	女性のよさ	気配り	励まし	男性の生き方	男性のよさ
N	260	258	247	237	242	239	231	234
あてはまる	52.7	48.8	34.8	22.8	19.4	19.2	4.8	2.1
すこしあてはまる	39.6	43.8	41.3	37.1	32.2	28.9	16.9	15.4
あまりあてはまらない	6.5	6.2	16.6	26.6	36.8	38.5	45.4	48.7
あてはまらない	1.2	1.2	7.3	13.5	11.6	13.4	32.9	33.8

注) 表頭の項目は下記の通りである。

- 「姿勢」：研究や仕事に対する姿勢を学んだ
- 「考え方」：ものごとの考え方や学び方を学んだ
- 「女性の生き方」：女性教員から生き方を学んだ
- 「女性のよさ」：女性教員から女性のよさを学んだ
- 「気配り」：人間関係の持ち方、気配りを学んだ
- 「励まし」：自分に自信がもてるように励まされた
- 「男性の生き方」：男性教員から生き方を学んだ
- 「男性のよさ」：男性教員から男性のよさを学んだ

(5) 娘の日本女子大学入学に関する意見

・肯定的意見は7割弱 最後に、大学評価の1つの指標として、「今仮に、あなたに大学に入る年頃の女の子さんがいると仮定した場合、あなたはそのお子さんを母校に入学させたいと思いますか」という質問を設定し、下記の4項目のいずれかに回答してもらった(表1-23)。その結果、「母校に入学してほしい」という積極的な者は3.6%と少ないものの、「本人次第だが、母校に入学してくれたらうれしい」は64.5%と多くを占めている。一方、「本人次第だが、母校はすすめない」「母校はすすめない」の合計は31.9%である。

表1-23 娘の日本女子大学入学についての意見 N=501

母校に入学してほしい	3.6
本人次第だが、母校に入学してくれたらうれしい	64.5
本人次第だが、母校はすすめない	28.9
母校はすすめない	3.0

(6) まとめ

以上のように、大学での教育に関する評価について、5つの点から傾向を把握した。以下にこれらの結果についてまとめておく。家庭生活、職業、社会的活動の領域別に大学教育の影響をたずねた結果、家庭生活や社会的活動では価値観の形成が、職業では専門的知識や技能の獲得がとくに評価されている。大学生活では、友人関係についての満足度が非常に高く、現在でもつきあいがある者が6割以上を、今後もつきあいを続けていきたいという者が約9割を占める。教員の影響を受けた者は半分を占め、研究や仕事への姿勢、問題解決の方法、女性の生き方について学んだという回答が目立つ。娘の入学について肯定的意見が68.1%であることから、比較的大学教育の評価が高いといえるであろう。

5. 卒業生からの日本女子大学への希望

これまでの結果から、家庭生活、職業キャリア、社会的活動や、大学生活や大学教育をどのように捉えているのかについて、傾向が明らかになった。では、卒業生は、日本女子大学に対してどのようなことを希望しているのだろうか。大学の将来構想について8項目を設定し、あてはまる番号全てに○をつけてもらう方式で回答を求めた(表1-24)。以下ではその結果についてみていこう。

(1) 学習機会の提供

第1に、「卒業生や地域の人々のための学習機会の提供」が23.4%で最も高い。現在も、西生田生涯学習センターの運営、桜楓会あるいは民間教育産業での講座開設など、学習機会を提供してきている。しかし、社会的活動の結果からも明らかのように、大学開放講座や市民講座への参加など、成人の学習活動はさらに活発化することが考えられ、この点について大学が貢献していくことが期待されている。とくに目白や西生田のキャンパス周辺住民に対しては、開かれた大学として活用してもらえるよう、施設や教育機会の整備が必要であろう。

(2) 職業ネットワークの充実

2番目には「卒業生のための職業ネットワークの強化」である。本調査の回答からも明らかのように、卒業時の就職活動時(初職)に比べて、現職では大学は必ずしも積極的な意味をもっていない。回答者の多くは結婚や出産により職業キャリアが中断されており、さらに今後何か職業に就きたいと考えている者が多いこと、現在適当な仕事がないために無職である者も存在することから、再就職機会やそれに関する情報の獲得が望まれていると推測できる。これらのことから、学生に対してだけでなく、卒業生に対しても就業機会や情報が提供されるようなネットワークづくりが期待されると考えられる。

(3) 国際交流の活発化

3番目には「国際交流の活発化」である。海外の提携大学との留学プログラムは充実されつつあるが、さらにその枠を拡大することや、提携校以外の大学への留学機会の提供、帰国後のケアなどが期待されているのであろう。

(4) 施設・設備の充実

また「施設・設備の充実」もあげられる。大学評価の中でもこの項目の満足度は相対的に低い。とくに、実験系の学科をもつ家政学部では切実であろう。また、魅力的なキャンパスなどの教育環境は、大学評価への規定要因にもなりうる。キャンパスの整備、さらにはその内部の施設・設備の充実への希望が、あらわれているといえよう。

(5) 女子のみの高等教育機関としての存続

さらに、「男女共学化」について希望する者は1.9%とほとんどいないことから、女子大学としての存続が望まれているといえよう。先の結果からも、大学の影響として友人関係や女性教員の影響などが強いことが明らかである。女子大学では、よきモデルとしての女性教員や友人と接する機会が多いことから、卒業生は「女子大学」を肯定的に捉えているようである。しかしその一方で、現実の社会を考慮すると、女子のみということがマイナスに働く場合もあるだろう。とくに、職業ネットワークの点ではその傾向が強いといわれている。このような弱みを克服しつつ、反対に女子大学ならではの強みを生かして存続していくことが、期待されているようである。

(6) まとめ

以上のように、卒業生からの日本女子大学への希望としては、「卒業生や地域の人々のための学習機会の提供」「卒業生のための職業ネットワークの強化」など、OG対象の様々な機会や情報提供を求めているものが上位にあげられている。また、「国際交流の活発化」「施設・設備の充実」「職業に役立つ教育内容の充実」を求める声もある。一方、「大学院の充実」「学部や学科の増設」「男女共学化」などについては、積極的な意見はみられなかった。

表1-24 日本女子大学の将来への希望 N=486

卒業生や地域の人々のための学習機会の提供	23.4
卒業生のための職業ネットワークの強化	18.9
国際交流の活発化（留学機会の拡大，海外大学との連携の充実）	17.3
施設・設備の充実	13.3
職業に役立つ教育内容の充実	10.8
大学院の充実	8.4
学部や学科の増設	3.0
男女共学化	1.9
その他	3.0

6. まとめと今後の課題

これまで、回答者の家庭生活，職業キャリア，社会的活動，大学評価，卒業生の大学への希望に関する結果を概観してきた。これらの結果から以下のことがあげられる。

第1に、大学での生活は4年という短い期間ではあるが、そこで形成された友人関係や価値観は卒業後の貴重な財産となっている。そして、家庭生活，職業キャリア，社会的活動など様々な場面で生かされており、大学卒業後20年を経た卒業生にとって、大学教育は生活の基盤を形成する上で大きな役割を果たしている。

第2に、大学は、学生対象だけでなく、卒業生，地域社会や生涯学習者，今後入学者となる可能性のある高校生に対して，様々なニーズにこたえていく必要があるということである。今日の生涯学習社会，女子の社会進出などの状況からも，大学の果たす役割はますます重要であろう。

そして，第3に，今後も優れた女性を社会に輩出し，様々な場面でリーダーシップを発揮できる能力を形成できるような大学教育を提供していくことが重要であろう。

今後は，本調査に関してさらに詳細な分析をすすめ，共学大学女子卒業生と比較検討を行い，女子大学の影響・存在意義を明確にしていきたい。

【参考文献】

- 青井和夫編著 1988, 「高学歴女性のライフコース——津田塾大学出身者の世代間比較——」 勁草書房。
- 柏木恵子 1980, 「東京女子大学卒業生の生活と意見——1978年「大学卒業後の諸活動と意識に関する調査」報告——」 東京女子大学比較文化研究所。
- 牧野暢男・村松幹子 1994, 「卒業生の大学評価——日本女子大学教育学科の事例——」 『日本女子大学紀要 人間社会学部』第4号, 249～260頁。

日本女子大学女子教育研究所 1968, 『女子の生涯教育』国土社。

【附記】

本調査実施にあたっては多くの方々に多大なご協力をいただきました。卒業後20年近く経過している卒業生に調査を依頼するにあたり、調査対象校の先生方に名簿を提供していただき、調査を実施することができました。データの都合上、大学名およびご氏名を掲載することはできませんが、対象校の調査担当の先生方や同窓会の方々、調査にご協力下さった卒業生の皆様に、紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

また、調査票の発送やデータの一時的処理作業には、遠藤丈広氏、赤嶺淳子氏をはじめ日本女子大学大学院生、学生の協力を得ました。

なお、本原稿は、『日本女子大学総合研究所ニュース』No.3（1997年、26～35頁「日本女子大学卒業生による大学教育の評価」）の再録である。表番号は、他の章と合わせるために、一部変更してある。

第2章 ライフコース（展望）パターン別にみた 卒業後の生活と意識

村松 幹子

1. はじめに

本章では、日本女子大学卒業生を対象とした調査結果から、ライフコース（展望）パターンを中心に、卒業生の大学卒業後の実態についてみてみたい。

女性のキャリア形成は、職業キャリアと家族キャリアの交差により、多様なライフコース（展望）パターンが生じる。筆者らの調査では、ライフコース（展望）パターンを択一式に回答してもらうだけでなく、各パターン上に家族キャリアにおけるライフイベント（結婚、出産）および職業キャリアに関するイベント（大学卒業後就職、結婚退職、出産退職、育児後参入）を組み合わせ、現在の段階について番号で回答してもらうところに特徴がある。このことにより、回答者自身がどのようなライフコースを歩んでおり、現在どの段階に位置しているのかが明らかになるのである（村松幹子1997「キャリア形成途上段階女性の雇用市場退出と一時退出の判別——ライフコース（展望）の視点から——」日本教育社会学会『教育社会学研究』第61集，103～122頁）。

2. ライフコース（展望）パターンの分布

表2-1にライフコース（展望）パターンの分布を示した。表の右端の数値から、G（結婚退職）、E（出産退職、育児後再参入）、C（結婚・出産し、仕事も継続）のタイプが多いことがわかる。年齢別にみると、調査時41歳のグループ（以下「41歳」と記す）では、G、E、D（結婚退職、育児後再参入）が、38歳のグループ（以下「38歳」と記す）では、G、C、Eが多い。では、回答者は現在ライフコース（展望）パターン上のどの位置に存在するのだろうか。表2-1の表頭に示したように、ここでは各パターンの矢印の右端に位置するグループを「キャリア確定段階層」（以下「確定層」と記す）、それ以外を「キャリア形成途上段階層」（以下「途上層」と記す）と呼ぶことにする。つまり確定層は結婚、出産、育児後の雇用市場への参入などのライフイベントを既に終えた（経験した）者であり、「途上層」はこれらのライフイベントをこれから迎える（希望している）者である。表2-2から明らかなように、41歳では94.1%、38歳では85.4%が確定層であり、40歳代になるとほとんどの者においてライフコースパターンが確定しつつあることがわかる。

表2-1の結果を勤続型から無職型の5パターンにまとめてみると（表2-3）、41歳では「再

表2-1 ライフコース（展望）パターンの分布

ライフコースパターン		キャリア形成途上段階 (途上層)	キャリア確定段階 (確定層)	現在の段階	41歳 N=		38歳		全体	
					255	254	509			
勤続型	A	結婚しない。 職業をもち続ける。	仕事 → 1	1	8.2	10.2	9.2	9.2		
	B	結婚し、出産しない。 職業をもち続ける。	仕事 → 2 結婚 → 3	2 3	0.4 4.7	0.0 4.7	0.2 4.7	4.9		
	C	結婚し、出産する。 職業をもち続ける。	仕事 → 4 結婚 → 5 出産 → 6	4 5 6	0.0 0.0 12.2	3.1 1.2 14.2	1.6 0.6 13.2	15.4		
再参入型	D	結婚し、出産する。 結婚で職業を離れ、 育児後再び職業に就く。	仕事 → 7 結婚 → 8 出産 → 9 仕事 → 10	7 8 9 10	0.4 0.0 2.4 13.7	0.0 0.4 3.5 6.7	0.2 0.2 2.9 10.2	13.5		
	E	結婚し、出産する。 出産で職業を離れ、 育児後再び職業に就く。	仕事 → 11 結婚 → 12 出産 → 13 仕事 → 14	11 12 13 14	0.0 0.0 1.6 15.3	0.4 0.0 5.1 11.4	0.2 0.0 3.3 13.4	16.9		
退職型	F	結婚し、出産しない。 結婚で職業を辞める。	仕事 → 15 結婚 → 16	15 16	0.4 2.7	0.0 1.2	0.2 2.0	2.2		
	G	結婚し、出産する。 結婚で職業を辞める。	仕事 → 17 結婚 → 18 出産 → 19	17 18 19	0.0 0.4 19.2	0.4 0.0 22.5	0.2 0.2 20.7	21.1		
	H	結婚し、出産しない。 出産で職業を辞める。	仕事 → 20 結婚 → 21 出産 → 22	20 21 22	0.0 0.0 8.6	0.0 0.0 12.6	0.0 0.0 10.6	10.6		
後半就職型	I	職業に就かず、 結婚、出産する。結婚後 初めて職業に就く。	結婚 → 23 出産 → 24 仕事 → 25	23 24 25	0.0 0.0 0.8	0.0 0.0 0.8	0.0 0.0 0.8	0.8		
	J	職業に就かず、 結婚、出産する。育児後 初めて職業に就く。	結婚 → 26 出産 → 27 仕事 → 28 29	26 27 28 29	0.0 0.4 0.0 3.9	0.0 0.0 0.0 0.0	0.0 0.2 0.0 2.0	2.2		
無職型	K	職業に就かない。 結婚する。出産しない。	結婚 → 30 31	30 31	0.0 0.0	0.0 0.4	0.0 0.2	0.2		
	L	職業に就かない。 結婚し、出産する。	32 結婚 → 33 出産 → 34	32 33 34	0.0 0.0 4.7	0.0 0.4 0.8	0.0 0.2 2.8	3.0		

注) 単位：列和に対する%

参入型」(33.7%)「退職型」(30.8%)「勤続型」(25.7%)、38歳では「退職型」(37.4%)「勤続型」(33.5%)「再参入型」(26.8%)の順となっている。この2つの年齢層では、ちょうど「勤続型」と「再参入型」の比率が入れ替わったような数値になっており、38歳の方が「勤続型」が

表2-2 確定層と途上層の分布（年齢別）

キャリア段階	年 齢	41歳 N=255	38歳 N=254	計 N=509
確定層		94.1	85.4	89.8
途上層（未婚・結婚希望）		1.2	3.9	2.6
途上層（既婚・出産希望）		0.8	2.0	1.3
途上層（育児後就職希望）		3.9	8.7	6.3

注) 単位：列和に対する%，以下の表でも同様。

表2-3 ライフコースパターンの分布（年齢別）

パターン	年 齢	41歳 N=253	38歳 N=254	計 N=507
勤続型		25.7	33.5	29.6
再参入型		33.7	26.8	30.2
退職型		30.8	37.4	34.1
後半就職型		5.1	0.7	2.9
無職型		4.7	1.6	3.2

$\chi^2 = 18.291$, d.f. = 4, Sig. = 0.001

注) 太字は占有率の高い数値，以下の表でも同様。

多くなっていること、41歳では「後半就職型」「無職型」が38歳よりも多いことが特徴としてあげられる。

3. 親の価値意識と本人のアスピレーション

このようなライフコース（展望）パターンは、どのように形成されてきたのであろうか。ここでは、まず、親の価値意識、本人のアスピレーションとの関連をみるため、母親のライフコース、父母の期待するライフコース、大学卒業時に希望していたライフコースなどとのクロス集計結果をみておきたい⁴⁾。

まず、母親のライフコースパターンについてみると（表2-4「計」）、退職型（31.0%）および無職型（24.8%）で6割弱を占めており、社会的・経済的背景や価値観の相違に伴い、娘世代とのライフコースとも異なる傾向がみられる。母親のライフコースと回答者のパターンの間には有意差がみられ、母親の生き方が娘に影響していることがうかがえる。第1に勤続型の卒業生の母親は勤続型（26.2%）が多いこと、第2に母親の退職・無職型の合計値は、勤続型45.4%、参入型52.2%、退職・無職型66.7%であり、本人が退職・無職型ほど比率が高いことがわかる。

両親が娘に期待したライフコースとの関連にも、同様の傾向がより明確にみられる（表2-5、表2-6）。親子のライフコース観が一致しているのは、勤続型で半数（父49.1%、母49.6%）、参入型で2割（父26.7%、母23.7%）、退職・無職型で6割（父67.5%、母60.8%）である。

4) ライフコース（展望）パターンを「勤続型」「参入型（再参入型+後半就職型）」「退職・無職型（退職型+無職型）」の3つのカテゴリーに再集計し、分析に用いている。

では卒業生自身は、大学卒業時にどのようなライフコース展望をもっていたのだろうか。表2-7によると、「勤続型」「退職型」「参入型」と続き、「無職型」を希望していた者はほとんどいない。現在のライフコースよりも仕事生活志向のライフコースを希望していたことがわかる。中でも現在参入型で大学卒業時に勤続型を希望していた者は36.7%を占めている。

表2-4 母親のライフコース

母	本人	勤続型 N=141	参入型 N=157	退職・無職型 N=186	計 N=484
勤続型		26.2	17.2	13.4	18.4
再参入型		15.6	14.0	13.4	14.3
退職型		27.7 (45.4)	24.2 (52.2)	39.3 (66.7)	31.0 (55.8)
無職型		17.7	28.0	27.4	24.8
後半就職型		12.8	16.6	6.5	11.5

$\chi^2 = 26.3$, d.f. = 8, Sig. = 0.001

注) () 内は、「退職型」と「無職型」の合計値。表2-5, 2-6, 2-7でも同様

表2-5 父親が期待したライフコース

父の期待	本人	勤続型 N=124	参入型 N=142	退職・無職型 N=163	計 N=429
勤続型		49.1	15.5	9.8	23.1
参入型 (再参入+後半就職)		9.7	26.7	9.2	15.1
退職型		34.7 (41.2)	51.5 (57.8)	67.5 (81.0)	52.7 (61.8)
無職型		6.5	6.3	13.5	9.1

表2-6 母親が期待したライフコース

母の期待	本人	勤続型 N=129	参入型 N=152	退職・無職型 N=171	計 N=452
勤続型		49.6	20.4	10.5	25.0
参入型 (再参入+後半就職)		18.6	23.7	16.4	19.5
退職型		25.6 (31.8)	48.0 (55.9)	60.8 (73.1)	46.5 (55.6)
無職型		6.2	7.9	12.3	9.0

表2-7 大学卒業時に希望していたライフコース

卒業時	本人	勤続型 N=145	参入型 N=166	退職・無職型 N=187	計 N=498
勤続型		68.3	36.7	25.7	41.8
参入型 (再参入+後半就職)		14.5	27.1	21.4	21.3
退職型		15.2 (17.3)	30.1 (36.1)	47.6 (52.9)	32.3 (36.9)
無職型		2.0	6.1	5.3	4.6

4. 卒業後の家庭生活, 職業キャリア, 社会的活動

以下では、ライフコース(展望)パターン別に、大学卒業後の意識と生活について、とくに結婚、職業キャリア、社会的活動経験を中心にみてみたい。

(1) 結婚

結婚については、勤続型とそれ以外で傾向が異なっている。勤続型では、第1に未婚者が多いこと（表2-8）、第2に結婚経験者でも初婚年齢が高い者が多いこと（表2-9）があげられる。「結婚に際しては、日本女子大学の卒業生ということが1つの有利な条件となっていると思いますか」については（表2-10）、全体としては「そうでもなかった」が多いものの、退職・無職型では「有利だった」（39.8%）という者が多い。

表2-8 結婚経験

結婚経験 \ パターン	勤続型 N=147	参入型 N=166	退職・無職型 N=188	計 N=501
既婚	61.2	94.0	98.9	86.2
死別離別	3.4	5.4	0.0	2.8
未婚	35.4	0.6	1.1	11.0

表2-9 結婚（初婚）年齢

結婚年齢 \ パターン	勤続型 N=95	参入型 N=165	退職・無職型 N=186	計 N=446
21～26歳	48.4	78.8	67.2	67.5
27～32歳	41.1	18.2	29.6	27.8
33歳以上	10.5	3.0	3.2	4.7

表2-10 結婚に際して日本女子大学卒が有利な条件となったか？

結婚時 \ パターン	勤続型 N=88	参入型 N=163	退職・無職型 N=181	計 N=432
有利だった	28.4	32.5	39.8	34.7
そうでもなかった	53.4	38.7	25.4	36.1
不利だった	1.1	0.6	0.5	0.7
どちらともいえない	17.1	28.2	34.3	28.5

(2) 卒業後初めて就いた職業

初職の仕事内容についてみると（表2-11）、勤続型では「専門」が、退職・無職型では「事務」が多いことが明らかである。参入型は「専門」「事務」に二分されている。入職経路は（表2-12）、参入型、退職・無職型がともに「個人的縁故」が多い。初職就職時には、参入型、退職・無職型で、半数の者が日本女子大学卒が「有利だった」と回答している（表2-13）。一方、勤続型は「有利だった」が3割弱、「そういうことはなかった」が半数である。

表2-11 初職の仕事内容

初職の仕事内容 \ パターン	勤続型 N=149	参入型 N=168	退職・無職型 N=180	計 N=497
専門	63.1	44.6	37.2	47.6
事務	24.2	42.9	52.8	40.8
販売	2.6	4.8	2.8	3.4
その他	10.1	7.7	7.2	8.2

$\chi^2 = 30.730, df = 6, Sig. = .000$

表2-13 初職の入職経路

初職の入職経路	パターン	勤続型 N=149	参入型 N=168	退職・無職型 N=179	計 N=496
個人的縁故		16.8	34.5	46.9	33.7
大学厚生課		22.1	29.2	22.3	24.6
先生・先輩の紹介		12.8	9.5	9.5	10.5
広告		12.1	9.5	7.3	9.5
家業、自営		8.0	4.8	3.9	5.4
その他		28.2	12.5	10.1	10.1

表2-13 初職就職時に日本女子大学卒が有利な条件となったか？

初職就職時	パターン	勤続型 N=148	参入型 N=168	退職・無職型 N=180	計 N=496
有利だった		29.1	50.0	50.0	43.8
そういうことはなかった		45.9	31.5	27.8	34.5
不利だった		1.4	0.0	1.1	0.7
どちらともいえない		23.6	18.5	21.1	21.0

表2-14 最初の勤務先の退職理由

初職の退職理由	パターン	勤続型 N=72	参入型 N=157	退職・無職型 N=177	計 N=406
結婚・育児等家事の都合		13.9	68.1	71.1	59.9
仕事内容への不満		16.7	3.9	3.5	5.9
労働条件が悪い		5.5	5.1	6.8	5.9
その他		63.9	22.9	18.6	28.3

初職を退職した者は、勤続型でも半数近くいるが、その時期に関しては参入型や退職・無職型の方が早く、24歳までに4割弱、27歳までに8割前後が退職している。退職理由としては（表2-14）、参入型、退職・無職型では、「結婚・育児等の家事の都合」が最も多く、それぞれ68.1%、71.1%を占めている。勤続型では「仕事内容への不満」が16.7%と、「結婚・育児等の家事の都合」（13.9%）を上回っている。

(3) 現在の職業

現職については、勤続型、参入型の者ののみについてみておこう。就業形態をみると（表2-15）、勤続型では「フルタイム」44.8%、「自営」31.3%、「パートタイム」23.9%、参入型では「パートタイム」43.7%、「自営」19.6%、「フルタイム」17.1%である。仕事内容は（表2-16）、勤続型、参入型ともに「専門」が多く、約半数を占めている。

現職への入職経路としては（表2-17）、勤続型では「コネ」（29.9%）、「家業・自営」（29.8%）が多く、参入型では「家業・自営」（28.3%）、「広告」（26.8%）、「コネ」（25.2%）が多くなっている。「先生・先輩の紹介」や「桜楓会人材銀行」など、日本女子大学関連のルートを利用した者はほとんどいない。このことは、表2-18の「現職就職時に日本女子大学卒は有利な条件となっていたか？」の結果からも明らかである。「そうではなかった」が勤続型では62.1%、参入型では47.8%を占めている。

表2-15 現職の就業形態

現在の就業形態	パターン	勤続型 N=67	参入型 N=158	計 N=230
フルタイム		44.8	17.1	29.4
パートタイム		23.9	43.7	33.0
自 営		31.3	19.6	24.4
な し		0.0	19.6	13.2

表2-16 現職の仕事内容

現職の仕事内容	パターン	勤続型 N=67	参入型 N=127	計 N=194
専 門		49.3	48.0	48.7
事 務		25.4	25.2	25.3
販 売		7.4	7.9	7.6
その他		17.9	18.9	18.4

表2-17 現職の入職経路

現職の入職経路	パターン	勤続型 N=67	参入型 N=127	計 N=194
家業、自営		29.8	28.3	29.1
コネ		29.9	25.2	27.6
広告		17.9	26.8	22.4
先生・先輩の紹介		3.0	1.6	2.1
桜楓会人材銀行		1.5	2.4	2.0
その他		17.9	15.7	16.8

表2-18 現職就職時に日本女子大学卒は有利な条件となったか？

現職就職時	パターン	勤続型 N=58	参入型 N=113	計 N=171
有利だった		12.0	23.9	17.9
そうではなかった		62.1	47.8	55.0
不利だった		0.0	1.8	0.9
どちらともいえない		25.9	26.5	26.2

表2-19 現在有職の理由

現在有職の理由	パターン	勤続型 N=143	参入型 N=137	計 N=280
生活の維持、貯蓄		32.2	23.4	27.6
能力をいかしたい		29.4	21.2	24.6
生活に変化、充実感		11.2	14.6	13.7
家業だから		5.6	18.2	12.6
自分の収入のため		10.5	13.9	11.9
働くのが好き、社会貢献		4.8	7.3	5.8
その他		6.3	1.4	3.8

注) 多重回答

現在有職である理由について、上位3項目をみてみよう（表2-19）。勤続型では「生活の維持、貯蓄」（32.2%）、「自分の能力を生かしたいから」（29.4%）、「生活に変化があって、充実感がもてるから」（11.2%）、参入型では「生活の維持、貯蓄」（23.4%）、「自分の能力を生かしたいから」（21.2%）、「家業だから」（18.2%）である。いずれのタイプでも、経済的理由による者と、生きがいとして仕事をもつ者とに分かれている。

今後については（表2-20）、勤続型、参入型とも「今の仕事をそのまま続けたい」者が6割と多い。次いで「やめるわけにはいかない」が2割、「他の職に移りたい」が1割を占めている。

表2-20 今後の職業について

今後の職業	パターン	勤続型 N=142	参入型 N=132	計 N=274
他の職に移りたい		14.1	12.1	13.1
今の仕事をやめるわけにはいかない		19.0	20.5	19.7
そのまま続けたい		59.9	59.8	59.9
その他		7.0	7.6	7.3

(4) 社会的活動

次に、社会的活動について、過去にしたことがあるもの、現在しているもの、今後してみたいものにわけてみておきたい。表2-21～表2-23から明らかなように、勤続型とそれ以外で傾向が異なっている。勤続型では過去に「大学開放講座、市民講座」を受け、現在は「趣味や資格を生かした活動」を行っている者が多い。他方、参入型、退職・無職型では、過去、現在とも「各種地域活動」が多い。これは、PTA活動など、子どもの学校関連の活動に従事しているものと推測できる。今後行いたい活動としては、いずれのタイプでも、「大学開放講座・市民講座」「趣味や資格を生かした活動」「ボランティア活動」の比率が高い。

表2-21 社会的活動：過去にしたことがあるもの

社会的活動（過去）	パターン	勤続型 N=128	参入型 N=217	退職・無職型 N=218	計 N=563
各種地域社会活動		19.5	39.2	41.8	35.7
趣味や資格を生かした活動		23.5	23.0	28.5	25.2
大学開放講座・市民講座		27.5	20.3	16.5	20.4
ボランティア活動		21.1	10.6	9.6	12.6
市民活動・住民活動		2.2	3.7	1.8	2.7
宗教活動		3.1	1.4	1.8	2.0
社会的に承認された活動		3.1	0.9	0.0	1.1
その他		0.0	0.9	0.0	0.3

注) 多重回答

表2-22 社会的活動：現在しているもの

パターン	勤続型 N=124	参入型 N=187	退職・無職型 N=185	計 N=496
社会的活動（現在）				
各種地域社会活動	21.8	42.2	48.7	39.5
趣味や資格を生かした活動	47.6	35.3	28.1	35.7
ボランティア活動	8.1	9.1	9.2	8.9
大学開放講座・市民講座	8.1	5.9	8.1	7.3
宗教活動	4.7	2.7	3.8	3.6
市民活動・住民活動	6.5	1.6	0.5	2.4
社会的に承認された活動	1.6	2.1	0.5	1.4
その他	1.6	1.1	1.1	1.2

注) 多重回答

表2-23 社会的活動：今後行いたいもの

パターン	勤続型 N=211	参入型 N=234	退職・無職型 N=316	計 N=761
社会的活動（今後）				
大学開放講座・市民講座	27.0	28.3	28.5	28.0
趣味や資格を生かした活動	25.6	27.8	29.7	28.0
ボランティア活動	27.9	25.6	24.4	25.6
社会的に承認された活動	10.4	9.8	7.9	9.2
各種地域社会活動	3.2	4.7	5.4	4.6
市民活動・住民活動	5.1	2.1	2.5	3.2
宗教活動	0.8	1.7	1.3	1.3
その他	0.0	0.0	0.3	0.1

注) 多重回答

5. 大学生生活

最後に、大学生生活の経験や大学に対する意見について、友人関係、教員との関係、大学への希望などを中心にみてみよう。

(1) 友人関係

まず、大学時代の友人との交流について程度をたずねた結果（表2-24）、交流がある者が6割を占めている。中でも参入型の者は67.8%と他のタイプよりも交流がある者の比率が高い。大

表2-24 大学時代の友人との交流

パターン	勤続型 N=149	参入型 N=168	退職・無職型 N=189	計 N=506
大学時代の友人との交流				
よく交流がある	21.5	23.2	21.7	22.1
まあ交流がある	38.3 (59.8)	44.6 (67.8)	38.1 (59.8)	40.3 (62.4)
あまり交流がない	33.6	29.8	37.6	33.8
全く交流がない	6.8	2.4	2.6	3.8

注) () 内は、「よく交流がある」「まあ交流がある」の合計値。

表2-25 大学時代の友人との関係

パターン 大学時代の友人との関係	勤続型 N=147	参入型 N=168	退職・無職型 N=189	計 N=504
重要であり大事にしたい	40.8	39.9	35.5	38.5
付き合いは続けたい	44.9 (85.7)	49.4 (89.3)	54.5 (89.9)	50.0 (88.5)
今の人間関係の方が大事	12.2	8.9	9.5	10.1
その他	2.1	1.8	0.5	1.4

注) () 内は、「重要であり大事にしたい」「付き合いは続けたい」の合計値。

学時代の友人関係について、「とても重要であり、大事にしていきたい」「何らかの形で付き合いは続けていきたい」「大学時代の友人よりも、今の人間関係を大事にしたい」のいずれかを選択してもらったところ、9割近くが友人関係を持続していきたいと思っていることが明らかになった(表2-25)。勤続型では、とても重要であり大事にしたいと思っている者も多い一方で、今の人間関係の方が大事と考えている者も他のタイプより多い。

(2) 教員との関係

次に教員との関係についてみてみよう。大学時代の先生から影響を受けたかどうか4段階でたずねたところ(表2-26)、5割以上の者が何らかの影響を受けたと感じている。これはライフコース(展望)パターンにかかわらず、同様の傾向がみられる。

ただし、教員から受けた影響の内容を8項目設定し、それぞれについてあてはまるかどうかたずねたところ、「女性教員から女性の生き方を学んだ」について、ライフコースパターンによって、異なる傾向がみられた(表2-27)。「あてはまる」の比率をみると、勤続型40.5%、参

表2-26 大学時代の先生からの影響

パターン 先生からの影響	勤続型 N=147	参入型 N=167	退職・無職型 N=187	計 N=501
非常に影響を受けた	16.3	14.4	11.2	13.8
少し影響を受けた	39.5 (55.8)	39.5 (53.9)	41.2 (52.4)	41.1 (53.9)
あまり影響は受けなかった	34.7	32.3	39.0	35.5
ほとんど影響を受けなかった	9.5	13.8	8.6	10.6

$\chi^2 = 5.345$, d.f. = 6, Sig. = .500

注) () 内は、「非常に影響を受けた」と「少し影響を受けた」の合計値。

表2-27 女性教員から女性の生き方を学んだ

パターン 女性の生き方を学んだ	勤続型 N=74	参入型 N=84	退職・無職型 N=88	計 N=246
あてはまる	40.5	33.3	30.7	34.6
すこしあてはまる	41.9 (82.4)	41.7 (75.0)	40.9 (71.6)	41.5 (76.1)
あまりあてはまらない	9.5	19.0	20.5	16.7
あてはまらない	8.1	6.0	7.9	7.2

$\chi^2 = 4.872$, d.f. = 6, Sig. = .560

注) () 内は、「あてはまる」と「すこしあてはまる」の合計値。

入型33.3%，退職・無職型30.7%と，仕事志向の者ほどあてはまる比率が高い。女性教員が，卒業後に職業生活を送る上での1つのロールモデルとなりえたといえるかもしれない。

(3) 娘の日本女子大学入学に関する意見

さて，卒業生は日本女子大学についてどのような評価を下しているのでしょうか。その1つの指標として，子どもを日本女子大学に入学させたいと思うか，4段階で回答を求めた（表2-28）。ライフコースタイプ別でそれほど差はないものの，仕事志向の者ほど，「入学してほしい」比率が高くなっている。参入型は「すすめない」が他のタイプに比べて4～5ポイント高い。

表2-28 子どもを母校に入学させたいと思うか？

母校への入学	パターン	勤続型 N=145	参入型 N=162	退職・無職型 N=187	計 N=494
入学して欲しい		16.3	14.4	11.2	13.8
本人次第だが入学してくれたら嬉しい		39.5 (55.8)	39.5 (53.9)	41.2 (52.4)	40.1 (53.9)
本人次第だがすすめない		34.7	32.3	39.0	35.5
すすめない		9.5	13.8	8.6	10.6

注) () 内は，「入学して欲しい」「本人次第だが，入学してくれたら嬉しい」の合計値。

(4) 大学への希望

最後に，日本女子大学の将来への希望について，8項目を設定し多肢選択で回答を求めた（表2-29）。ライフコースタイプ別にみると，勤続型では，卒業生や地域のための学習機会の提供，職業ネットワークの強化など，表の上位6項目までと希望が多岐にわたっている。参入型は上位5項目の希望が多く，中でも卒業生のための職業ネットワークの強化が望まれている。退職・無職型では学習機会の提供への希望が3割近くを占めている。

表2-29 日本女子大学の将来への希望

日本女子大学の将来への希望	パターン	勤続型 N=328	参入型 N=398	退職・無職型 N=424	計 N=1150
卒業生や地域の人々のための学習機会の提供		18.1	22.6	28.6	23.5
卒業生のための職業ネットワークの強化		15.2	21.6	19.3	19.0
国際交流の活発化		16.8	18.8	16.3	17.3
施設・設備の充実		14.3	11.1	14.6	13.3
職業に役立つ教育内容の充実		12.5	12.1	8.3	10.8
大学院の充実		12.2	6.0	7.5	8.3
学部や学科の増設		2.7	4.3	2.1	3.0
その他		6.1	1.2	1.9	2.9
男女共学化		2.0	2.3	1.4	1.9

注) 多重回答

6. まとめ

以上、本章ではライフコース（展望）パターン別に、親の価値意識や本人の大学卒業時アスピレーション、家庭生活、職業生活、社会的活動、大学時代の友人との交流、教員の影響、大学への希望との関係のみてきた。「ライフコース」という概念は、家庭生活や職業生活の諸要因と切り離すことは難しい。そのため、既婚か未婚か、結婚年齢、仕事内容などの項目の間には密接な関係が生じる。しかし、これらの項目だけでなく、社会的活動や教員からの影響、大学への希望などもライフコース（展望）パターンによって異なる傾向がみられることが明らかとなった。

第3章 面接調査対象者における卒業後の生活と意識

村松幹子

1. 面接調査の目的

本章では、先の質問紙調査対象者の内、17名を対象に実施した面接調査の結果について述べる。筆者らは、質問紙を用いた調査だけでなく、大学卒業後どのような生活をしてきているのか、現在大学での生活や大学教育についてどのようなことを考えているのかについて直接たずねることにより、より鮮明にそして深くその傾向を捉えることができると考え、面接調査を実施した。

2. 面接調査の方法

先の質問紙調査では、自由記述欄（「この調査の内容等に関するあなたのご意見・ご感想などがあれば、ご自由にお書きください」）および、面接調査協力者の氏名・連絡先記入欄を設けた。自由記述欄は、記述なし54.5%、少々記述あり20.4%、50%記述12.6%、100%記述12.5%であり、面接調査協力者は49.2%であった。100%記述している12.5%の内、首都圏在住⁵⁾の面接調査候補者79名（表3-1「協力者」）について、学年、学科、ライフコースパターン、現在の職業、家族状況などの項目を検討し、できるだけ多様なケースが対象者となるよう、表3-1の29名を面接候補者（表3-1「候補者」）として選択した。その内、「退職型」を除いた22名に依頼

表3-1 面接対象者

ライフコースパターン	協力者	候補者	対象者
勤続型	13	6	4
再参入型（現在フルタイム）	10	5	4
再参入型（現在パートタイム・自営）	28	11	9
退職型	27	7	0
不明	1	0	0
計	79	29	17

5) 今回は時間的制約から、面接調査対象者を首都圏在住者に限定した。

6) 「退職者」を除いたのは、以下の理由による。第1に今回の面接では主として大学教育と家庭生活、職業生活の関わりを中心にたずねるためであったこと、第2に「退職者」の調査票の自由記述からは、大学教育に関する意見が少なかったことである。

状と返信用はがきを送付した（資料2参照）（1997年3月13日～14日）⁹⁾。その後、依頼状の了承を得た者について具体的なスケジュールを設定、連絡し、最終的に17名を面接対象者として決定した（1997年3月22日、表3-1「対象者」）。

面接調査は、1997年3月29日～4月3日および4月19日～4月20日の7日間にわたって、小林多寿子と筆者の2名が実施した。場所は対象者の自宅近くの喫茶店（8名）、職場（5名）、職場近くの喫茶店（2名）、目白キャンパス（2名）で、1人2時間の予定で行った。内容としては主に、ライフヒストリー、大学受験、大学生活、就職活動、大学卒業後の生活、現在の生活、大学生活や教育への意見についてたずねた。

3. 面接対象者の属性

(1) 学年・学科

面接対象者の属性として、学年・学科、家族形態、ライフコースパターンについてみておきたい。まず、学年・学科については表3-2の通りである。面接調査時41～42歳のグループ（以下「41歳」と記す）が8名、38～39歳のグループ（以下「38歳」と記す）が9名とほぼ半数ずつである。学部別にみると家政学部7名、文学部10名である。

表3-2 面接対象者の学年と学科

学部・学科		学年		
		41歳	38歳	計
家政学部	児童	2	0	2
	住居	0	2	2
	被服	1	1	2
	家政経済	0	1	1
文学部	国文	2	0	2
	英文	1	1	2
	社会福祉	2	2	4
	教育	0	2	2
計		8	9	17

(2) 家族

面接対象者の出身は（表3-4「家族形態」）、三世代家族4名、核家族13名である。きょうだい構成は第一子7、一人っ子5、末子5名であった。現在は（表3-6「家族形態」）、四世代家族1名、核家族10名（含む母と夫と同居1）、夫婦のみ2名、単身4名である。現在結婚している者13名の内、見合い結婚は2名であり、夫とは大学時代や職場で出会った者がほとんどである。

(3) ライフコースパターン

面接対象者のライフコースパターンは、勤続型（A+B+C）10名、再参入型（D+E）7名と分布している（表3-3）。キャリア形成段階についてみると、17名中12名が既にキャリア確定段階に位置している。キャリア形成途上段階に位置している5名は、すべて勤続型に分類される者である。

表3-3 ライフコースパターン

ライフコースパターン		キャリア形成段階	キャリア形成途上段階 (途上層)	キャリア確定段階 (確定層)	現在の段階	人数
			①未婚・ (結婚希望)	②既婚・ (出産希望)		
勤 続 型	A	結婚しない。 職業をもち続ける。	1 → 仕事		1	1
	B	結婚し、出産しない。 職業をもち続ける。	2 → 仕事		2	1
			3 → 結婚 → 3 → 仕事		3	1
C	結婚し、出産する。 職業をもち続ける。	4 → 仕事		4	2	
		5 → 結婚 → 5 → 仕事		5	2	
		6 → 結婚 → 6 → 出産 → 6 → 仕事		6	3	
再 参 入 型	D	結婚し、出産する。 結婚で職業を離れ、 育児後再び職業に就く。	7 → 仕事		7	0
			8 → 結婚 → 8 → 仕事		8	0
E	結婚し、出産する。 出産で職業を離れ、 育児後再び職業に就く。	9 → 結婚 → 9 → 仕事		9	0	
		10 → 結婚 → 10 → 出産 → 10 → 仕事		10	3	
11	E	結婚し、出産する。 出産で職業を離れ、 育児後再び職業に就く。	11 → 仕事		11	0
			12 → 結婚 → 12 → 仕事		12	0
13	E	結婚し、出産する。 出産で職業を離れ、 育児後再び職業に就く。	13 → 結婚 → 13 → 出産 → 13 → 仕事		13	0
			14 → 結婚 → 14 → 出産 → 14 → 仕事		14	4

4. 職業キャリア形成

(1) 職業キャリア

ここでは、職業キャリア、現在の職業との関わり方、現在有職であることを可能にした要因についてみてみたい。

まず職業キャリアについてみてみよう(表3-4)。大学卒業後、面接対象者は全員就職をしている。就業形態はフルタイム16名、パートタイム1名、職種は専門8名、事務7名、販売2名である。初職を退職した経験がある者は13名で、その内、結婚や出産の都合により退職した者は半数以上の7名を占める。現在は17名全員が仕事をもっており、その就業形態はフルタイム8名、パートタイム5名、自営・フリーランス4名、職種は専門11名、事務4名、販売2名である。今後については、「今の仕事をそのまま続けたい」11名、「他の仕事に移りたい」3名、「今の仕事を辞めるわけにはいかない」3名である。結婚や出産以外の理由で初職を退職した6名の内4名が、「他の仕事に移りたい」「今の仕事を辞めるわけにはいかない」と回答している。

表3-4 職業キャリア

卒業後就職*		退職経験の有無・その理由*		現職の勤務形態・職種・希望*			家族形態	ライフコース*
フル タ イ ム 16	専門 8	有 7	結婚のため 1	パートタイム	専門	続けたい	夫・子3人	再参入
			出産・育児のため 2	パートタイム	専門	続けたい	夫・子3人	再参入
				パートタイム	専門	続けたい	夫・子2人	再参入
			その他 1	自営	事務	他に移りたい	夫・子3人	勤続
			仕事以外のことをしたい 1	フルタイム	専門	やめられない	単身	勤続
			魅力的な仕事がある他に 1	フルタイム	専門	他に移りたい	単身	勤続
			フリーに転向 1	自営	専門	続けたい	夫	勤続
	無 1		フルタイム	専門	続けたい	夫・子2人	勤続	
	事務 6	有 4	専攻や資格がいかせない 1	フルタイム	専門	やめられない	母・夫	勤続
			結婚のため 2	フルタイム	専門	続けたい	夫・子2人	再参入
				パートタイム	事務	続けたい	夫・子2人	再参入
		その他 1	パートタイム	事務	続けたい	夫・子2人	再参入	
		無 2		フルタイム	事務	他に移りたい	単身	勤続
	フルタイム		専門	続けたい	単身	勤続		
販売 2	有 1	出産・育児のため 1	自営	販売	やめられない	夫・子2人	再参入	
	無 1		フルタイム	販売	続けたい	夫・子2人	勤続	
パート1	事務 1	有 1	結婚のため 1	自営	専門	続けたい	夫	勤続

注1：数値は人数を示す。

注2：*の項目は質問紙調査の回答より、それ以外の項目は面接調査により得られたものである。

(2) 結婚・出産による一時退職

再参入型7名の内、6名が結婚・出産・育児により一時退職をしている。これらの者は、結婚当初から初職退職を考えていた者と、はじめから出産や育児による退職を望んでいたわけではない者に分かれている。例えば下に例を挙げるのは、周囲のサポートや保育園などの状況で仕事継続が困難でありながらも、できる限り退職せずに仕事を続けようと努力していた者である（ケース15a, 14）。しかしそのような葛藤の中で自らの意識が変化し、やはり育児のために退職を決意したケースである。

ケース15a：教育関連パートタイム（元小学校教員）

夫が家事には協力しないという考えをもっていることや転勤があるために、仕事を続けていくことは無理だろうと考えていました。妊娠6ヶ月まで働きましたが、おなかの子どもの方が気になって、クラスの子どもにも気持ちがいかなくなった自分に気づいて退職しました。

その後すぐに転職になり、落ち込む暇もありませんでしたし、辞めてよかったと思いました。

ケース14：社会福祉関係パートタイム（元児童厚生員）

1人目出産時に住んでいたところは保育園が発達していなかったもので、辞めようかとも考えましたが、両方の母親と夫に協力してもらって、仕事をしながら出産、育児をしました。しかし2人目の時に、母たちにまた犠牲を強いてしまうことや、子どもは好きなのに人の子ばかり面倒みていることに納得がいなくなってきました。母にも負担になっていましたし、母は子どもは自力で育てるという考えをもっていたので、育児休暇中悩みましたが、結局そのまま復帰せずに退職しました。退職したときにはほっとしたのと、残念な気持ちと両方ありました。でも朝食を子どもと一緒に食べられるのは、嬉しかったです。

(3) 再参入のプロセス

一旦初職を退職した者は、どのようなプロセスを経て、再び仕事をもつようになったのであろうか。自営3名は、結婚が1つの転機になっている。勤続型でフルタイム、あるいはフリーランス、自営の者は、資格を取得したり、実績を積むなどして、現在の立場に至っている（ケース9, 7, 13, 8a）。

ケース9：酒類販売自営

夫は百貨店に12年間勤務した後、実家の酒屋を継ぎました。私も酒に興味があったので、家業を手伝うことにしました。家業でも自分の位置をもちたかったので、6ヶ月間ワイン講習を受け、店にワインを置くことにしました。また、コンピューターを導入し、問屋への発注作業、新しい情報の取り入れなどを行っています。百貨店で勤務していた頃に学んだことも役立っています。

ケース7：住宅メーカー勤務

28歳の時にはじめの職場を退職した後、親戚の知り合いの紹介で今の会社に入りました。一級建築士の資格を取ったことで上司は本気だと認めてくれたらしく、正社員となりました。ちょうどそのころ女性に技術職で職階ができたため、いきなりそこに配属されました。途中入社で唯一、研究企画を担当しています。

ケース13：ペーパー・アーティスト

紙で立体をつくるのが趣味だったのですが、その内それを人に見せたくなり、グループ展に参加しました。1985年に個展を開いてから、依頼がくるようになりました。それから2年間は会社との2足の草鞋で、夜8時から夜中の2時半までを製作にあて、翌朝9時半に出社するという生活を送りました。3・4年経った頃、これで食べていけると思い、退社してフリーになりました。イラストレーターは実は地味な仕事です。でも3日で慣れました。組織の中で仕事をするのもいい経験でしたが、今の方が自分に合っているみたいです。今はフリーになって10年になります。最近はアメリカで個展を開いています。売れる売れないはあまり気になりませんが、つまらない仕事を引き受けてしまうとストレスになります。成功しようと思ってやってきたわけではありませんが、自分の好きなものが評価されるのは嬉しい

です。

ケース8a：社会福祉法人勤務

卒業後2年間福祉施設で働き、その後15年間海外で過ごしました。母の死去の直前に帰国しました。職がないまま母に死なれると、大海原に放り出されると思い、とにかく仕事が欲しいと思いました。そこで、みどり会に登録し、現在の仕事を紹介してもらいました。海外生活での経験が役に立っています。

フルタイムで再参入した者は、経済的理由により就職している（ケース6a）。

ケース6a：生命保険会社勤務

結婚退職し、関西で過ごした9年間に、子どもを2人もうけ、マンションを購入しましたが、東京に転勤になりました。ちょうどバブルがはじけた頃で、マンションの価値が下がってしまい借り換えもできず、ローンを抱えて経済的ゆとりがなくなりました。母の大変さを見ていたので、私は専業主婦のつもりでいましたが、3年ほど前から働くしかないと思い、まずパートではじめました。とにかく収入が目的でした。ある日、家に届いたアンケートのはがきを冷やかに半分で出したところ声をかけてもらい、フルタイムで働くことになりました。

現在、パートタイムで働いている者は、就職斡旋機関への登録、新聞広告への応募など、情報を積極的にキャッチして職を得た者が多い（ケース15b）。

ケース15b：教育関連パートタイム

教員として再就職するには、35歳という年齢制限がありました。ちょうど末子が生まれたばかりの頃でした。上の子の小学校をみていて、私が教員をしていた頃より先生が忙しくなっていること、親が学校に批判的であることを感じ、学校に戻ることはやめようと思いました。下の子が幼稚園の年中の時、新聞で教育関係の出版社での添削在宅勤務に応募し、現在その仕事をしています。月3回テストが送られてくるので、それを1日6時間、3・4日かけて100人分を仕上げます。時給にすると200円くらいとペイは安いですが、仕事の満足度は大きいです。収入には手をつけていません。特に使いたい希望がありませんから。今は子どもへのしわ寄せを考えると、扶養家族控除の範囲内で働きたいと思っています。本部の方で週3日出て欲しいと言っていますが、それは下の子が1年生になってからにしたいです。下の子が中学生になったら、フルタイムにつくきっかけになるかもしれません。

初職を退職した後、現在パートタイムで就労している者には、2つの傾向がある。1つは、仕事が好きで家庭とのバランスをとりながらフルタイム並に働いている「準勤続型」タイプといえるグループである。このグループの者は、今後子どもが大きくなったらフルタイムの仕事に就きたいという希望をもっている（ケース17）。もう1つは、子どもも少し手が離れるようになり、自分の世界をもちたいという理由からパートタイマーとして働いているグループである。彼女たちに共通していることは、扶養家族の枠を超えないよう働き、職種や収入についてもあまりこだ

わらないという点である（ケース10, 12a）。とくに、男の子をもつ母親に、自分だけとり残されたような気がしたので仕事をはじめた、という者が目立った。

ケース17：保育園パートタイム

夫とは学生時代からの付き合いでしたが、早く結婚をしたいと言っていました。私は仕事をしたかったので、あまり早くしたくはなかったのですが、結局結婚し、地方に転勤になったので仕事をやめ、専業主婦になりました。その後も約1年半ごとに数カ所転勤になりました。結婚後、すぐに妊娠しました。すぐ仕事に復帰したかったので、いっぺんに産もうとつづけて3人産みました。子どもは自分で育てたかったし、思いがけず年の離れた子がもう1人生まれたので、ずっと専業主婦でした。仕事に就きたいという気持ちがあったので、「お金がない」と夫を説得し、下の子が2歳になったとき、今の仕事に就きました。夫は働くことには賛成していますが、仕事の関係で週末しか家にいられません。3番目の子が小さいとき、母が歩いて10分の所に越してきてくれたので、理想的だと思います。下の子が大きくなったら、フルタイムで働きたいと思っていますが、チャンスがあるかどうかわかりません。

ケース10：研究所パートタイム

子どもの幼稚園の知り合いから紹介されて、今の研究所に登録をしました。そこでデータ入力のアバイトをしたとき、担当の研究員がひっぱってくれて、今は国際交流課というところで週に3回働いています。勤務時間が柔軟で、昼は家に帰れるので、とても働きやすいです。他にやっていたパートは辞めて、今はこの仕事だけにしほりました。今はフルタイムで働くのは難しいです。夫は働くことには賛成してくれますが、3ヶ月に2回のペースで海外出張がありますし。でも週2日のオフの日には、以前よりも気軽に外に出られようになりました。特に上の子が中学に入学してから、自分の人生を生きなければ、と強く感じるようになり、子ども以外の関係を努めてつくるようにしています。女の子のいるお母さんは、母娘で買い物に行けるようですが、男の子だと自分だけ取り残されることが多くなりました。そういう時に自分のやれることがないと寂しいと思います。

ケース12a：流通関係パートタイム

今は友人と一緒に週に3日、物流センターのパートに出ています。夫は子どもに影響がなければいいと言っています。もう少し知的な仕事はないのかといわれますが…。毎日働く気持ちもないけれども、趣味や人付き合いのために、お小遣いが欲しいです。周りにもチョコチョコと仕事をしている人が多いです。家にずっといると、誰かとしゃべりたい、外に出たいという気持ちになるんです。子どもは中3と小5になり、部活で朝早く家を出て、塾から帰ってくるのは遅いので、以前よりも1人で家にいる時間がすごく長くなりました。扶養家族をはずれてまで働く気もないし、仕事に生きがいを見つけないとも思っていません。子どもがもっと大きくなったら、習ってみたいこと——手話、アートフラワーなど——がたくさんあります。

(4) フルタイム勤務を可能にしている要因

フルタイムで勤務している者は、どのような要因によって、それが可能となっているのだろうか

か。現在フルタイム勤務者8名の内、4名は単身者、1名は夫と自分の母との同居である。あとの3名は、夫と子ども2名との核家族である。彼女たちに共通しているのは、第1に子どもが未就学児から中学生までとまだ手がかかる段階にあること、第2に実母や義母と同居していたり、夫の協力などのサポート体制が整っていること、第3に本人が周囲のサポートを得るために明確な意志表示をしたり環境を整えるための努力をしていることがあげられる。さらに3名中2名は、初職から同じ職場（あるいは同じ職種）で働き続けているが、産休・育休制度整備の時期と自らの出産時期が重なるなどの幸運もはたらいている（ケース1、2）。

ケース1：都立高校教師

結婚後3年は義父母と別居でしたが、今は2世帯住宅で暮らしています。結婚する時「仕事はやめないから」といったので、夫は働くことについては賛成しています。また、義理の母がずっと家で洋裁をして働いていたことも影響していると思います。仕事をしていると、夫婦で仕事のことで話が盛り上がりたりして楽しいです。特に私が進路指導部だったときには、一般企業で働いている夫の意見が大変参考になりました。子どもは小4と小2です。上の子は生後8ヶ月から昨日まで保育園、学童保育で育ててもらいました。彼にとって今日は初めて自分1人で放課後を過ごす記念日です。子どもがもっと小さい頃は、姑に育児を頼むのが辛かったです。

ケース2：百貨店勤務

友人は結婚退職がほとんどでした。私もずっと続けようとは思っていませんでしたが、肩たたきのあるところには就職したくないと思っていました。就職先の同期はみんな結婚しても働き続けていましたし、結婚の時には経験のために共働きしてみようかなと思ったんです。夫は公務員で帰宅時間も規則的で、有給休暇も取りやすいですし、義母が小学校教員だったので、女性が働くことには違和感がなく、何も支障はありませんでした。妊娠した頃、やれるところまでやってみようと思い、出産予定日8週間まで出勤しました。その後育児休暇制度ができ、出産後1年間休暇が取れました。1歳児から保育園に入れるよう計画的に出産し、翌年職場復帰しました。産休で休んでいる間に育児時間勤務体制ができ、早い時間に帰れるようになりました。この制度ができて目の前がぱっと明るくなり、辞める理由がなくなりました。2人目の子どもは間をあげずに欲しかったので、8ヶ月後再び産休に入りました。その間に育児休暇が2年間取れるようになりました。夫は食事以外の家事は全面的にやってくれます。2人で50：50感覚でやっています。職場でもどのセクションでもいいから働かせてもらおうと割り切っています。今のセクションは個人で仕事をかかえる必要がないので精神的に楽です。私の場合、これらの制度がなかったら続けていなかったかもしれません。子どもにしわ寄せがたって、これでいいのかな、と考えたと思います。

これらのケースから、子どもをもちながらフルタイムで働くのには、勤務先の制度的な充実、さらに周囲の理解やサポートが不可欠なことがわかる。この点については、現在の就業形態がパートタイムの者5名と比較してみると明らかである。この5名は夫が単身赴任で地方や海外にすることが多いケースや、夫方や自分の両親が地方在住で物理的にサポートを受けがたい状況にある者が多い。

(5) 現在の仕事との関わり方

面接調査では、勤続型10名の内、現在の生活を楽しんでいる者と、生活の中で仕事の占めるウェイトが大きく負担になっている者の2つに明確に分かれている印象を受けた(ケース16)。前者は仕事とプライベートのリズムができ、自らのライフスタイルがある程度確立している者が多い。他方、後者は病気を経験したケースが多い。

また、勤続、再参入にかかわらず、これまでの仕事や活動が、様々な形で広がりを見せているケースが多く見られた。再参入の者にはフルタイムにつきたいと思っている人がいる一方で、今のペースを保ち続けたい者も多い(ケース5)。

ケース16：フリー編集者

今は積み重ねの時期は過ぎて、身を削っているという感じが強くて辛いです。でも慣れたのでなんとも思わなくなりました。1分後にも辞めたいという感じですが、このままでも不満ではありません。一生無理だと思いますが、ゴルフ三昧、デパートめぐりで買い物三昧など、有閑マダムになってみたいです。

ケース5：建築設計事務所自営

フルタイムに移るか何回か考えましたが、お金と引き替えに自由を手に入れて、今はその時間でライフワークである活動ができたり、映画を見に行ったりできます。今さら堅苦しいサラリーマン生活には戻りたくありません。

5. 出身高校の影響

面接調査で大学入学時の様子をたずねたところ、多くの者が出身高校によるカラーの違いの存在を指摘した。そしてそのことが友人選択にも影響していることが明らかになった。そこで、出身高校、志望大学、大学の友人とのつきあいについて表3-5にまとめた。内部進学者を除くと、

表3-5 出身高校・志望大学・友人とのつきあい

出身高校		第一志望大学	大学時代の友人とのつきあい*	
			現在	今後
県立	共学	慶應義塾大学 1 東京女子大学 1	よくつきあっている 3 あまりつきあっていない 1	とても重要、大事にしたい 3 今の人間関係の方が大事 1
	別学	公立大学 1 早稲田大学 1		
都立	共学	日本女子大学 2	よくつきあっている 3 あまりつきあっていない 4	とても重要、大事にしたい 4 つきあいは続けたい 4
		お茶の水女子大学 2		
		共学大学(大学名不明) 1		
		早稲田大学 1		
		国立大学(大学名不明) 1		
附属	附属豊明幼~	日本女子大学 6 (内部進学)	よくつきあっている 1 まあつきあっている 3 あまりつきあっていない 2	とても重要、大事にしたい 1 つきあいは続けたい 1 今の人間関係の方が大事 3 N.A. 1
	附属豊明小~			
	附属中~			

注：*の項目は質問紙の回答より、それ以外の項目は面接調査により得られたものである。

日本女子大学を第1志望としていた者は2名であり、国公立大学志望4名、他の私立大志望5名(内、共学志望4名)である。

出身高校は、県立4名、都立7名、附属校6名である。県立、都立高校出身者は日本女子大学が第一志望であった者は少ない。入学当初、共学出身者は女子のみの大学に入ったことである種のカルチャーショックを受けたが、現在振り返ってみると「女子大」という環境を肯定的に捉えているという者が多い(ケース3a, 6b, 12b)。

ケース3a：化学メーカー勤務(都立高校出身)

入学式で全員女なのでびっくりしました。それまで、共学が当たり前の世界でした。共学では面倒くさいことは全て男子がやっていましたが、女子大では誰かがやらなければなりませんでした。その内、女性だけの環境が楽しくなってきました。

ケース6b：生命保険会社勤務(都立高校出身)

入学した頃は、初めての女子のみの環境で1年間はとまどいました。特にすぐグループになりたがるところに違和感を感じました。地方からの人とも附属からの人ともなじまず、疎外感を味わいました。でも2年生の時にに入ったサークルで友人ができ、今でも付き合いがあります。

ケース12b：流通関係パートタイム(県立高校出身)

女の子だけがなじまず、抵抗があり、なれるまでに時間がかかりました。気がつくとも3・4ヶ月男の人と話していないという感じで、男の人と話そうと思うと、どこかに出かけて行かねばならないというのは新たな発見でした。少し後悔しましたが、1年経つと慣れました。附属と都立校と県立高校では、交流がなかったわけではありませんが、それぞれにカラーがありました。附属は華やかで趣味も乗馬、スキー、ピアノ、テニスなどで違うと思いました。高校が私服だったせいか服装もおしゃれで化粧も上手でした。都立高校出身者はパーマや化粧はなしで、紺のブレザーとチェックのスカートと地味でした。地方の高校出身者は、どっちつかずで、おしゃれをしたいけど何を着ていいかわからないといった感じでした。友だちは同じような子が多かったです。卒業後もずっとつきあっています。

他方、日本女子大学の附属出身者は、「女子大学」に対して愛校心があり肯定的評価をしながらも、否定的な面も指摘している者が多い。それはとくに、男性とのコミュニケーションがいまだにスムーズにいかない、男性の方が勝っていると思っていた時期があったなど、コンプレックスを抱えた経験について語った者が多かった(ケース8b, 11a)。

ケース8b：社会福祉法人勤務(附属高校出身)

女子のみで育ったことを引きずっています。女の人と仕事をするのはできますが、男の人とだと緊張します。前の職場でも、男性の人たちとうまく仕事ができませんでした。

ケース11a：塾経営(附属高校出身)

今でも女子のみで育った影響が残っています。初対面の男の子でもなかなか口がきけませ

ん。女の子といることがものすごく楽しいのです。それから、同年代より年上とか年下の方が話しやすいというのもあります。同年代は子どもっぽくみえてしまいます。

友人関係は、出身高校および偶然性によって形成されている過程が明らかになった。出身高校の共通性は、ファッション、趣味などによって顕著にあらわれ、自然と都立高校、県立高校、附属高校の3グループに分化していった場合が多いようである。さらには入学式で座席が前後だった、学籍番号が隣同士だったなどの偶然が、友人になるきっかけだったという者も多い。現在、大学時代の友人とのつきあいについては、附属校出身者よりも、県立および都立校出身者の方がつきあっている者が多く、とても重要と感じている傾向が強い。また、どちらかという仕事生活志向でない者の方が、友人関係が継続している。

6. 日本女子大学への意見

面接対象者は、大学に対して客観的に肯定的・否定的両面の意見を述べてくれた。これらの意見は、仕事生活において、家庭生活において、地域社会においてと評価が微妙に異なっている。「日本女子大学」というネームバリューがプラスにもマイナスにも働くことを体験的に感じ取っているようだった。それでも共通しているのは、母校に対してどの人も愛校心を少なからずもっていることである。ただしこれは、面接に参加してくれたというバイアスがかかっていることを差し引いて考える必要がある（ケース4, 11b, 3b）。

ケース4：情報サービス会社勤務

男性社会は学閥中心のネットワークが充実しているのに比べて、女性の場合は転勤などで切れてしまいます。日本女子大学ではもっと情報交換をして、同じような境遇の人が出会えるネットワークが必要です。日本女子大学の評価は良妻賢母のイメージが強く、仕事をしていく上ではネガティブでした。事業系より管理系、事務系というイメージが拭いきれないのです。

ケース11b：塾経営

日本女子大学は一般的にできあがったイメージがあるので、安易に出したくないと思うことがあります。人間性より先に、そのイメージに従って評価されてしまうような気がするのです。

ケース3b：化学メーカー勤務

役員の奥さんに日本女子大学OGが多いので好意的です。同窓だとわかると互いの垣根がとれる感じですよ。

以上のように、面接調査では質問紙からは読みとることのできなかった様々な情報を得ることができた。とくに出身高校によるカラーの差があることは多くの者が指摘しており、それまでの環境の影響が大きいことがわかる。しかし、卒業後には日本女子大学の社会的評価を似たような形で受けていることは興味深い。

第4章 卒業生たちのライフストーリー

小林多寿子

本章では、17人の卒業生におこなったインタビューをライフストーリーとして再構成してしめそう。彼女たちは、1978年から1981年の卒業生で、先に実施した質問紙調査の自由回答欄にいろいろなことを書き記してくれた人たちである。たくさん書いたということは、つまり表現できることを多くもっていると予想して、とくに首都圏に住む人たちで、時間の都合のついた方にインタビューを申し込み、その結果、17人の方とのインタビューが実現できた。

彼女たちに尋ねたことは、生い立ちや受験の経緯、そして大学時代をどうすごしたかという学生生活、さらに仕事や結婚、家庭生活という卒業後のことである。それらにくわえて、日本女子大学を卒業したことで、どのような評価をうけたか、いま大学をどう考えているかについて語ってもらった。インタビュー項目を用意して、それにしたがって厳密に問いかけていくという形式ではなく、むしろこのようなテーマのなかで、彼女たちの話したいことを語ってもらうという点を重視した。したがって、人によって、分厚く語ったところとあまり語らなかったところがあったことはたしかである。しかし、そこそそがそれぞれの個性的な経験が表現されたものとして尊重し、彼女たちのライフストーリーとして組み立て直してある。

語ってくれた17人は、いま、30代の終わりから40代にさしかかったところである。既婚者も未婚者も離婚した人もある。子どもも4人ある人から3人、2人、現在妊娠中の人、そしてこれからほしいと思っている人もある。仕事も、卒業後、一貫して継続している人、専門性を高めた人、フリーで活躍している人もあれば、自営業の人、専業主婦からフルタイムやパートタイムの仕事をはじめた人、これから新しい仕事をめざそうとしている人もある。家庭生活も、三世大家族、核家族、夫婦二人暮らし、一人暮らしとそれぞれである。彼女たちの語る話には、40歳前後という年齢の女性たちが現代の日本社会でどのような状況にあるものなのかがしめされているであろう。

40年前後の人生のあいだに、大きな歴史的出来事や社会的事件にまきこまれた人はいなかった。しかし、長期にわたる海外生活や家業の倒産を体験した人、父や夫の転勤によりなんども引っ越しを経験した人、女子学生就職難時代をくぐりぬけたり、育児休業制度の確立の恩恵を受けた人などがあり、そのような経験が語られることは、日本の1950年代半ばに生まれた人たちが成長した時代を反映しており、また1970年代後半から80年代にかけて社会に出た人たちが直面したことがらを映しだしている。

日本女子大学について、すべてを手放しで肯定する人はだれもいなかった。それぞれが自分にとっての日本女子大学の意味を吟味し、反芻しながら、生きてきている。肯定的な評価と否定的

な評価をはっきりわけて語っている人が多いことが特徴であろう。アンヴィバレントな評価は、卒業後、社会で生活するなかで、他者の評価を知るうちにしだいに形成されてきたものである。それを受けとめて、自分なりの考えを語っているとおもう。

とくに附属校から日本女子大に入った人たちは、「日本女子大学」という冠のもとにすごした時間が長い分、当然のことながら、「日本女子大学」の刻印を深く受けている。学園時代の個人的な記憶と卒業後の社会的評価のはざまに、微妙に肯定と否定のあいだを揺れ動いているところがあるようだ。

今回の卒業生インタビューは、卒業生といっても、東京および東京近郊に住む人たちだけであった。そしてフルタイムにしろパートタイムにしろ、なんらかの仕事をもつ人が対象となっており、いわゆる専業主婦や無職の人はふくまれていない。その点で、けっしてその年次の卒業生を代表するものではないことは記しておかなければならない。ただ、インタビューの対象となった卒業生が学んだ学科は、8学科におよび、現在の生活スタイルも多様であるので、むしろ学科を超えて、17人のライフストーリーから、卒業後、16年から19年たった人たちの現在がみえてくるのではないかとおもう。

以下のライフストーリーは、語られた言葉をできるだけ活かしながらも、編集し、再構成したものである。[文中の「いま」や「現在」あるいは年齢や学年、年数は、インタビュー時点を基点とした表現である。また文章の構成と表現に関しては、本章の執筆者が責任を負っている。なお、それぞれのライフストーリーの番号は、本報告書の第2章のケース番号および資料の自由記述における番号と一致している。ライフストーリーの配列順は、第2章のライフコース分類に拠っている。]

1 都立高校教師 [被服学科卒]

広島市に生まれ、1歳半のとき、父の転勤で東京に来て、それ以来、東京で育ちました。中学は区立、高校は都立高校でした。もともと男子校の進学校で、生徒も、男子2、女1くらいの割合でした。高校時代は、水泳部にはいていたので、男の子たちといっしょに水泳ばかりやっていました。

高校3年の夏まで水泳をやっていて、受験勉強は一ヶ月くらいしかしなかったようにおもいます。高校で受けた家庭科の授業の印象が強かったのと、母が洋裁をやっていましたし、わたしも手先を使うことが好きだったことで、家庭科の先生になろうとおもっていました。

お茶の水女子大学と日本女子大の家政学部を受けて、日本女子大学の発表を見に行くと、あつたときはほんとうにうれしかったです。でも、ほんとうに女子大に行くのかと、入学式の前にはちょっと悩みました。入学後一年くらいは、女子ばかりのなかにいるのが苦痛でした。

でも、女子大にいて、いまはよかったとおもっています。なんでも自分でやらなければならないし、高校で男が多いところと、女子大と両方経験できてよかったとおもいます。もし共学にいていたら、自分が女であることを考えさせられたとおもいます。女の子でもなんでもやれるんだ、女子大のほうが元気だよといわれました。

被服学科では、真面目に授業にでました。専門の授業はおもしろかったし、95%はでました。材料学とか、繊維が大昔からどう使われてきたか、繊維の歴史から科学する授業とか、高校では歴史は嫌いでしたが、大学での歴史の授業はおもしろかったです。

教職課程をとりました。調理実習の授業がいまも残っています。和・洋・中すべてやり、材料もいいものを使っていました。そのとき同級生だった友人のうちに、正月に遊びにいったら、うちでつくるのと同じお節料理で、女子大で教わったことがいまにも続いているんです。テキストもまだもっています。

ゼミは20人くらいいましたが、一人一人好きなことをやっていました。ゼミの先生は、理路整然として、スライドを使って飽きさせない授業をしていました。尊敬していて、近づきたいような先生でしたが、とてもあこがれていました。先生は、被服は、感覚の学問、理解の学問だっていわれました。

卒論は、江戸時代の人はお花見に行くとき、着飾っていくのはなぜなのかとおもって、「花見小袖にみる服装の遊びについて」というテーマで卒論を書きました。着飾るということは、どうみてもらいたいかという自己主張で、日常からの脱却という要素が強い、それが着ることの原点だとおもったんですね。自分を飾るために着るということを研究してみたかったです。

4年生の前期に、ある都立高校へ教育実習に行き、女子大出身の家庭科の先生に出会い、いろいろ教えられました。その先生は、年齢に応じていろいろな先生のあり方があり、若いうちは生徒と一緒に動けばいいし、年をとるとそれができないけど、その年齢なりの先生のあり方があると教わり、いまそのときの言葉がよくわかります。いい先生にめぐりあえましたが、先生の仕事は大変だともおもいました。すごく疲れましたし、一生やっていけるかどうかわからなかったです。教員採用試験の前日まで迷っていましたが、受けるだけでもとおもい、受けに行きました。秋には一般企業の就職活動もしましたが、結局、3月になって、勤務校が決まり、都立高校の家庭科教師になりました。

就職して4年目、26歳のときに、高校のときの水泳部の後輩と結婚しました。同じ部活をやっていたことよりも、就職して、通勤電車がいつもおなじだったことがきっかけでした。結婚するとき、わたしは辞めないからね、といって結婚しました。夫は、書籍販売関係の会社に勤めています。

最初に赴任した学校には9年いて、そこで産休育休を2回とりました。のんびりはしていたのですが、ちょっと大変な高校でした。最初、家庭科の教師は、新卒採用のわたし一人で、相談する人がいなかったし、通勤時間は2倍になるし、で、登校拒否になったり、辞めたいとおもったこともありました。でも、生徒がへたくそでもスカートを仕上げて、喜んでいるのをみたときはうれしかったです。周りの人に恵まれて、支えてもらったかなとおもいます。

現在の高校には、7年前に移ってきました。ここに移ったときは、すぐ進路指導部に入ったので、夜まで仕事をすることもあり、男の子二人の子持ちになって、当時はまだ慣らし保育の時期なので、ほんとは早く帰りたかったのに、つらかったですね。

いまは夫の両親と二世帯住宅で暮らしています。義父は定年になり、義母は自宅で洋裁の仕事をしています。玄関も食事も別々にしていますが、夫は、仕事が忙しく、帰りが9時10時なので、義母が子どもたちの夕飯をつくってくれることもあります。夫は同じ高校の出身なので、共通の友だちがたくさんいます。夫とは、お互いの仕事の話をしたり、進路指導部になったときは、企業のことを知っている夫の意見がとても役に立ちました。

いま卒業生として、日本女子大学ではいい家庭科教育法を受けてきたとおもいます。「名門」といわれたり、「優秀な」と形容詞をつけてもらったりしますね。在学中は、日本女子大学の学生が早稲田のサークルに行ったりすることを、早稲田の同級生の女の子にさげすまれたりしたこと

もありましたが、わたしは、私立の女子大学にいったことはとてもよかったとおもっています。公立の共学の学校へいっていたら、許すということができない人間になっていたとおもいます。

2 百貨店勤務 [社会福祉学科卒]

山梨県で生まれ育ちました。女2人男2人の4人きょうだいの長女です。地元の小中学校から県立高校へ進みました。高校時代は、進学組と就職組に成績で振り分けられ、勉強一筋で、あまりおもしろくなかったです。遊びたいことは大学にはいったらできるんだからという気持ちでした。東京の学校に行きたかったです。東京にあこがれていました。なんの勉強がしたいというのではなかったです。私立大学を5つ受けて、日本女子大の社会福祉学科は、文学ではなく、社会学系かなという感じで決めました。合格したときはうれしかったですね。

入学式のオリエンテーションのとき、120人いたのですが、最初にすわった席の後ろにいた人が一番仲のよい友だちになり、ずうっと続いています。学科の友だちは、地方からの人が多かったです。学内のテニス同好会に入り、4年まで続けました。

授業はまじめにできました。一番ヶ瀬先生のゼミをとりました。卒論は「婦人教育とカルチャーセンター」という題で書きました。一番ヶ瀬先生は、個人的な魅力があつてとつたのですが、先生はなんでも許してくださったし、女性の生き方や女性の老後の話が印象に残っています。

大学時代、もっと勉強しておけばよかったなあとおもっています。卒論は長いのを書いたのですが、あれが3年生ででき、4年生でもっとつっこむくらいやればよかったとおもっています。医療ケースワーカーや施設でのボランティアをしたり、実習にいったりしたのですが、福祉はわたしには重すぎました。福祉に進むなら、山梨に帰って公務員をすることになるのでしょうか、東京が好きで山梨には帰りたくなかったので、一般企業に行こうとおもいました。

就職活動は、4年の夏休み後半から動き出して、きびしかったので、一生懸命動きました。就職活動は、わたしにはすごい試練でした。しんどかったし、つらい思い出が多いですね。補助的な仕事ではなく、大卒女性をとる実績のあるところへ行きたかったです。説明会から行きましたが、そこでほんとうに女性をとろうとしているのかがわかりました。メーカーに行きたいとおもっていましたが、自宅通勤ではないので、幅が狭かったです。結局、いま勤めている百貨店から内定をもらいました。

ここに決まってくれしかったですね。当時、女性の常務がいましたし、4年制卒の女性をとりはじめて、2年めでした。同期入社的女性は、たしか、大卒が14人、短大卒が100人くらい、高卒は300人くらいだったとおもいます。

入社4年めに結婚しました。大学時代に、友人のいた寮のコンパで知り合った同い年の人でした。彼は、東京で地方公務員になったのですが、彼の職場には既婚女性がたくさんいましたし、彼の母親自身が小学校の先生で定年まで勤めた人でしたので、とにかくわたしも共稼ぎをしてみようとおもいました。

入社6年めから9年めくらいに仕事のおもしろさがわかりはじめました。最初の5年は売場にいましたが、デパートの友の会組織の仕事へ配属になりました。そのころ、子どもが生まれることになったのですが、ちょうど育児休職制度ができ、子どもが1歳まで休めることになりました。

デパートは、勤務時間が長いし、土日が休みではないのですが、その後、育児勤務制度というのができ、子どもが就学前のあいだは、短縮勤務を選べるようになりました。勤務が9時40分か

ら3時30分までで給料の7割、5時10分までだと給料の9割がでて、ただし休みが減るという制度でした。その制度をさっそく使わせてもらいました。それで、1人めの子の育休があけて、復帰し、5時10分に帰る勤務態勢を選んだのですが、休みが隔週の週休2日になったので、出勤が多く、ちょっと精神的に苦しかったですね。

子どもは2人ほしいとおもっていました。1人めの育休から復帰したときに、上司にはあいだをあけないで次の子がほしいとあってありました。それで8ヶ月後に、2人めの産休にはいりました。2人めでは産休とあわせて1年3ヶ月休んで、保育園に預けて出社できる態勢にして、職場に復帰しました。今度は、3時半に帰れる勤務を選びました。

上の子は、いま小学校2年で、下の子はあと1年で小学校にあがることになります。いまは夫が週休2日で、わたしは土日どちらかを休みにして、毎日3時半に帰って、学童保育もお迎えし、朝は8時半に見送っています。こういう制度がちょうどできて、わたしはほんとうにラッキーだったとおもいます。

夫は、食事こそつくりませんが、洗濯も掃除も全部やります。公務員は時間がきちんとしていますし、給料もほとんど同じくらいですので、フィフティ・フィフティでやっています。それと、民間ではなかなか有給がとりにくいのですが、公務員は当然のように使えますので、子どもが病気のときには夫に休んでもらっています。

子育ても仕事もというとなかなか続けられないですよ。とくに2人めというのはタイミングがむずかしいとおもいました。無言の風当たりがないわけではないのですが、仕事についている時間はがんばる、ちゃんとするというで割り切っています。でも仕事は家には持ち帰りません。来年からフル勤務になりますので、そこでお返ししたいとおもいます。31歳で最初の子どもが生まれ、30代はずっと妊娠、産休、育児休暇を繰り返していましたので、仕事は中途半端です。フル勤務になったときに、第二のスタートであるとおもっています。

30歳ころに係長になっていたのですが、産休前になっていてよかったです。産休をとっているあいだは昇級はありません。大卒の同期14人で残っているのは6人ですが、そのうち3人は子どもがいます。2人は子ども2人で、1人は育児休職中で、あとの3人は1人は独身で、2人は既婚ですが、子どもはいないですね。子どものいない3人はみな課長になっています。だいたい35歳くらいで課長になりますから。それは男性も同じです。子どものいるわたしたちは、みな係長です。でも子どもがほしかったので、これはこれでよかったとおもっています。

同期でも早く出産した人は辞めた人がいますし、年齢が上の方で、子どもをもちながらやっている人には、こんな制度がなかったから、あなたたちはいいわねといわれました。大学時代のサークルの友だちも社会福祉学科の友だちも、専業主婦ですね。高校の同級生で、教員になった人だけ続いています。

わたしの会社には日本女子大出身は25人くらいいます。女子大というときは、日本女子大と津田塾と東京女子大をとっています。会社も実績を買ってくれているのだとおもいます。日本女子大の卒業生は順応しやすいとおもいます。サービス業なので向いているかもしれません。

日本女子大を卒業して得をしているとおもいます。会社を離れても、日本女子大出身という悪い印象よりいい印象を受けているようです。えー日本女子大なのっていわれますから。マイナスでは、共学から来ている人は、男性の先輩がいて、人脈があるので、得をしているようにおもいます。たしかに「引き」はあるかもしれませんが、まあ学閥に染まっていないのがいいことでもありますし、最近は出身大学はあまり関係ないかもしれません。

子どもは2人とも男の子ですが、娘がいたら、自分とおなじ日本女子大には行ってほしいと思ったでしょうね。

3 化学メーカー勤務 [家政経済学科卒]

父が国家公務員でしたので、1、2年で引っ越しがあり、小学校入学までは静岡県にいましたが、北海道、秋田、東京と移り、小学校は5回変わりました。小学校6年生のとき、東京にきて、東京で公立の中学、高校に通いました。わたしのはいった都立高校は、男女半々で、当時の学校群制度で内申書重視のころでしたから、英語数学国語の3教科以外は、1.2倍されるので、同級生はとても個性的な人が集まっていました。

小さいころからピアノを習っていましたので、音楽に進もうかとおもったのですが、高校はふつうのところへ行くというのが父の方針で、都立高校へ進みました。中学でコーラス部に入って、歌が好きになり、高校でもコーラス部に入りました。

受験では、音楽に進みたいとおもって、音大の先生についてピアノを習っていたのですが、国立大学の音楽科や音楽大学の学生に会いにいったら、楽しいですかと聞いたら、だれも楽しいといわなかったんです。音楽に行くなら、なにか専門性があつたほうがいいみたいだし、音楽の先生になりたいかというのと、わたしはなりたくないことがわかりました。それで、新聞を読んでいて、経済のことがわからなかったのので、このページが読めたら、日本のことがわかるとおもいました。それから探したら、家政経済学科がありました。国立も受けましたが、日本女子大に受かったところで日本女子大に決めました。

受かった瞬間に勉強道具をしまい、旅行に出ました。音楽をやめた以上、どこかで日本経済に関わりたいたいとおもいました。それにふつうの道が開けたとおもいました。

母方のオバが日本女子大卒だったので、日本女子大の褒め言葉はよく聞いていました。日本女子大に受かってから、父はパンフレットを集めて、おまえはいいところに受かったなあ、あそこはいい学校だといわれ、父は喜んでいました。

愕然としたのは、入学式のときです。男女いるのが当然でしたので、女子ばかりなので、愕然としました。高校に進むときは、ボーイフレンドがほしかったので、女子高へは行きたくなかったのですが、大学はあんまり関係ない、どっちでもいいとおもっていました。高校3年のときに、ボーイフレンドができました。彼は、同じクラスで隣り合わせの席で、大学時代もつきあっていました。彼はアメフトをやっていて、さらっとした友だち関係で、卒業後もつきあっていたのですが、結局、そのままで、彼は結婚して、わたしは独身のままです。

女子大に入って、女子だけということで、だんだん違いに気づきはじめました。なにか決めるとき、めんどくさいときは男の子がやってくれましたけど、女子大に入ると、自分でやらないといけないのです。クラブは、女子大の合唱団にはいったのですが、先輩と衝突して辞め、男女混声のところへ行くことにしました。慶応と日本女子大の混声合唱団に入って、熱心なクラブでしたし、謳歌しましたね。

ゼミは、時子山ゼミの一期生でした。ちょうどゼミを決めるとき、こんどから新しくゼミをもつ先生は日本経済の近代経済のミクロ経済をやると聞いて、人相もわからず、選びました。それで希望者が多くて、くじ引きになったのですが、くじにあたって、定員13人のなかに入れました。1人どうしても入りたいたい人が増え、みんな個性的な14人のゼミ生でした。先生も非常にすて

きでした。とても若くて、2人の小さなお子さんがいて、控えめで上品で、自分たちにはないものをもっていました。迫力があるわけではないのですが、先生をもりたてようという感じで、コンパゼミといわれました。

東京サミットのときで、日経新聞の論文懸賞があつて、100万円もらえるというので、論文を目標にして、みんなで研究しました。賞金はもらえませんでした。目白祭のときに展示したり、先生をもりたてるのに、夏に合宿をしたり、先生を助教授にする署名運動をしたりして、ゼミは非常に思い出深いです。卒業後、5年10年とゼミ会をやりましたが、ゼミ生のなかには卒業後、テレビポーターや作家として活躍している人がいます。

卒論は、「東京都の廃棄物問題に関する一考察」というタイトルで、ゴミ問題を考えました。授業では、家庭科の教職をとりました。それで、調理実習や生活実習を受けたのがとてもためになりました。フランス料理の組み立てを習ったり、食べ物に興味をもてたし、それはいまの仕事につながっています。生活実習では、夏休みに寮に暮らす経験をしました。教育実習でも、品川区の中学に行き、その家庭科の先生が前向きな方で、家庭科の男女共修を唱えていたし、魚のムニエルの調理実習でも、一匹をおろすところからやることをしたりして、おもしろかったです。

就職活動は、むずかしい時代でした。4年生の夏ころからいろいろ探し始め、いくつか回っているうちに、いまの会社から連絡がありました。

入社してすぐ秘書室に配属になり、何人もの役員をお世話して、11年いました。最後に担当した副社長は、とても立派な方で、社内の仕事だけでなく、マーケティングの本を書かれたり、講演会をしたり、業界の仕事もされた方で、その人のもとで、秘書の仕事としての集大成をしたとおもいます。いまは、食品事業部にいまして、宣伝計画や情報に関わる仕事をしています。

日本女子大出身ということで、役員のお様にも女子大卒の方が多く、それだけで好意的にみてもらえることがありました。この分野の仕事になって、食の世界では、女子大出身の人が活躍していることがわかりました。

ふだんはスポーツジムに通ったり、父が生け花の先生ですので、週一回実家でお花を習ったりしています。大学時代の友人との交流も大事にしていて、なにか相談するのはゼミのときの友だちですね。

4 情報サービス会社勤務 [教育学科卒]

大阪で生まれ、中学1年まで大阪で育ちました。中学2年のとき、父の転勤で東京に来て、都立高校に入りました。大学1年のとき、父が大阪に転勤になり、両親は大阪へ移り、わたしは、アパートを借りて、1人暮らしをはじめ、いまもそこに住んでいます。

3歳のときからピアノをはじめ、コンクールにでたこともありました。一人娘で、音楽に進ませたいという母の期待が大きかったとおもいます。都立高校にはいったときは、やれやれという気分でした。高校は男女半々で、オーケストラでヴァイオリンをしていました。

早稲田の文学部が第一志望だったのですが、浪人は許さないと父にいわれ、反発もできなかったですね。父は、日本女子大ならいいんじゃないといいました。高校のときの仲良しグループは、7、8人あり、慶応、早稲田、津田塾や東京女子大、筑波大学などに行きました。

教育学科を選んだのは、教員免許や児童教育ではなく、心理学やカウンセリングが学びたかったからです。大学の授業も先生もつまらなかったです。大学って少人数で、いろんなことをや

っていけるとおもっていたのですが、200人くらいの教室で、みんな、わあーわあーいっているだけで、過密ぎみでした。

授業で覚えているのは、カエルの解剖をしたことと軽井沢の合宿です。おもしろかったのは、社会心理学の授業で、恩師とよべるのは、カウンセリング論の先生だけです。大学での勉強のあり方とは、自分で考え、自分で調べ、自分にとっての謎を解明することという姿勢をカウンセリング論の先生から学びました。その先生に出会えて、大学にきてよかったとおもいました。あるがままの自分を受け入れるというフレーズがわからなかったけど、その先生の話聞いてなるほどなあとおもいました。疲れた人を癒すのは人間なんだとか、相手によって引き出されていくとか、その先生と触れることでわかっていったとおもいます。卒論は「現象学的方法からみるカウンセリング論」でした。研究室でのワークショップに行ったこともありました。その先生に出会えなかったら、日本女子大の意味はなかったとおもいます。

大学では、映画研究会にはいって、8ミリをとり、映画をつくって遊んでいました。地方の人と附属の人が半々でした。附属でも小学校からの人はお嬢様で、バレエができたりとか、フランス語がしゃべれたりとかしましたし、高校から入った人はすごく頭がいいとおもいましたね。大学からの人は、地方出身で、そこそこ勉強ができるという感じでした。

ゴルフ同好会にも入ったのですが、2年くらいでゴルフは辞めました。映画がおもしろくなったし、女子大でゴルフをするのは、付属高出身のお金持ちの人ばかりで、自分で車一台もっていると、第一ブランド世代で、絵に描いたような世界でした。一緒に入った友だちと、長くつきあいきれないねといって辞めました。

映画研究会では部長を一年やったのですが、いさかいがあるとき、生活環境がちがうとこんなにもコミュニケーションがとりにくいのかとおもいました。公立の人と私立の一貫教育の人は、ちがうとおもいました。生い立ちがちがうと、男の子との接し方もちがいます。最後までつきあったのは、都立高校出身のおなじようなルートできた人です。

就職は、流通かマスコミに行きたかったし、総合職で探していました。わたしたちのころは、事務職と総合職にわかれていました。流通でも内定をもらいましたが、いまの会社に決めました。わたしたちは、女性が働きはじめた最初の世代で、5歳上のクロワッサン世代は、ほとんど主婦ですが、4年制大学に進学して就職するのがあたりまえの世代でした。

いまの会社に入って、最初の年は情報誌の編集を担当し、ついで販売部門にいたりして、入社4年目に映画関係の文化事業部に移りました。映画を製作して、配給して、プロデュースする仕事をしました。ほんとうにいい仕事できたのですが、ハードな仕事で、深夜まで働きました。35歳のとき、人間ドックを受けて、十二指腸潰瘍だといわれました。それまで13年間突っ走ってきて、会社がいいところは、年に2、3週間の休みをもらって、ヨーロッパに行ったりして、1年間のストレスを相殺し、リフレッシュできていたのですが、35歳で体の調子がおかしくなって、仕事がリズムカルにできなくなり、リフレッシュもできなくなりました。会社も大きくなったし、時代もきびしくなり、また人間関係のストレスもたまっていたのだとおもいます。それで文化事業部から経営管理部門へ移りました。

映画でできることはみなやったし、映画製作をやらせてもらってよかったとおもいます。ありとあらゆることがおこることがわかりました。法的なこと、著作権の問題もあるし、演出のことなど、いろんなことが集大成されて、スクリーンでみんなが泣いたり笑ったりするんです。世界中で上映されるんです。

「二十歳の微熱」をみて、自殺をやめたという男の子から手紙をもらったことがあります。その映画はゲイの男の子の話なんですけど、ファンレターをもらったりしました。ほかにも60くらいの方に同性愛なんだけど、表沙汰にできず、結婚し、子どももつくったけれど、映画をみて、感動したという手紙をもらいました。そんなダイナミックなこともあります。芸術なので、内省的な作業だし、そのために、新宿のゲイバーで、チラシを配ることも苦ではありませんでした。苦労したけど、いい仕事ができたとおもいます。それをバネにして、ヴァージョン・アップしたものをやりたいとおもいました、古い映画会社ではなかなかできないことを。

近いうちに結婚しようと考えています。相手は映画関係の技術者ですが、私が仕事で落ち込んでいるときに、支えてくれたので、大切にしたいとおもっています。子どもがほしいとおもうと、この一年以内に考えないといけなんでしょう。会社は、産休育休はとれますが、同期で入社した女性11名のうち、残っているのは5人です。そのうち、子どもがいるのは1人で、あとは未婚が2人、DINKSが1人です。辞めた人のなかには、出産で2人辞め、大学院にいった人が1人、家庭の事情やブラジルに好きな人がいて、追いかけていった人もいます。フルタイムの社員350人中は手持ちの女性は5人しかいないのです。男性のほうが圧倒的に多いですね。給料は男女差なしですが、女性は、ジョブ・ローテーションという名で、現場をまわってだけで、なかなか職階があがっていかないですね。創業25年ですが、部長にも女性はいないです。組織の問題よりも個人の問題というところもあるのかもしれない。

女性の社会的地位があがってきたのに、20代の女性は保守的で、リスクを負うことはしない、仕事もしたいけど、死ぬほどはしないという感じになってきていますね。若い人たちには、子どもをもっている同期の人は評価が高いのです。女性の器を活かしてはじめて、りっぱだといわれるのです。女性として当たり前のことをやって、さらに働くということがないかぎり、評価されないのです。たった一人がんばってもむずかしいですね。

会社には、日本女子大の卒業生は3人います。日本女子大卒って「良妻賢母」といわれます。同世代でも「いい奥さん、いいおかあさんになれる」といわれます。どちらかという、後ろに隠れる感じで、仕事の上ではネガティブです。上智やICU、慶応か東京女子大のほうが仕事するにはいい感じですよ。慶応や早稲田の女性はちがいます、なんか4年間のカラーがあって、染み出てきます。日本女子大は、質実剛健で、賢さをもっているという評価で、女性らしいといわれますね。

男性社会をみていると、学校のつながりを大事にしています。家庭にはいると、それが切れ切れになり、女子大は卒業してからのネットワークをつくれないう。男性の場合は、取締役になったら、大学やクラブのつながりで、なにかのときには一肌脱ぎましようとなるのに、女性は孤立しているし、場合によっては足を引っ張っていますよね。女子大卒でも、10年後にOG会が懐かしむ会ではなく、いまの仕事に役に立つネットワークができるようにならなきゃいけないとおもいます。

5 建築設計事務所自営 [社会福祉学科卒]

生まれは北海道なのですが、国家公務員だった父の転勤であちこちへ引っ越しました。東京で幼稚園に入り、中学の途中で、静岡県に転校し、高校は神奈川県でした。

高校は県立でしたが、旧制の女学校で、男子はゼロでした。大学は共学に行きたいとおもって

いました。一年めに一つ受かっていたのですが、そこはいやだったので、友だちと予備校に通いました。ほんとうは早稲田に行きたいとおもっていて、日本女子大は第三か第四志望でした。学校要覧を調べたり、高校時代にJRCのクラブ活動をしていたので、受けるなら社会福祉学科にしようと考えました。

入学したら、すぐになじめたし、まじめに勉強しました。学内のサークルには入らず、外で、英会話をネイティブスピーカーのお宅で習う会を週一回やったり、日本語教育のボランティアを2、3年やったりしました。それと、重度の在宅障害者を外に連れ出そうという会をボランティアでやりました。事務局がわたしの自宅から徒歩10分くらいのところにあり、いろんな学生や社会人がそこに集まっていました。結婚して子どもが生まれても10年くらいはやっていました。

社会福祉学科では、社会保障論や労働法が専門の佐藤ゼミでした。卒論は、老人医療をとりあげ、長野県で在宅老人調査をしました。調査はおもしろくて、分析や考察のときはわからないですが、卒論の成績はよかったです。授業では、一番ヶ瀬先生が女性の生き方を話されたことが印象に残っています。

ドイツ語を教えていた小沢先生が昔話も教えていて、3年生のとき、自由にとれるゼミのようなものをはじめたので、それをとりました。小沢先生に感銘した人たちと目白で研究会をもちはじめ、小沢先生がご自宅で主催するようになりました。その会は、いまも、昔話大学として、土曜会というかたちで、続いています。常時、20人くらいは出席していきまして、人数が多くなったので、地区会館を借りてやっています。月一回、発表して、自費出版で昔話の研究成果を発表しています。

小沢先生は、公明正大な先生で、ふつう学者はまわりの人にやらせても、名前をださなかったりするのですが、名前を出して書きなさいといってくれました。みんなに機会均等に接しておられます。

わたしは、フィールドワークから入りました。老人と会って、昔話を聞く、話を聞くということ自体がおもしろかったです。小沢先生に頼まれて、新潟県のおじいさんに話を聞きに行きました。4年くらい通って、お話をテープにとり、文字に起こして、小沢先生の仲介で、10年ほどまえに本になりました。

そのおじいさんのお母さんは、300話くらい知っていたそうです。そのおじいさん自身も200話くらい話すことができました。おじいさんは、戦争中、中国へ行ったのですが、塹壕のなかでこおろぎの鳴き声が聞こえて、それでお母さんの声を思い出し、そして囲炉裏のにおいを思い出したそうです。そのイメージを思い出すんですね。その話を聞いて、こういうお母さんになろうと思いました。精神的意義が昔話の意義の一つになっていることがわかりました。

そのおじいさんさんは、2年前に亡くなられたのですが、おじいさんのために本ができてうれしかったですね。出版記念会のときには来ていただきました。語り手の会が各地にできているので、おじいさんは本ができたお陰で、各地から呼ばれて、語りに行きました。「おじいさん述」、「わたし編」で出版したのですが、みんなで一緒にやったことがよかった、いい人にめぐりあえたし、いい出版だったとおもいます。おじいさんの話は、昔話事典に入りました。そのあと、2冊出しましたし、論文も書きました。小沢先生の紹介で、「耳と昔話」というテーマで要請がありましたので、聞き耳ずきんの話を書きました。大学院にいかうかなとおもわないわけではなかったのですが、親のすねかじりではいけませんし、それに昔話では大学院はなかったです。

就職は、教員採用試験がだめで、私立の高校に産休代理で教えに行きました。そのあと正規の

教員にはなれず、友人の紹介で、マーケットリサーチの会社にいったのですが、残業が多くて、昔話の勉強ができなくなりました。そのころ、社会福祉学科の先生から、福祉施設を専門に設計する事務所で働かないかと電話があり、そこで働いたのですが、結婚退職しました。その後、語学教育の会社にはいって、5、6年働きました。

夫とは、重度の在宅障害者を外に連れ出すボランティアの会で知り合いました。27歳のときに知り合って、翌年に結婚しました。会って2ヶ月めには結婚することになりました。夫は建築家なのですが、8年前に事務所をかまえて独立しました。そのときから、わたしも総務や経理を手伝うことになりました。

子どもは3人いて、小学校5年、小学2年、一番下は4歳で、みな男の子です。保育園に入って、母に送り迎えにいらってもらったりしました。母は、わたしが高校にはいったときから働きはじめ、生命保険会社に勤め、定年までがんばりました。母をみていて、女性に経済力がつくのはいいなあとおもいました。

日本女子大出身って好意的な面ばかりで、履歴書だけでは得をしているとおもいます。社会がもっているイメージがいいんだなあとおもいます。保育園の父母会の活動でちょっといったら、ええ！ そんないいところではいるの！ ってびっくりされました。

日本女子大の時代の友人で、飲みに行こうかってよく会うのは、4、5人います。ゼミの同窓会を17年ぶりに開きました。学科の同窓会は2年に一度あります。ガンで亡くなった同級生がいて、そのとき、お通夜前日に電話をまわして、知りました。香典をあげて、記帳して帰ったら、亡くなった同級生のお母さんから娘とはどういう関係だったのでしょうかと問われ、それじゃあいけないねとって、名簿をつくったりしました。

わたし自身には、日本女子大って「くさい」ところがありました。だから、成瀬仁蔵宗教学校とっていました。成瀬先生がこういったとか、成瀬先生は、椎茸を甘辛く煮たものにクルミをまぜて食べたとか、授業中にととうとしゃべる先生がいました。ご命日には、古い講堂に集められて、歌を歌われました。良妻賢母のイメージは、男に都合のいい女をつくることではないかと、それに反発を感じていました。なにか成瀬先生のイメージを伝えようとしていたことに耐えられなかったです。

社会福祉学科で学んだことは、ものの考え方に影響をあたえているとおもいます。それは権利意識だとおもいますね。福祉というのは、サービスではなく、恩恵を受けているのではなく、好意でもなく、税金を払っているものあたりまえのことだという意識です。でも、昨今、たとえばお金をだせば、いい保育が受けられるというふうになることには危機意識が薄いように感じますね。

社会福祉学科で学んだことは、わたしの昔話の研究にも活かしているとおもいます。フィールドワークを経験したことがおもしろかったし、福祉の場に身を置いたというのがよかったとおもいます。というのは、お話は生きているものですから、フィールドワークをしたときのフィールドの経験が活かされているとおもいます。どちらも老人を対象としていますし。

対馬にいったとき、地区の会館でお話を豊かに語る人に出会って、また訪ねていっていいですかとって、住所を教えていただいたのですが、その豊かな語り手のお宅を訪ねたら、その人はうってかわって、全然話さなくなったのですね。そうしたら、息子さんのことを気にしていることがわかりました。お話が衰退するということは、お年寄りが衰退するということだとおもいました。豊かな語りがあるというところは、お年寄りを中心に大事にされているのだとおもいま

た。語っていることを受け取ることは全体を受け入れることなんですね。

いまは離れていますが、また在宅の障害者のボランティアの活動にかかわりたいとおもっています。下の子の送り迎えがなくなったら、考えたいとおもっています。

6 生命保険会社勤務 [英文学科卒]

東京で生まれ、東京で育ちました。公立中学から都立高校の進学校にすすみ、英文科を受け、第一志望で入学しました。

でも、英文科に入ったことはあとで後悔しました。英語が得意であったわけではなく、ネイティブスピーカーの授業は苦痛でした。大学にも初めはなじみにくかったです。地方からの人にも付属高からの人にもなじめず、なにか疎外感がありました。学内のサークルには入らず、アルバイトをしたりしていました。大学の勉強だけはちゃんとすればよかったなとすこし後悔しています。卒論はアメリカ文学で、フォークナーをとりあげました。

大学2年のとき、いまからおもうと、それが人生の分かれ目だったのですが、早稲田のサークルにはいったのです。テニスをしたりするリ克雷ションのサークルで、そこで夫と出会いました。彼とは3年の終わりのころから親しくなって、4年になってつきあうようになりました。

サークルに入って、余裕ができたし、学内でも付属高出身の人たちを中心とする7人の友人グループができました。その友だちとはいまも続いていて、ときどき会って食事したりしています。

就職活動は、かなりがんばり、建設会社に決まりました。最初は秘書課に配属になり、その後、人事や福利厚生の仕事に移りました。彼は、関西出身で、就職して関西に帰ったので、東京と別れてつきあっていたのですが、結局、2年で結婚退職しました。

結婚して、大阪に9年間住みましたが、そのあいだに、子どもが2人できました。妊娠、出産のあいだ、わたしは病気がちで、大変でした。2人めが生まれたあとも、2、3年、体調が悪いうえに、2人の子どものたちもあいついで病気になり、そのころのわたしは、ほんとうに心身ともに疲れていました。夫は忙しいし、義母も病気で、結局、東京から母が助けにきてくれました。

夫が東京へ転勤になり、また、東京に住むようになり、気持ちに余裕ができました。でも、マンションのローンが大変だし、これから子どもの教育費もかかるので、3年前くらいから、仕事を始めました。最初は内職からはじめて、一年半くらい前から人材派遣会社で、週2、3日仕事に始始め、1年前から現在の生命保険会社に正社員として勤めるようになりました。

家事は、母に手伝ってもらっています。夫とも話し合いをして、ゴミ出しや掃除をしてくれるようになり、夫も変わってきました。子どもにも自分のことは自分でやるようにとっています。

女子大時代の友人は、裕福な人が多かったです。今も続く7人グループのなかで、働いているのは、わたしを含めて2人で、あとの5人は専業主婦ですね。もう「お受験」の話ばかりで、おたがいの夫の話はあまりでませんね。

日本女子大は、なんかメジャーなようなマイナーなようなところで、大阪の社宅にいたころは、奥様方のなかでは大学の名前はいわないようにしていました。わたしは女子大でいい友人を得られましたが、小学生の娘がどうするかは本人の意志次第だとおもっています。

7 住宅メーカー勤務 [住居学科卒]

群馬で生まれ、育ちました。父も母も群馬の出身です。高校は、群馬県立の女子高でした。大学受験では、関西の公立大学を第一志望にしていたのですが、先に、日本女子大に受かったので、進学することに決めました。住居学科を志望したのは、住宅設計をやりたいという希望があったからです。最初は「自分の部屋がほしかった」ということが直接の志望動機でした。うちが建材と設備関係という建築に関わる会社を経営していたことは関係なかったとおもいます。

女子高でしたので、共学の学生生活にはあこがれていましたが、カリキュラムを調べて、学びたいことが学べるようなので、日本女子大に進学することに迷いはなかったです。合格してうれしかったですね。わたしの高校の同級生も3人ほど進学しています。

大学生活は、地方から来たせいかわずか華やかに感じました。コンパがあったり、遊ぶ場が多いとおもいました。わたしの入学年度は、人数が多かったですね。でも同じ学科のなかでは価値観で通じるところのある人が集まっていたとおもいます。個性的な友人がいましたし、女子高から来た人と都立や神奈川の県立高校から来た人では違っていました。友だちは、6人くらいとそのまわりにプラスして12、3人できました。6人は、県立の女子高2人、付属高、都立高、東京の私立女子高、神奈川の県立高校の出身でした。

大学にはいると同時に家を離れ、東京に来ましたが、一人暮らしをするのが不安で、最初は賄い付きの下宿にはいりました。2年後に2歳年下の弟が東京の大学に進学することになって、弟と一緒に住むようになりました。その後、両親が埼玉県に引っ越してきたので、ふたたび両親と暮らすようになりました。

大学では、スポーツ同好会と早稲田の映画サークルに入りましたが、サークルに夢中になるということにはなかったです。授業は、真面目にできました。一般教育科目では、小沢征爾さんのお兄さんの小沢先生の児童文学がおもしろかったです。専門科目でもいろいろ学びましたが、卒論ゼミは、武田先生で、収納計画を考えました。露出して、出しっぱなしにしているものに興味がありました。武田先生のご研究は、わたしのいまの仕事にもつながるものです。卒論は気の合う人とペアになり、谷中の町家を新しく再生して、活かしていくことを考えましたが、最後は徹夜続きで、パニックでした。

就職は、大学入学時から大変だといわれていました。大学の公募の掲示板もみましたが、夏のあいだは、流通や商社をまわり、内定をもらったところもあったのですが、専門分野で就職しなかったのが、結局、縁故で不動産会社にはいりました。わたしがはいったとき、同期で4、50人いたとおもいますが、日本女子大の卒業生はいませんでした。建売住宅の内装仕様を決める部門に配属になり、現場にもつれていってもらって、勉強させてもらいました。

就職して4年めに、大学時代から知り合っていた彼と結婚しました。結婚1年後にその会社を辞めて、半年後にまた就職活動をして、いまの会社に再就職しました。10年前のことです。最初の会社を辞めてから半年間のうち、3か月間は、昼間から歌舞伎を見にいたりして遊んで、楽しくすごしました。あとの3ヶ月はコーディネーターのアルバイトを週3回くらいしていました。

この会社に転職して、1、2年たったころでしょうか、結婚生活がうまくいかなくなりました。30歳になってから1級建築士の試験にトライしました。30歳で学科に受かり、31歳で製図試験

に合格し、32歳のときに離婚しました。建築士の試験勉強は、学科のほうは会社の帰りに1時間、喫茶店で勉強してがんばりました。製図の方は、土日の午前中に専門学校に通って勉強しました。

この会社には嘱託で入ったのですが、1級建築士をとった翌年に正社員になれました。1級をとったら、周りの見る目が変わりました。私生活のこともなにもいわれなかったし、この会社にいたら、再出発は可能だともおもいました。でも、いまからおもうと、時期もよかったのかもしれませんが。まだバブルの余波が残っていて、景気も悪くなかったですし、会社は規模を大きくしようとしていましたから。いまなら無理かもしれません。

会社の技術開発の部門では、スタッフが120人から130人くらいのうち、2割が女性で、うち専門職は1割です。住居学科はいい印象をもたれていて、後輩も入社しています。最近は建築学科出身の女性もふえてきています。でも男性と同じ処遇ではありません。転勤がないことと工事に配属されないことに違いがあります。仕事なら、どうしても夜遅くなることもあります。各営業所で営業マンが、昼間、営業して、夕方帰ってきて、それから注文が入りますし、納期をいそぐときは、残業になることもあります。

でも、わたしの場合は、自分のスケジュールでやれる仕事をしています。いまのわたしのポストは、他の会社でいう係長だともおもいます。いまは、商品企画の開発と教育業務、生活住まい方の研究、この3つを中心にしています。仕事をしています。教育業務というのは、営業の人に説明して、社内でもわかりやすく伝えたり、関連異業種からも説明を求められることがあります。たとえば二世帯住宅とか、執筆もしていますし、今年は、ある大学で一般教育科目の住居学を教えることにになりました。

その非常勤講師の依頼も、住居学科の委託研究をして交流があったことがきっかけでした。いまの仕事をはじめ、日本女子大学のネットワークがひろがったようにおもいます。この業界では、日本女子大の卒業生はマフィアといわれていますが、異業種交流の会でも二人の後輩と知り合いました。卒業して10年たったころから上下水平にいろんな関係が広がったようにおもいます。

大学時代の仲良しグループとはいまもおしゃべりすることを楽しんでいます。専業主婦で子育てをしている人もいますが、生活の仕事をしているのに、世間離れしてしまうんじゃないかとおもうので、一般的な主婦の感覚を知っておかないといけないとおもっています。会社の企画会議でも主婦の代弁をできる人はなかなかいません。だから仕事の上でも知ってほしいとおもいます。

日本女子大学卒業というのは、たとえば最初に就職した会社では、いい女子大という評価で、親世代の方には名前が通ると思いました。旧世代では、悪い思いをしたことはなかったです。女子大出身者は親密感を感じてくれる人もありました。

建築や設計関係では、私立でも、建築学科の半分くらいは女性になってきていると聞きますし、女子大出身というよりも世代の違いのほうが大きいのかもかもしれません。日本女子大での教育は、いろいろな発端をつくってもらったことがほんとうによかったとおもいます。

8 社会福祉法人勤務 [社会福祉学科卒]

埼玉県に生まれて育ち、小学校までは地元の学校に通いました。中学に入るとき、進学教室に通って、中学受験して、付属中学に入りました。6人きょうだいの末っ子なのですが、上の5人が小学校まで地元で、東京の学校へ行きましたから、上がそうしたから、自分もそうなのだ

とおもいます。女5人男1人の6人きょうだいで、長女と五女のわたしが中学から、三女は高校から、日本女子大でした。

中学時代は、池袋駅が気に入っていたので、西武池袋線を通っていました。高校になって、西生田は家から遠いので、寮に入りました。三女の姉も寮で生活していました。

大学時代は、弦楽合奏団にはいって、チェロをしました。大学2年のとき、ウィーンで青少年音楽祭に参加するというので、ヨーロッパに演奏旅行に行きました。堤俊作さんが指揮をしていたのですが、堤さんがウィーンの音楽祭をみつけてきて、スイスエアとも関係があったらしく、通常の半額で行けました。それが初めての海外旅行でした。アメリカやイスラエルからもアマチュアのグループが来ていて、世界は狭いなとおもいました。

社会福祉学科を選んだのは、高校でボランティア活動の講話があったし、福祉という言葉が目についたことがあるかもしれませんが、でも、「お嬢様」だったので、よくわかってなかったとおもいます。学科説明会で、一番ヶ瀬先生が「熱い胸と冷たい頭を」といっておられましたが、若いうちでないとできないとおもいます。入ったあと、教育学科にいけばよかったとおもいました。

卒論は、自閉的傾向をもつ精神薄弱児の音楽療法について考察しました。3年生のとき、施設実習で音楽療法をやっている方がいて、すごいなとおもいました。8歳の自閉的傾向をもつ知恵遅れの男の子に音楽で心の扉を開けることができるかなと考えたものです。でも、実習レポートに毛がはえたような感じだと自分ではおもっています。

印象に残った授業は、地理学で、風土と気候とそこに住む人の人間性、そこで育まれる文化の基底になっているのは風土であるとおっしゃてられました。それで、ウィーン演奏旅行にいて、ワルシャワから来た人たちの演奏を聴いて、イムジチを聴いて知っているイタリアと較べると、東欧の音楽だなと感じたことを例にして、風土とそこに根づく文化の違いについてテストで書いたら、おもしろい回答だと紹介されました。

社会福祉学科を卒業して、神奈川県にある重度障害者の施設に住み込んで、厚生指導員を2年間しました。それから、15年間、海外にでて、1年半前に日本に戻ってきました。1980年から83年まで西ドイツにいて、その後は12年間、メキシコにいて、めちゃくちゃな生活をしてきたとおもいます。

西ドイツにいったのは、知恵遅れの音楽療法を勉強したいということで、2年間ためたお金をもっていったのですが、世の中甘くなかったです。そこで、メキシコ人男性と知り合って、恋仲になり、彼が音楽教育にかかわっていて、彼の母親がやっている幼稚園で音楽教育をすることになり、メキシコに渡りました。でも、メキシコの労働ビザがとれないまま、そのうち、幼稚園がつぶれて、わたしは日系二世がやっている日本語学校の先生になりました。とにかく教育経験があり、日本語ネイティブであるということで、日本語の先生になりました。そこで就労ビザがもらえることになり、それ以降は安定して、9年間、日本語教育に携わりました。その学校の成長期と重なり、仕事が忙しかったです。日本政府の援助申請や留学生の準備教育などもしました。メキシコは、いまより仕事がやりよかったとおもいます。

メキシコ人ボーイフレンドとは別れました。彼は、わたしと音楽教育をやりたかったのですが、できませんでした。わたしも、結婚して配偶者ビザををもらい、就労ビザを得るという気持ちになれませんでした。それと惚れたという気持ちがだんだん薄れたのだとおもいます。

一時帰国は何度もしました。親に元気だと顔を見せることと日本語教師として日本のいまの事情を知らないといけないし、資料収集もあって、毎年一回は帰国していました。でも、まだ日本

には帰れないという気持ちでした。永住するとはおもっていませんでしたが、15年間海外にいたならかなの成果をもって帰りたいのに、まだないとおもっていたのです。他人に評価されたい、その他人の筆頭は親で、その時点で帰っても親は評価しないだろうとおもいましたので、帰るわけにはいかない、帰ろうという気持ちにならなかったです。母の病気が重くなって、95年の9月に帰ろうとおもいました。きっかけを待っていたのかもしれませんが。母はわたしが帰って、翌月に亡くなりました。

母を安心させるためにも、帰国してすぐみどり会に連絡して、職探しをしました。ほんとうに偶然でしたが、国際養子縁組や開発途上国の援助、インドシナ難民援助などをやっている社会福祉法人に仕事をえました。国際養子縁組やかつて養子縁組した子どもが親探しをするケースなどをもっています。子どものアイデンティティを確立するためには養父母のあいだに安定した関係が必要ですし、子どもの福祉が一番大切であるという考え方が基礎にあります。

先月は、1ヶ月ほど、カンボジアに行っていました。郵政省の国際ボランティア貯金によって、プノンペン郊外に学童保育の建物を建てたのですが、運営にもかかわるといので、運営の基礎調査に行きました。汗だけで一日20人くらい面接しても、湧いてくるくらい子どもはほんとうにたくさんいます。このような海外出張は初めてで、わたしが外国に15年もいたので、白羽の矢があたったのだとおもいますが、自分が海外で15年やってきたことは、無駄ではない、案外役に立っていることがわかりました。職場では、常勤非常勤職員あわせて24人いますが、日本女子大の卒業生が17人います。フルタイムの人3人のうち、2人が卒業生ですね。

老後のことを考えてすこしづつ準備しなければいけないとおもいはじめました。年をとることは孤独になることで、わたしは結婚していないし、子どももないので、周りに人が大勢いる環境に長くいることにならないとおもうのです。孤独と向かって気が狂わないでいられるなにかをみつけなきゃいけないとおもいます。自分は何ををしているときが楽しいか、あまりエネルギーを使わず、それさえやっていたら、日の暮れるのも忘れるようなものを見つかる必要があります。父が晩年まで好きだったもの、母が晩年まで好きだったもの、そしてわたしなりのもの、そのなかでなんかあるんじゃないかとおもいます。朝起きたとき、かったるいなとおもっても、それをしたら元気になるもの、あと10年くらいかけてみつけたいですね。

パートナーがいれば、それにこしたことはないですが、あまり長くシングルで居続けたので、一緒に居続けることができるか自信がないですね。惚れることと一緒に共同生活できるのとはちがうとおもいます。メキシコ人ボーイフレンドのころはわたしも若かったのだとおもいます。

きょうだいのなかで、長女と三女とわたしが日本女子大をでましたが、地元ではお嬢様とみられる感じはありました。なんだか制服で通うのが恥ずかしかったですね。中学や高校では姉たちを知っている先生がいて、お姉さまはお元気？といわれて、だから姉たちの入った学科にはぜひたい行くまいとおもっていました。

日本女子大にいて悪かったことは、女の人と仕事をするのは怖くないが、男性と仕事するのに緊張することです。幼いときから育った環境でないと学べないものがあるのかなとおもいました。日本語学校にいたとき、教務主任をしていたのですが、男性教員となかなかうまくいかなかったですね。女性だけの教育をしているのは問題だとおもいます。他の大学と合同サークルに入って、もまれればよかったのかもしれませんが。いまでもうまくいかないし、ものすごく緊張します。

日本女子大に行っているいい点は、受験勉強しないことがラッキーだったとおもいます。受験はな

いほうがいいです。プレッシャーを受けながら勉強するのは、勉強ではないとおもいます。体の中に学びたいものがあって勉強するのがほんとうの勉強でしょう。学校で勉強することはわずかであるとおもいますが、それでも残っているのは自ら学んだことです。教育の場で、子どものプレッシャーをもって学ばせたものは残らないとおもいます。

9 酒類販売自営 [国文学科卒]

東京で生まれ育ちました。祖父母も同居している三世代家族でした。小学校は、男女共学の私立で過ごしました。中高と上にも続いていたのですが、受験校だったので、自然に受験勉強をして、日本女子大の附属中学に入りました。日本女子大は、両親が決めたのだとおもいます。偏差値や学校水準ということもありますが、情操教育を身につけてほしいという希望があったとおもいます。

付属校での学園生活はとても楽しかったです。自分に合っていたとおもいます。わたしは人より先にできるタイプではないので、ゆっくりやってもいいという雰囲気はよかったですね。中学は4クラスで、160人の顔がだいたいわかりました。中3のクラスはいまもクラス会をしています。高校ではコーラス部に入り、合唱コンクールに出て、全国大会にも行きました。高校3年のときのクラスも毎年クラス会をしています。

大学に進むとき、わたしは化学が好きだったので、理科系に行きたかったのですが、理工学部出身の父に、あの当時、女子大の理科を出ても仕事につけないといわれました。それで、古典が好きだったので、国文科にしました。短歌や俳句も好きでしたし、本を読むのは嫌いではなかったですから。

国文科では、わたしの学年は140名以上いたとおもいます。地方からの人もいたし、附属にはない雰囲気でした。大学でも合唱団に入って、毎日練習がありました。卒論ゼミでは、上代文学の青木先生で、万葉集をしました。でも先生はちょうど病気で入院したりしてましたので、自主ゼミのようなかたちで、よく勉強のできる人がリーダーシップをとっていました。卒論はあとで先生にほめてもらいました。まじめに学校に通ったし、合唱団と授業に熱心がんばったし、成績はA+もけっこうありました。

教職をとって、教育実習にもいったのですが、教員採用試験は激戦でだめでした。女子大生の就職がきびしいところで、流通と銀行しかとってもらえない時代でした。百貨店に就職しました。入社して、まず家庭外商部に配属になり、外回りで、宝石や絵画、高級ブランド品をもって上顧客の家をまわる仕事をしました。

同期入社の人と結婚し、子どもができることになって、3年めで辞めました。同期入社の人たちは、会社の保養所に一緒に遊びに行ったり楽しくやっていました。夫の家は、都内で酒店を営んでおり、結婚してからずっと夫の両親と同居しており、夫が後を継ぎました。2年前に義父が交通事故でけがをしたことが直接のきっかけで、夫も百貨店を辞めました。流通業界は大変だということもありました。そのころに、店を改築し、酒類だけでなく、日販品も売るコンビニ的な店構えにしました。コンピュータも導入しましたし、わたしはワインスクールにいて、ワインにも力をいれはじめました。

夫も私立の附属中学から大学までである学校の出身です。子どもは二人いて、上の女の子は、今年から日本女子大の附属中学に入ることになりました。わたし自身が附属から日本女子大でよか

ったので、子どもにもおなじ雰囲気の中かで育ててほしいとおもいました。そのつもりで塾に通わせたりして、備えました。

子どもの小学校でPTAなどをやっていて、積極的に率先してやれるお母さんのなかに、聞いてみると、日本女子大出身の人が数名いました。自分で判断して、自分のことは自分でしっかりやっていける人だとおもいます。

女子大のなかで、自己が確立できたとおもいます。社会に出てわかったのは、男性とのかけひきができないことでした。全部、自分でやってしまうのです。悪くいうと、男に媚びるとか、できないですね。それは育った環境でそうなったのだなあと、後で社会に出てわかりました。

10 研究所パートタイム [国文学科卒]

東京で生まれ育ちました。小学校から附属に入りました。一人っ子だったので、低学年の時は、父が出勤の途中、車で毎日送ってくれました。なんにも準備せずに、小学校を受験しました。たまたま同じ幼稚園にいた子が他にも2人受けたので、親が受けさせたのだとおもいます。

中学のときは、部活で器械体操をして、スキーにも凝っていました。プロスキーヤーになりたいとおもったほどでした。高校時代はとくにクラブ活動はせず、放課後はまっすぐ帰って、友だちの家で遊んでいました。立教高校や青学とか高校生同士のサークルにははいていました。付属高校意識があったのだとおもいます。中学で英語が好きになり、高校でも英語だけは好きでした。でも、高校はきびしかったです。

大学では国文科に入ったのですが、英会話学校に毎日通っていました。留学したいとおもっていましたが、育った世界が狭いとおもっていたからです。カルチャーショックに会いたいとおもってました。そうでもしないと親元から離れられないとおもってました。

反対されながらも卒業旅行で、アメリカに一月行きました。それで、卒業してから、お金も行く先の学校も、全部自分で準備して行くことにしました。

就職活動はせず、大学時代にアルバイトをしていた歯科医院に就職しました。手広く歯科医院を経営している院長の秘書の仕事で、最初からアメリカに行くまでの腰掛けのつもりでした。お金は必死でためて、卒業後1年半してアメリカに行きました。

アメリカには2年いました。自分のお金でいくつもりでしたので、お金のかからない学校を探して、直接手紙を書き、英語学校に通いました。むこうでアルバイトもしました。最初日本人が経営しているギフトショップで働いたのですが、英語がうまくならないので、辞めて、日系人の歯医者さんで歯科助手として働いたりしました。

アメリカに行って、カルチャーショックを受けました。モノの見方が変わったとおもいます。びっくりしました。最初から2年いて帰ってくるつもりでしたので、2年で帰ってきました。帰ってどうしようという考えもなかったのです。ただアメリカに行ってみただけでした。

帰ったら、今度はちゃんと就職試験を受けて、有楽町にある旅行会社に入りました。英字新聞を二つとって、英語のできる人を求めているところを探しました。旅行会社の仕事は、ビザの相談とか、大使館へ行ったりとか、外国人の世話の多いところでしたが、雑用のような仕事が多かったです。そこには約2年いました。

26歳のとき、結婚しました。結婚して、アメリカに行きました。アメリカに移住しようとする人を選んだといえるかもしれません。彼は、高校のときの友だちの友だちで、7、8年つきあ

いました。高校卒業後、ニューヨークに行き、貿易の仕事をしていました。両親の反対を押し切って、ロサンジェルス付近に移り住んだのですが、グリーンカードがとれるまでの不安定さに耐えられなくなって、帰りたくなりました。父が病気になることとわたしが出産を控えていたこともあり、結局、1年半で引き揚げました。夫の貿易の仕事は、かならずしもアメリカに住まなくてもできるので、わたしが帰りたくなって帰ってきました。去年、子ども2人を連れて、家族でアメリカに遊びに行きました。2人とも男の子ですが、上は中学3年、下の子は小学校5年になりました。

子どもが大きくなり、なにかしたいとおもい、近所の寮で、英語を教え始めました。でも、夜分や土曜に行くよりも、昼間、子どものいないときに外へでたいとおもい、近くの研究所での研究補助の仕事に変わりました。その研究所には、いま週3回行ってます。仕事は、扶養家族控除の範囲内でやっています。夫は仕事から、3ヶ月に一度は海外へ出張に行きますし、子どもがいるので、いまのわたしがフルタイムで仕事をするのは、きついですね。

小学校のときの友だちには、卒業と同時に結婚する人も多くて、自然と疎遠になりました。女子大の友だちとは、2人くらいつきあいがありますね。でも、相談したりするのは、子どもと同級生で親しくなったお母さんたちです。

日本女子大の評価は、履歴書に書くとき、威力を発揮するのだおもいました。前の英語を教えるアルバイトでは、英語よりも経歴で決まったといわれました。言葉遣いや身のこなしなどが重視されたので、小学校から日本女子大だから、そうおもわれたのだとおもいます。小学校のとき、お言葉表があつて、ちゃんとした言葉使いをしないと、その表に×がつくようなものがあつて、小さいころからいわれてきました。でも、名前でもみる風潮があるとおもいます。

日本女子大は、好きです。でも女のなかだけで10数年間過ごすこと自体、もう通じないとおもいます。小中高大と狭い枠なので、気持ちのうえで小さい人間をつくるとおもうのです。お嬢様、箱入り娘を守りたいという意識はわかりますが、娘がいたら、共学に行かせたいですね。男の人という構えてしまいます。アメリカで抜けたとおもうのですが、男の人と自然体で接していないところが、どこかに残っているかもしれせん。だから頭が固いといわれるんです。学生時代の友だちは、みな固いですね、こうじゃなくっちゃっていうのが基盤にあるんですね。

日本女子大で好きなのは、成瀬先生の三つの教えが好きです。黙思することは、小学校のときに強制的にやらされたときはいやだったですけど、いまは黙思すると、不思議と気持ちが落ち着きます。

11 塾経営 [被服学科卒]

生まれ育った家が目白台にあり、一番近い幼稚園が付属豊明幼稚園でしたので、幼稚園から日本女子大に入りました。幼稚園には男の子もいましたが、小学校から女の子だけになりました。制服を着ることがうれしかったです。小学校では、都電で通う子がいて、帰りにうちに寄って遊んで帰りました。小学校の思い出は、一年生に入ったときに、6年生がめんどうをみるようになっていて、6年生がとても大人におもえたことです。1人っ子だったせいか、6年生のおねえさんを独り占めしたいとおもった記憶があります。それと給食にワッフルがでることがあつて、それがうれしかったですね。

中学校になると、赤いネクタイが紺のネクタイになり、お弁当になりました。コーラスクラブ

にはいり、練習が楽しみでした。高校でも、付属高が誇るコーラス部に入りました。高校になって、小田急で電車通学になり、通学に時間がかかりましたけど、電車で読む時間ができ、本が好きになるきっかけになりました。

小学校から家庭科が好きで、家庭科の先生になりたかったので、被服学科にいこうと決めていました。そのころは、英文科か国文科が花形で、文学部は総合商社に行く、家政学部はそのまま結婚してしまうというイメージだったとおもいます。被服学科には、附属から4人進みました。

被服学科にはいって、名簿の近い人で、4人の仲良しグループの友人ができました。ほかの3人のうち、1人は東京生まれの東京育ちの都立高校出身の人で、あとの二人は、千葉の人と鹿児島の人でした。4人でよく食べにいったり、鹿児島の方は雑司ヶ谷に下宿していたので、よく遊びに行きました。4人とはいまも友人関係が続いています。都立出身の方は、東京で就職して、ついこのあいだ結婚しましたが、仕事もっています。千葉の方は結婚して転勤がありましたが、いままた千葉に住んでいます。鹿児島の方は、離婚してお子さん1人と神奈川県に住んでいます。4人みんな一緒に会う機会はないですね。

卒論ゼミは、繊維の研究で、防炎加工や繊維にふくまれるホルマリンの研究をしました。卒論のテーマは、「ホルムアルデヒドの移繊」というもので、繊維に含まれるホルマリンが隣の繊維に移ることを実験して、楽しかったです。

就職活動をしたのですが、大学に残らないかといわれ、非常勤助手になりました。そのまま研究を続けて、学会で発表したりもしました。でも助手の仕事はけっこう大変でした。やるのがたくさんあって、しんどかったし、26歳の終わりに結婚したので、結婚で辞めることにしました。

夫は建築家で、父の教え子でもありました。夫は、高校のころに兄弟で塾をつくったことがあり、いったん辞めたのですが、また塾をやりたいとおもっていて、17年前からいまのかたちで塾を始めました。わたしもいまは塾と一緒にやっています。週6日は夕方から塾の仕事があり、忙しいですね。テキストもわたしたちがつくって、夏休みにはバーベキューをしたり、模型飛行機を飛ばしたり、地元の小学生や中学生たちと家族のようにやっています。

塾に来ている子をみていて、男の子がいることが目新しいですね。わたしが小学校から女の子ばかりみていたからかもしれません。男の子のイメージをつくれないうまに育ってしまったのかなとおもいます。小中学校で共学を経験してみたかったですね。女の子しかいない状態に慣れてしまうのは変じゃないかとおもいました。男の子と女の子が自然に話せるのが新鮮なのです。しかし、男と女の区別をしていいのかなとおもう反面、女の子だけでよかったとおもいます。女の子といることがすごく楽しいし、相手も楽しがってくれます。自分のなかからそんな子ども時代がなかなか抜けられないような気がします。

大学時代、早稲田のサークルで船に乗って一夏を過ごしたことがありました。父の薦めで参加した船上大学で、一週間のエーゲ海クルーズを含めて、一ヶ月間の旅行をしたのですが、そのとき、初めて男の子とふつうに話をしました。でも、なんか男の人の話題がわからない、なにを話していいのかわからなかったです。男の人かなり年上か年下の人とのほうが話しやすいですね。同年代だと、話にくいし、男の子が子どもっぽく見えちゃいます。附属のときの友人でも、男の子が産まれて、初めて男の子がわかったという友人がいます。女系家族で育った人もけっこういました。

日本女子大学というと、すぐ信頼されます。「信頼」が重要だとおもいます。だからむしろ安

易に日本女子大学卒というのをださないようにしています。日本女子大というと絶対に悪いイメージはないです。それは伝統と誇りだとおもいます。まあテレビをみていると、最近の女子大生は変わったとおもいはじめましたが、日本女子大の学生として恥ずかしいおこないをしてはいけないというモラルが変わってきたのかもしれない。

塾をしておもうのですが、子どもが減っているし、いろんな大学が間口を広くしています。だから、伝統にしがみついているとはいけない状態になっているとおもうのです。女子だけでやっていけるのかなとおもいます。男子を入れてもいいのかなと。だけど、そうすると、日本女子大という名前が変わるのかなとおもい、なにか複雑ですね。

12 流通関係パートタイム [英文学科卒]

鳥取県に生まれ、父が地方公務員でしたので、県内で転勤がありました。男女共学の県立高校に入りました。文武両道の自由な高校で、男の子3に女の子1の割合でした。中学のときに東京女子大の学生が教育実習に来られて、その方は日本航空にはいったのですが、その人にあこがれて、女子大ばかり5つ受けました。日本女子大は第二志望でしたが、高校の先生にすごいところに受かってよかったなといわれて、よかったのかなとおもいました。姉も京都の女子大へ通っていました。

受験のときに初めて東京へ来ました。目白に県人女子寮があったので、そこで2年間過ごしました。それから下宿に移りました。英文科に入ったのは、日本航空へ入りたかったからです。ほんとうは国文学のほうが好きだったのですが。

初めて入ったときは、女子ばかりというのは抵抗がありました。お化粧のにおいやきらびやかさがあって、圧倒される感じでした。慣れるのに時間がかかりました。気がついたら3、4ヶ月、男の人と話していないなとおもいました。男の子の多い高校だったので、つねに不自然じゃないかというおもいはありました。男の人と話そうとおもうとどこかへでかけていかないと話せないのだなとおもいました。ちょっと後悔しましたね。

附属から来た人は、自宅から通っているの、そのころの印象は華やかな感じでした。出身校や趣味をクラスで書くとき、附属の人は、乗馬とか麻雀とか旅行、ピアノ、テニスとかで、趣味が違いました。それに、おしゃれもうまくて、私たちは高校まで制服があったからまだ赤か青しか着れないときに、緑や茶色の服を着こなしていて、お化粧もうまくて、いいところのお嬢さんという感じでした。

都立高校から来た人は地味でした。お化粧もせず、はでな感じではなかったです。地方から来ている人は、どっちつかずで、おしゃれをしたいけど、なにを着ていいかわからない、中途半端な立場でした。附属からの人は遊ぶ子はすごく遊ぶし、勉強する子はすごかったです。地方からの子はコンプレックスがありましたね。

最初に2年間くらいは、なんとなく同じような感じの子が友だちになりました。それと、クラス別にわけたとき、わたしの旧姓がSで始まるので、サシスセソの友だちが多かったです。

就職活動は、日本航空を受けたのですが、面接で落ちてしまいました。それで鳥取県の地元のデパートを受けて、社長秘書の仕事につきました。デパートには2年間勤めたのですが、雑用係りみたいなもので、いやでもなかったですが、生き甲斐を感じるでもなかったですね。卒業して2年めに、近所の方の紹介でお見合いして、結婚し、東京にきました。同じ高校出身で、大手の

製造会社に勤めています。

家を買って、千葉に引っ越してきて11年めになります。子どもは2人で、上は中学3年になる男の子と小学校5年の女の子がいます。下の子も大きくなって、1人でいる時間が長くなってきて、ずうとうちにいるのもだんだん耐えられなくなりました。フルタイムでするほどではないのですが、自分の自由になるお金もほしいし、趣味をやったり、お昼を食べに行ったりしたいとおもい、いまはパートの仕事を週3回、朝9時から3時までしています。仕事に生き甲斐っていうほどではないのですが、ちょっと小金を稼ぎにいくという感じです。夫は、子どもに影響がなければ仕事はしていいといっていますが、もっと知的な仕事はないのかといってもいますが。週に一回、ママさんコーラスにも参加しています。

卒業してからのほうが日本女子大の力を感じています。卒業して鳥取県に帰ったときに桜楓会の支部の集まりにいったことがあったのですが、地元で一番大きい病院の奥様とか地元で一番大きい本屋の奥様とか、みな、卒業生であることがわかり、びっくりしました。千葉でも桜楓会の集まりにでたことがあります、ただの集まりではなく、カルチャー的な感じでした。

日本女子大っていいのは、なんかあるとおもいます。いろんな役員を引き受けていますが、なにがきてもやれる、恥ずかしいことはなにもない、ぜったいに間違っていないという安心感があります。在学中にはとても充実していたとはいいいがたいのですが、社会に出てから、強さを感じますね。

13 ペーパー・アーティスト [住居学科卒]

東京で生まれ育ちました。小学校は区立で、中学のとき、受験して附属に入りました。母は日本女子大付属高の出身でした。父はサラリーマンで、1歳年下の妹がいます。付属中学から日本女子大に入りましたが、最初から女子大で住居にいきたいとおもっていました。最初の目標がはっきりしていませんでしたので、迷いがなかったです。

附属中学を受けるとき、青学と女子大と受かったのですが、父は女子大がいいといいました。母が付属の出身ですし、住居学科があるから女子大にしました。小学校6年のときから、住居に行きたいとおもっていました。母から聞かされていたのだとおもいます。漠然と建築家になりたいとおもっていました。

附属中学では、男の子がいないのは楽しいけど、女の子ばかりというのは変だとはおもっていませんでした。でも、気楽でリラックスできるともおもいましたね。

中学では、茶道部に入ったのですが、合わないことがわかったので、ESSに移りました。それと、フィギュアスケートクラブに入って、後樂園のスケートリンクで滑っていました。英会話も好きでやっていました。おけいごとはしなかったです。

大学へ進学するとき、第一志望は住居で、第二志望は史学科としました。数学と物理ができないと住居にはいけないという噂がまことしやかに流れていました。でも真っ赤な嘘でしたが。付属からの人は、外から受験して入ってきた人にコンプレックスがあったとおもいます。美大系の建築に行くという手もあったかもしれないのですが、自己評価が低かったのと、親の意見に逆らえなかったです。あのころは、自信のない子で、過保護だったとおもいます。学校の内申書にはおとなしすぎると書かれていました。いま、仕事でフリーになって性格が変わったなあと自分でおもいますね。

大学の授業では、基礎意匠と設計製図がおもしろいかったです、一般教養はいやでした。専門をやり始めて楽しくなりました。2年から楽しかったです。手を動かすことが好きなので、ものづくりに向いているとおもいました。デザイナーになりたいなあとおもいました。グラフィックデザイナーになりたいなあとおもっていました。ゼミは、武田先生で、卒論は、ホテルなどの客室空間の収納比率というテーマでした。インテリアの授業もおもしろかったです。

早稲田のデザイン研究会にはいて、一年に一回、グループ展をやっていました。ポスターやブックデザインをしました。早稲田と日本女子大の合同の研究会でした。その延長で、デザイナーになりたいとおもいました。大学1年の時、後樂園のスケートは辞めていました。

友だちに誘われて、建築家の事務所に、横浜のみなどの見える丘公園の模型を作るアルバイトにいったことがありました。グループ設計で私たちのグループの模型がすごくよかったので、住宅メーカーに模型づくりのアルバイトに行ったりしました。

大学4年のとき、ある会社が学生を対象に好きなものをつくるコンテストを催して、金賞なしの銀賞と銅賞のうち、銅賞にはいったんです。受賞がきっかけで、その会社に企画制作の仕事で入社しました。

企画の仕事で、会社の仕事はおもしろかったです。父はコンサバで、男が働くことは大変なんだぞといていたので、就職することをネガティブに思っていました。でも、仕事はおもしろかったです。ペーパーアートは趣味で始めまして、コンペの作品をつくったり、カレンダーを作ったりしていました。こういう表現方法もあるんだなあ、人に見せたいなあとおもうようになりました。1985年にあるギャラリーで個展をしました。会社に行きながら、少しづつ仕事をして、3、4年して独立してフリーになりました。会社には6年2ヶ月勤めました。

フリーになって10年です。会社は仲間がいて楽しかったですから、一人になって寂しいかなあとおもいます。でも、やめて自由になれました。自分で決めて責任をもつということが自分にあっていました。就職して5年めに実家を出て、2年して結婚しました。夫とは早稲田の研究会で知り合いました。夫は編集者なので、夜型人間ですから、ふだんは夕方5時から11時までを制作にあてて、昼間は打ち合わせとかに使っています。雑誌や広告の仕事をしながら、個展を年に2、3回しています。去年は、アメリカでも展覧会をやりました。

いま日本女子大で非常勤講師として教えています。デザインの実技のクラスですが、ものを作る授業で、学生に好きなものをつくってもらっています。クラスでは一人ずつ少しづつ説明しています。私が受けた授業の時は全員の講評はなくて、いい人のだけでした。でもなぜABCになったのか、自分の評価がわからなかったです。だから全員に講評することを基本にしています。年22回しかないから、時間的には大変ですけど。7年前に授業をもつようになるまで、母校とまったくつながりがなかったです。

高校のときのクラス会は毎年あります。行けるときは行ってます。でも友だちは、仕事関係のほうが多いですね。同級生でもばりばり働いている人はすくないです。住居学科には付属の友だちが5人行きましたが、1人は私で、3人は未婚で仕事をしていて、1人は専業主婦です。

学生をみていると、付属からの人のほうがのびのびしています。あんまり受験勉強してきた優等生は発想が固まっていますね。なにをつくっていいのかわからなくなる人がいます。人にどうみられるかを気にするんです。付属のほうが好きでやっている感じです。人の目を気にすると、いいものが作れないです。ブックデザインでも頭が固いですね。

日本女子大を出たことで、社会にでて、二つのことに気づきました。一つは、女子大なので、

自分たちで決めなきゃいけないということを知らずに身につけたことです、共学でも男女差別がある、女子だけお茶くみがある。女子大を卒業して、フェミニズムというほどではないが、無意識のすり込みがなかったとおもいます。出産を控えているのですが、夫に育児休暇をとってもらおうとおもっています。実際、どれくらいとれるかわからないのですが、とるという姿勢が大事であるとおもいます。わたしは料理が嫌いなのですが、夫は料理が好きなので、夕御飯は夫が作っていますし、家事もやってくれます。

二つめは、付属から女子大へいったという、「お嬢様」なのねっていわれたことです。なぜ働くのかと聞かれました。お嬢様なのによって、会社で上司にいわれました。それで、カルチャーショックがありました。自分の意見ははっきりいいましたけど。

会社では男女半々の職場でした。女性ばかりだと、女性のことはわかるんですが、男子は私より頭がいいと思っちゃったんですね。でも、やってみると、そんなことはなかったんですが。社会に出ると、一歩引いてしまい、女の建築なんて建築じゃないなんていわれたりしますし、台所の設計ばかりしているだろうといわれたりします。一歩ひいてしまうような、弱い部分はあるとおもいます。

日本女子大の教育の点では、他大学でとった単位を換えられるような制度があればいいとおもいます。とくに意味がないのが一般教育の英語と体育ですね。アメリカで展覧会をやりたいなあとおもったときには、自分でペルリッツへ勉強しに行きました。英語が話せるような授業ではなかったです。それと体育が嫌いでした。団体行動が嫌いでしたから。

愛校心はあります。自分があの学校でよかったとおもっています。教えている学生がかわいいですね。応援したい感じがします。でも学生にはがっかりさせられることも多いですが。マナーがなってないですね。学生は甘えているとおもいます。その点、社会人入学の人は目的意識がはっきりしていて、しっかりしています。

これからアメリカで仕事がしたいとおもっています。アーティストの地位が高いです。人たちがうごとをしていることを評価していますから。

14 福祉関係パートタイム [社会福祉学科卒]

東京で生まれ育ちました。小中高と男女共学の公立でした。中学ではバスケットをして、高校ではバドミントンをしていました。通った都立高校は、都心のど真ん中にありました。

大学は、ほんとうは共学のところに行きたかったのですが、女子大になりました。でもかえって女だけでよかったとおもっています。高校時代から児童福祉の仕事がしたいとおもっていました。だから福祉学科や教育学科のあるところを受けました。

日本女子大を受けて受かったときには、うれしかったです。最初は女子だけで異様な感じがしたのですが、すぐに慣れて仲良くなれました。社会福祉学科にはいるまえから、一番ヶ瀬先生の名前は知っていました。授業はまじめにできました。昔話の小沢先生の授業はおもしろかったです。昔話の調査で山梨県に行ったこともありました。保母資格課程の授業もおもしろかったですね。亡くなられた小島蓉子先生のゼミで、卒論を書きました。障害児のことで、施設の体系的利用ということで書いたとおもいます。現場で体験できるので、実習が好きでした。養護学校や障害児施設、保育園やYMCA、いろいろ行きました。

サークルは、入学したときから人形劇のサークルに入りました。それと早稲田のサークルで、

広島県の養護施設に夏休みと春休みに泊まり込みで行くサークルにも入りました。3年間で5回くらい行ったのですが、旅費を稼ぐために、渋谷の蕎麦屋でアルバイトしました。アコーディオンや腹話術もしたし、人形劇も忙しかったし、他のアルバイトもしましたし、大学時代はなんだか忙しかったですね。

友だちは、社会福祉学科に仲のよい友だちが二人できましたが、人形劇や早稲田のサークルの友だちが中心でした。卒業後もつきあいがあります。

就職は、障害児施設に行きたかったのですが、都では採用がなく、結局、杉並区の児童厚生員になって、児童館で学童保育をする仕事につきました。学生時代に、世田谷区の児童館でボランティアをしていたのですが、そこで夫と知り合いました。

結婚後も、仕事は二人めの妊娠までがんばりました。上の子が2歳のとき、わたしの両親が横浜に家建てて引っ越すことになったときから、一緒に住むようになりました。母に保育園の送り迎えを頼んで、1時間半かけて職場に通っていました。でも、自分の子どもとはじゅうぶんに接していないのに、仕事で他人の子どもを相手して、子どもの相談を受けていることに気づいて、母も自分のことがやりたかったでしょうし、結局二人目ができたところで、辞めることにしました。丸6年勤めて辞めたことになります。

辞めてから、朝食を子どもと一緒に食べられるようになりました。それまで朝は寝ているのに起こして、あわただしく出かけていってましたから。子どもは4歳づつ違いで、二番め、三番めが生まれました。

毎週、うちに集まって、人形劇をやるようになりました。このあたりは、文庫活動がさかんで、団地の集会所を借りて、朗読会をしていたのですが、それから人形劇が開かれるようになりました。上の子が保育園にいつているときに一緒だったおかあさんたちとやっています。毎週、うちを拠点にしてやっていて、山下公園のフェスティバルで代表に選ばれ、札幌までいったこともありました。一番上の子も小学校一年のときから、10人くらいで人形劇をやっています。子どもの劇はおもしろいです。練習のときは喧嘩したりわがままだったりして大変ですが、本番ではちゃんと決まるのです。

うちにはいつも人が集まるから、うるさいのですが、両親も夫もなにもいいません。夫は参加はしませんが、ビデオをとってくれたり、道具運びとか手伝ってくれています。

3年くらい前から、社会福祉学科卒業生のみどり会の人材登録をしています。ときどきこういう仕事があるんだけど、電話がかかってきます。去年から、老人のデイケアに月2回行きはじめました。それと、保母の資格をもっているので、保健所の子育て支援の相談も引き受けることになりました。人形劇の関連で、幼児教育専門学校のクラブ活動を毎週二人で交替でみにしています。さらに、人形劇に音楽を担当していたら、ピアノを教えてくれといわれ、家でピアノを教えるようになりました。いま6人教えています。

いまわたしの収入は、デイケアと専門学校のクラブ活動の世話をしているところからもらっています。自分の収入は大事にしたいです。人形劇をするときの材料費やキーボードを買ったり、人形劇を見に行くときの費用にしたりしています。上の子が中学生になり、お金がかかるようになってきました。このままで大丈夫かなとおもいますが、いまは楽しみでやっていますし、子どもの成長に合わせていきたいとおもいます。

ふだん、出身大学をいうことはありません。気にしないでやってきました。娘が二人いますが、娘に日本女子大に入ってほしいとはおもいません。でも、社会福祉学科のみどり会の存在は大き

いですね。人材登録で、親切にお話をくれます。みどり会の集まりがあって、最近になって、大学の勉強がしたくなりました。

いま、音楽療法士の研修も受けています。人形劇をやってきて、その延長で、これから「めざせ、音楽療法士！」だとおもっています。研修はお金がかかるのですが、それは自分の銀行に口座をつくってそこから出しています。その研修で、先日、一番ヶ瀬先生のお話を聞いたのですが、勉強よりサークル活動をやりなさいとっておられたので、わたしは、サークル活動をしっかりやってきたのかなとおもいました。

いままでいろいろできたのも、夫と両親たちがしっかり協力してくれたからだとおもいます。三番めの子はみんなが育ててくれたようなものです。人形劇をやっていて、舞台上に連れていって、周りがめんどうみてくれたり、おかずをもってきてくれたり、ほんとうに人に恵まれているとおもいますね。だから、児童館の後輩に二番めができて悩んでいる人がいましたが、もしも仕事を辞めてしまっても、またなんとかなるよといいました。わたしがなんとかなりましたから。

15 教育関連パートタイム [児童学科卒]

両親ともに福島県出身です。わたしは福島県にある母の実家で生まれ、当時、両親は千葉県に住んでいました。わたしが小学校2年生のとき、父の転勤で京都に引っ越し、3年生の冬に東京に戻り、それから東京には30歳まで住んでいました。

都立高校を卒業して、お茶の水女子大が第一志望だったのですが、日本女子大学の児童学科に入学しました。同じ高校から日本女子大には2人進学しました。

大学では、マンドリンクラブに入り、4年間、やりました。いまでもマンドリンクラブの集まりや演奏会で交流があります。8年ほど先輩の人たちがとても熱心で、まとめてくれています。マンドリンクラブに入ったのは、高校生だったころ、隣の家のお姉さんが津田塾大学に行っていたのですが、その方がマンドリンをやっていて、いつもマンドリンの音色が聞こえてきていたもので、大学に入ったらぜひやってみたいとおもっていたのがきっかけでした。

児童学科では、小学校の教員免許をとりました。教材研究の授業やミュージカルを音楽から自分たちでつくり、成瀬講堂で演じたことが非常に印象に残ってしまっていて、あとの教職でもとても役に立ちました。体育の授業では、リトミックをとりにいった先生に習い、それも印象に残っています。卒論ゼミは、児童心理学でしたが、ちょっと難しかったですね。

児童学科のわたしの学年は88人入ったなかで、2, 30人くらいが付属高出身で、みんな、おっとりしていました。児童学科の同級生でできた友だちは、いまでも都立高校出身の8人グループが継続しています。入学したとき、たまたまお弁当を一緒に食べた8人がそのまま友だち関係を続けています。みんな都立高校出身で、長女であるという共通点があります。いまでもこの8人のあいだで、ノートを回して、もう6, 7冊になるとおもいます。それぞれ大学時代のサークルは、人形劇3人、茶道、セツルメント、水泳、マンドリンと、別々でした。

8人のうち、2人は、4年生のとき、お見合いして、卒業後すぐ3月と5月に結婚した人がいました。あとの6人は、私は小学校の先生になりましたし、幼稚園の先生になったり、OLになった人が3人いました。みな26, 27, 28歳くらいで結婚しています。わたしが知っているなかでは、お見合いの人は3人、恋愛の人は1人、結婚していない人が1人でしょうか。

わたしは、児童学科をでて、小学校の教師になりました。東京郊外の小学校で一年生を担当し

ましたが、いろいろ小さな事件があって、大変でした。

私の両親が福島県の出身で、何代も続いた旧家でしたので、父に福島県の人と結婚するようにいわれて、両親のついでで福島県出身の人とお見合いをしました。国家公務員の夫と結婚して、都心の小学校に移りましたが、夫の仕事が忙しく、転勤もあるし、結局、結婚して1年後の3月末で小学校を辞めました。出産をひかえていたこともありました。

夫の転勤で、2年間、地方へ行きましたが、いまは埼玉県に住んでいます。子どもは3人、女の子2人男の子1人いるのですが、上の子が小学校へあがったときに、教員に戻るかどうか迷いました。でも、子どもの学校へ行ってみて、わたしが勤めていたころとは学校が変わっていることがわかりました。かつては勉強ものんびりしていたのに、いまは先生の仕事が増えて、子育てとの両立はむずかしいとおもいました。学校に戻るのはやめようとおもいましたが、その経験を活かせることをしたいとおもっていました。それで、下の子が小学校に入ったときに、新聞で添削者を募集していたので、それに応募して、添削の仕事を始めました。

仕事ができ、うれしかったですね。満足度がとても高いです。子どもたちに感想を書くと、次には直って送ってきます。それにカウンセリングのような、お母さんの悩み相談にも答えていますし、カリキュラムや問題作成も頼まれています。手応えがあって、満足度が高いです。それに、この仕事を始めて、私名義の銀行口座を開いて、そこにペイが振り込まれています。まだ手をつけてはいませんが。

でも、扶養控除の範囲内で仕事をしていきたいです。それに子どもが義務教育のあいだは、とくに末っ子が大丈夫といえるところまでは、家で仕事がしたいです。仕事を始めて、夫はとくに反対はしないですし、あっさりしたもので、忙しそうだねといっています。でも、それまで子どもの話だけだったのが、いまは夫婦の会話が広がったような気がします。

大学時代の8人の友だちは、子どもが3人の人が4人、2人が2人、1人が1人、未婚が1人です。いま仕事をしている人は、幼稚園の先生が2人、塾講師が1人、損害保険会社が1人、絵のレンタル業の人が1人です。

8人の友人でノートをまわすようになったきっかけは、友人の1人が最初の子どもの死産して、その後なかなか子どもに恵まれず、やっと妊娠したのに、切迫流産で入院して動けない状態になったときにノートをまわそうという提案があったことで、それから始まりました。ノートには、友だちの子育ての様子が綴られていて、ああこういうふうになっているのかとか、おなじように悩んでいるのだなあとわかり、とても参考になりましたし、3人めを生んだ友だちがとても楽しそうなので、ノートを読みながら、刺激になりました。ノートに支えられたし、ノートに綴られているのを見て、死産した友だちの気持ちがわかりました。未婚の友人も、姉の子がいまこうなのよって綴ってあり、仲間のうちに留まっています。大学時代は、喧嘩したこともありましたが、いつも8人がおなじように仲良しであったわけではないのですが、不思議と卒業してから続いています。夫のことはおたがいあまり書きませんね。

日本女子大には、愛着があります。都立高校にいたときは、なにか居心地がよくなかったのですが、日本女子大はとてもわたしに合っていました。友だちとも考え方が似ていて、ずっと続いている関係がありますし。

世間では、お嬢さん学校のイメージがありますね。福島県でも日本女子大だっていうと、いいところだねといわれます。なにか良妻賢母のイメージがあります。できれば、娘にも入ってもらいたいとおもいます。娘は共学タイプではないとおもいます。

16 フリー編集者 [教育学科卒]

東京で生まれ育ちました。一人っ子で、大切に育てられました。母にスパルタ教育をほどこされたとおもいます。3、4歳ころから、日本女子大卒の先生のお行儀教育、それと英才教育学校に行き、ピアノ、スイミング、お習字、英語を習いました。日本女子大が第一希望で、附属小学校を受けました。それは父の希望で、父の知り合いのお嬢さんが品がよいので、いい印象だったのだとおもいます。面接のときに朝食になにを食べてきたかを聞かれたことを覚えています。合格したことはわかりませんでした。父母は喜んでいましたから、来年からここに来るのだなどおもいました。

制服を着て、母と玄関で写真を撮ったのがあります。制服がかわいかったのでうれしかったですね。小学校3年までは、母が車で送り迎えをしてくれました。

高校3年のとき、父の会社が倒産して、500坪の家屋敷が抵当にはいったので、引っ越ししました。それからは、経済的に大変で、入学金は祖母がなんとかだしてくれましたが、生活費を稼ぐために、わたしは賞状の表書きのアルバイトをしました。母は働いたことがなかったので、おろおろするばかりでしたので、お習字を習っていたことが生きて、芸は身を助けて、わたしが筆一本で稼ぎました。当時で月16万かせぎ、毎日夜なべをしましたが、そのせいで腱鞘炎になりました。経済的な苦境は、2年くらい続きました。

中学では書道と水泳、高校ではまんが研究と書道をしていたのですが、大学時代は、アルバイトで忙しくて、サークルやクラブ活動はいっさいできませんでした。授業はかならず出ました。自分で授業料を払っていましたが、必死でした。

教育学科で心理学専攻でした。ほんとうは住居に入って、デザインをしたかったのですが、数学ができなかったので、あきらめ、色彩心理学で卒論を書きました。教職をとり、社会科で付属高に教育実習にいったら、楽しかったし、ぜひ教師になりなさいとすすめられました。教員採用試験の勉強をしてなかったのに、静岡県にある紡績工場に付設する学校の教師兼舎監の仕事を学科の先生に紹介され、その働きながら学ぶ人たちの学校に就職するつもりでいました。ところが家を出て遠いところに行くことに、父が猛反対し、結局、そこは断ることになりました。

当時、第一志望は教職で、第二志望は出版社でしたが、もう2月か3月になっていたので、腰掛けで信販会社に就職しました。OL生活はこういうものだというのを味わいました。でも、どうしても出版社に行きたかったので、1年数ヶ月して、夏のボーナスをもらって、そこを辞めて、冬に出版社に入りました。そこは医薬学系の専門図書を扱うところだったのですが、一般誌をだすことになり、執筆依頼からリライトまで、中途採用ですべてやりました。そこは終電まで働く会社で、女性編集長が倒れたので、26歳のときにその代行をすることになりました。結局、わたしも盲腸炎で倒れて、救急車で運ばれて、入院することになり、それで、辞めてしまいました。1年静養しているあいだに、結婚しました。

それからフリーの編集会社に入りました。いまはフリーランスで、企業のPR誌を請け負っています。取材やインタビューもし、夜中に家でパソコンに向かって原稿を書いています。結婚してすぐこのスタイルになりました。毎月の月刊誌で、クライアントがいますし、なにかとストレスがたまるなどおもいます。ゴルフをやってストレス解消をはかっています。

夫は、最初に就職した会社のときの上司で、いまは独立して経営コンサルタントをしています。

事実婚で籍はいれていません。彼は団塊の世代なので、わかっています。友人への結婚通知のハガキにも事実婚なのでと書きました。別に先行モデルがあったわけではなく、わたし1人の主張です。いまは夫とわたしの母と3人暮らして、夫に家のローンは払ってもらっていますが、生計はべつにしています。平日は家で食事をするのはすくなく、週末はわたしが食事をつくれます。あと、愚痴をこぼしたり、悩み事を相談したりしています。

小学校と中学校の同窓会があつていったら、皆さんと生活が違うことに気がつきました。小学校の同窓会は、専業主婦で、品のあるマダムたちで、まあお仕事していらっしゃるのといわれました。同級生で仕事をしているのは2人くらいですね。中学校からの友だちは2人いて、3人でグルメの会をしたりして、よく話しています。1人は割烹店をしていて、もう1人は税理士をしています。

社会に出ると、日本女子大って、お嬢さん学校ね、いい学校ねといわれます。だから、お行儀がいのねっていわれます。そのことをわたしは誇りに思いますし、その評価はたいへんありがたいので、利用させてもらっています。でも、お嬢さん学校だけでなく、実力のある人も卒業生にはたくさんいますよね。仕事ではこちらから積極的に出身校はいいませんが、50代、60代のおじさまに、ばりばり仕事ができるとおもわれないほうがいいときは、日本女子大だつてわざわざいうこともあります。でも、若い人にいったら、なんで女子大なんだ、頼りにおもっているのに、といわれました。いい学校だけど、あまり勉強してないんじゃないかとおもわれているみたいです。

夫は慶応出身なのですが、女子大は大学とは認めていないといわれました。大学時代、法学を教えにきていた中央大学の先生にも、女子大は大学と認めていないといわれ、うちの大学に学士入学を受けにこないかといわれました。

わたし自身は、学校時代の情操教育がさかんだつたおかげで、ものごとに感動できる、きれいなものを素直に感じとれる下地ができたとおもっています。いまものを書く仕事にとつても、そういう下地が活かしているとおもいます。出版社に入ったときに、仕事のために、エディタースクールとコピーライター養成講座に通つたのですが、わたしにはむしろ大学教育が役に立っているとおもいます。あのころは、まじめに勉強したし、人生にひたむきだつたとおもいますね。

17 保育園パートタイム [児童学科卒]

岡山県で生まれ、中学2年の夏まで岡山で育ちました。中2で品川区に引っ越し、大学1年のときに家は千葉県に移りました。

都立高校に進学しました。高校時代は軟式テニスを一生懸命やりました。旧制高女なので、女子のほうが少し多かったとおもいます。数学が好きだつたのですが、国立を落ちたので、機械相手の仕事よりはとおもい、児童学科を選びました。日本女子大は、先輩が女性の分野を開拓していたことがメリットだとおもいました。

都立で男女平等できて、女子大はちょっと入りにくいなと感じました。入る前はそう感じたのですが、入るとそうでもなかったですね。理科大の数学を受験したのですが、受験にいて、男子ばかりで、たばこの煙ばかりでしたので、いやだとおもいました。

大学生活では、クラブに入りませんでした。最初の一年は高校でテニスをしていましたね。アルバイトはいろいろしました。家庭教師やオレンジ・ジュース売り、ベビーシッターや保育園、

喫茶店でしました。授業はふつうどおり、70%くらいは出席したとおもいます。卒論ゼミでは、子どもとの関わりをやりたいたいとおもい、心理学系のものが好きでした。専門科目がとれなくなるとおもい、教職はとらなかったのですが、いまはとっておけばよかったとおもいます。保母をしていると、親に小学校の先生が多いのですが、小学校の先生は働きやすいのかなとおもいます。卒論は、赤ちゃんの人見知りと新しいことの反応を考えました。

就職活動のとき、波多野完治さんと波多野勤子さんの書いたものに関心をもっていたので、手紙を書いたら、勤子さん自身がお返事をくださって、目白にスクールをやっているけれど、来ませんかといってくれて、感動しました。自筆でお返事をいただいたのです。勤子さんは、日本女子大卒業の大先輩だけど、男の子4人を育てながら、研究職を続けているのはすごいとおもいました。

波多野スクールでは、2歳児と3歳児のクラスをもち。月曜日から金曜日まで、9時から5時まで、見習いのような先生になりました。午前中にクラスをもち、子どもと遊んだりしていました。そこに入って半年後に、波多野先生はお亡くなりになりました。

両親は、卒業してすぐ結婚するのはだめだといっていました。大学1年からつきあっている人がいたので、結婚もしたいし、仕事もしたかったですね。スクールには1年しかおらず、結婚しました。夫は同じ高校の2年上の、テニス部の先輩でした。彼は、土木工学専攻で、建設会社に勤めていて、工事現場に出ますので、早く家庭がもちたいといっていました。

結婚して、夫の仕事の関係で福井県に行って、3、4年いました。それから岐阜県、滋賀県と移り、14年前に東京に戻ってきました。最初に福井県にいったとき、仕事がしたくて、敦賀市に手紙を書いたのですが、仕事はなく、結局、児童相談所のボランティアをやりました。すぐに妊娠して辞めたのですが、働きたいというと、どうして?という感じでした。

いま、子どもは、高校2年、中学3年、中学2年、小学校2年の4人で、上の3人が男の子です。長男が生まれた24歳のときからずっと専業主婦をしていたのですが、一番下の子が2歳になったときから、働きにはじめました。それでいま6年めですね。保育園の保母のアルバイトをしています。朝7時から10時までで、お昼ころまで残ることもあります。正式の職員になると、夕方遅くなるから大変ですよ。この仕事は市の広報でみつけました。子どもが中学生になったら、働いている人が多いですね。教育費がかかるようになりますから。

いまの仕事場でもおなじ高校出身の方が2人いました。それと、いいなあ、いい保育しているなあ、モデルにしている人はお茶大出身の方です。15歳も年上の方だけど、0歳児をみていて、雑用が多いのに、一つ一つの積み重ねがすごいなあとおもいます。

子どもを自分の手で育てられるのは幸せだとおもいます。保育園に預けて働いている人は、自分の子どもを他人が育てていることになるでしょ。余裕がもてる、ゆっくりできる、子どもを生んで育てて、変わったとおもいます。

子どもを生んで育てるというのは、人間以前に戻ることになるとおもいます。地位やモノ、お金で人をみていたけれど、自分の力でなんとかなるとおもっていましたけれど、自分の思うようにならないものと一日一緒にいると、謙虚にならざるとえないです。散歩にでたり、それでしあわせに感じたりします。あたりまえのことが大切におもえますね。

自由記述

本面接調査対象者は、質問紙調査の自由記述欄に貴重な回答を寄せている。ここではその一部を掲載しておく。

なお、【 】内のアルファベットおよび数字は、p.29、表3-3と一致させてある。

1. 【被服学科卒，C（勤続型）・6，フルタイム（専門）→退職経験なし，今の仕事を続けたい】

「女子大生就職難の時代、今の学生さんは本当に就職についてよく研究なさっていると感心します。最後の質問にライフコースがありましたが、卒業時私は何も考えていなかったことに気がつきました。企業訪問もしましたが、「とりあえず都立高校の教員になって…」(企業訪問もしましたが)、なってからも「いつ辞めよう」と思いつつ、結婚し出産しました。ところが家庭をもってからかえって仕事をするのが楽しくなり、今年16年目を迎えています。これまで支えてくれた人たちに感謝する毎日です。在学中から何度も就職ガイダンスを受けて仕事を探す学生さんたちには信じられないようないい時代だったのですね。教員採用試験も今は超狭き門です。ただ学生さんたちに願いたいのは、やはり大学での学問や研究を大切にしたいことです。大学は就職予備校ではないのですから。女子大にもそう願いたいと思います。男女共学については今すぐというわけではありませんが、徐々に男性も受け入れていく時代の流れであると思います。男性が学ぶに価値ある財産（学問領域）が女子大にはたくさんあると思います。多くの女子大の中ではとても自由な（学生の自主性の守られていた）日本女子大で過ごすことができ、幸福だったと思います。」

2. 【社会福祉学科卒，C（勤続型）・6，フルタイム（販売）→退職経験なし，今の仕事を続けたい】

「同期で就職した学卒女子の内、私の会社は女子大出身の方が現在も残っている数が多いです。共学出身者だからとか、女子大出身者だからということは全く感じていません。しかし私の友人で、女子大（日本女子大）出身者で、仕事を今現在続けている人はほとんどいない状況で少し残念です。しかしその友人たちも何かしたいという気持ちは熱く語ってくれます。最近、女子大の将来を憂うような記事も時々目にし、女子大出身者としては大変心配であります。仕事をしっていて感じるの、やはり出産は大きなハンディです。だからといって、出産しない、子どもはいらぬ、というわけではありません。出産も育児も経験し、そして仕事もするというのが理想です。その場合の仕事を考えて、やはり専門職の道がベストかなと思います。男性と出世コースを競わなければならないようなポジションにつくのではなく、もっと専門的な道を究める。そのような教育が充実できたら、女子大の女子を教育するという大学も生き残れる、存在価値が大きいに思われます。」

3. 【家政経済学科卒，C（勤続型）・4，フルタイム（事務）→退職経験なし，今の仕事を続けたい】

「私が就職をした昭和56年は，4年制大卒女子の就職の厳しい頃でしたので，採用してくれただけでもありがたく，どんな仕事をしたいかという以前に，とにかく一生懸命やってみるだけでした。大学で経済学を学びましたが，全く関係もないような役員秘書という仕事に就き，仕事をしながらいろいろ能力を開発，育成していったような感があり，大学なんて関係ないと思っていました。ところが，約5年前に現在のセクションに移り，仕事内容もマーケティングに変わり，‘食’の仕事に就きましたが，この分野では実に日本女子大学の卒業生の方々が活躍しているのに驚き，また，今の仕事は大学で家政学と経済学を学んだことが大いに役立っております。」

4. 【教育学科卒，B（勤続型）2，フルタイム（事務）→退職経験なし，他の仕事に移りたい】

「私は女子大にての4年間の生活について，現在，非常に後悔している部分があります。全て否定するわけではありませんが，約3年間は全く無駄に過ごしてしまったような気がします。それは「国際化」という視点で，様々な教養を身につける機会に恵まれなかったということです。つまり，平たくいえば，語学（英語）の壁を超えることが全くできなかった（シュミレーションされなかった）のです。あの4年の内，1年でも「留学」という発想をもてたら，今の私の社会的ポジションは全く違っていたと思います。英文学科でなくとも，ネイティブスピーカーの先生と接することができたり，原語で様々な思想を学ぶべきだったと思っております（これは私自身に対する反省ですが，母校の影響も大きかったと思い書かせていただきました。）」

5. 【社会福祉学科卒，C（勤続型）6.フルタイム（専門）→その他の理由で初職を退職→自営（事務），他の仕事に移りたい】

「社会に出てから母校のことを振り返る機会はめったにありませんでしたので，このアンケートの対象者に選ばれたおかげでこれまでの自分の過ごし方を振り返るよいチャンスでした。私の子どもはまだ末子が未就学児ですので，この10年，またさらにこれからの3年間にわたって，保育園での交流が大きな面を占めていました。そのつきあい（保母，親たち）の中で，自分の卒業した学科のせいも，子どもの権利とか女性が働くために必要な福祉の在り方など考えることが多く，この意味で最も母校での教育の影響（といおうか）物事の捉え方の筋道を与えられていたように思いました。子どもたちの学校や学童クラブでも，与えられた情報をどのように整理して身内に取り込んでいくかというようなことにも多分，大学教育の影響はあるのだろうと思います。」

6. 【英文学科卒，D（再参入型）・10，フルタイム（事務）→結婚退職→フルタイム（販売），今の仕事を続けたい】

「卒業直後の就職は大手ゼネコンで，女性には本当に雑用しか与えられませんでした。当時，短大が主流で，四大を出た女性にとくに与えられた仕事はなかったように思います。しかし今はOA機器やパソコンの発達で，女性でも知識と経験さえ積めば，力を生かせる場はいくらでもあると思います。社内結婚でなければ，結婚後退職する必要もないし，出産で休職し，また再び会社に戻れる制度は確立されたと思います。今，私は子育てを半分終えた時点で再就職しておりますが，大学で勉強したものなどは全く役に立っていませんが，日本女子大を卒業したという誇りが，まわりの新卒の女の子に混じって仕事をするのにも気後れせずに（多少のみこみは悪いです

が) 頑張らせているのだと思います」

7. 【住居学科卒, C (勤続型) ・4, フルタイム (専門) →他に魅力的な職場があり初職退職→フルタイム (専門), 他の仕事に移りたい】

「住居学科で多くの知識を得たとは言い難いのですが, 自分の好きなことを職業として長く続けられ, しかも, よい住宅を増やしていきたいという人生の目的を得られたのは, そのスタートを女子大でできたのは大変幸せでした。なにより, 仕事をしていく上で, 先輩, 後輩とすばらしいネットワークをもてたからです。」

8. 【社会福祉学科卒, C (勤続型) ・1, フルタイム (専門) →仕事以外のやりたいことをしたいため初職退職→フルタイム (専門), 今の仕事をやめるわけにはいかない】

「日本女子大学独自の大学文化というものには当然あってしかるべきとは思いますが。しかし, それが過去あったものや過去あったといわれていたものがやっぱりあったというのではなくて, 意外なものが明らかになって欲しいという気持ちがするのですが (何かその日本女子大学らしくないようなものが)。」

9. 【国文学科, E (再参入型) ・14, フルタイム (販売) →出産で初職退職→自営 (販売), 今の仕事をやめるわけにはいかない】

「今年是自己の上の子が小学校6年生になり, 中学受験を控え, 母校の附属中学のある西生田に数回足を運んでいる。私は附属中, 高を経て大学へ進んだので, 大学から本学に学んだ人に比べると, 愛校心が強い方ではないかと思う。出産前まで勤めていたところ (百貨店) では, 女性の職業意識を高めるといって多数の女性 (とくに大卒女子) が各種のセクション (ex. バイヤー, アウトセールスなど) についていたように思う。しかし当時はまだ雇用均等法が施行されていなかったで, 男女のハンディは大きかったと思う。女子大出身者は学校の体質的なもので男性的なリーダーシップをとれる人が多く, よい上司, 理解ある上司 (もちろんこのときは男性がほとんど) に恵まれれば, その能力を大いに活用できていたと思うが, その反対の場合の方が多く (女性の多い百貨店でも), 能力なかばで結婚, 出産退社する女性が多かった (現在はどうかかわからないが)。現在は主人の実家の家業を手伝っているので比較はできない。ただ子育てをしていく面では母校で学んだ人間形成の考え方や価値観などが多大に影響していると思う。とくに2人の子どもとも公立小学校に行っているが, 本当に様々な考え方や行動に出る親がいる。が, 母校出身の人たちに会うと一種の「カラー」を感じる (安心する)。自分の娘に対しては, 母校の良さをこれまでの38年間の人生で感じているので, 入学して欲しいと思っているが, 当世, 女子大の附属校の人気は低下している (大手進学教室のデータによると) そうで, 本人はどういう道を選ぶかはわからない。しかし私自身は母校で学んだことは現在自分の「身」になっていると思う。また, 現在手伝っている小学校のPTA活動の中でも, いくぶんか役に立っていることは事実である。」

10. 【国文学科卒, E (再参入型) ・14, フルタイム (事務) →海外留学のため初職退職→パートタイム (事務), 今の仕事を続けたい】

「私は大学時代, あまりにも真面目でなかったため, キャンパス内での生活についての質問,

たとえば先生方との交流や影響を受けたなどについてのお答えには、お役に立てたとは思えませんが、附属の小学校より永年学んだ校風には、多くの影響を受けたし、現在の生活に役立っていることはいろいろあります。ただ、目的意識をもたずに送った大学生活は、ある意味で無意味だったとも思い、反省しております。これからの時代は、そのような大学生活を送る学生は、私の頃よりももっと時間の無駄となるそういう世の中になることは間違いないと確信しております。学歴を得るためではなく、本当に自分の学びたいこと、やりたいことを身につけるために、大学という場が活用されるように、学ぶ方も教える方も意識をもっていくようになるべきだと痛感します。」

11. 【被服学科卒、B（勤続型）・3、パートタイム（専門）→結婚のため初職退職→自営（専門）、今の仕事を続けたい】

「私は豊明幼稚園から入学し、5年間の助手を終えるまで、何と23年間、日本女子大学という枠の中にいました。それぞれの時代の同窓会をする度に、近頃思うのは、一口に日本女子大学を卒業した、といっても、卒業後20年もすぎると考え方や価値観が違ってくるのだなということです。附属の人たちとの会の場合、ほとんどが東京で育ち、大学を卒業しても東京で生活し、結婚後も仕事を持ち続けていたり、再びソーシャルワーカーの勉強をしたり…と、皆、生き生きと積極的に社会と関わっているように感じます。一方、地方からの人がほとんどだった大学の会になると、少し印象が違います。私の学科では、卒業後、郷里に戻って地元で結婚、出産という人が多く、もう子どもに手がかからなくなったから何かしたいけど嫁ぎ先も夫も許してくれない。このまま年だけとってしまうのかと思うとむなしくて桜楓会の支部会だけが心の支え…という声の多さに驚きます。どんな教育を受けたかということは、人間形成にとって大変重要なことだとは思いますが、その受けたものを発揮できる環境や協力者、認めてもらえる場所があってこそ、その教育が本当の意味で生きてくるのだということを実感しています。」

12. 【英文学科卒、D（再参入型）・10、フルタイム（事務）→結婚退職→パートタイム（事務）、今の仕事を続けたい】

「正直申し上げて私は、高校が男子：女子が3：1くらいの進学校でしたので、女子大学というものになかなかなくて、物足りない思いをして4年間過ごしたように思います。親元を離れての4年間、友人との交流など実りあるものではありませんでしたが、どこことなく“びったりこない”感じがいつもありました。ところが、卒業しまして社会に出たとき、いかに日本女子大学卒であることが心強く感じられたか、それは日本で一番最初にできた女子大学という歴史の重み、卒業生の多方面にわたる活躍、偏差値の高さ、ということだけではなく、4年間の間に自分でも気づかぬうちにはぐくまれていた日本女子大学の誇り高さでしょうか。広い世の中に出ても大丈夫、臆することなく背中をピンと伸ばして生きていけるという自信、心の中にいつも気づくと日本女子大学がついていてくれるという安心感？とてもふしぎな思いですが、本当に私にとっての日本女子大学は卒業して世の中に出たからの方がより一層身近に頼りになる心のよりどころのようなものとしていつも存在しているように思います。この年になりまして、人からいろいろ頼まれて、人の上に立つことも何度か経験しておりますが、おかげさまでなんとかこなしております。」

13. 【住居学科卒, C (勤続型)・5, フルタイム (専門) →フリーに転向するため退職→自営 (フリー) (専門), 今の仕事を続けたい】

「私が卒業した頃に比べると、不十分ではあるが、男女同権とずいぶん進んだように思う。当時は性差による役割分担も、今より当たり前だったし、学生であった私は深く考えることもないまま、ずいぶんその流れに流されていたと思う。ただ、今考えると、当時先生方から何らかの形で「女性も1人の人間として自立しなければ」という信号は心のかたすみにひっかかっている、今頃になってその精神をありがたく思っている。私は自分が女性であることを利用するのもいいわけにすることも嫌であるが、性差を考えない男女平等があり得ない以上、女性の権利、フェミニズムに対して敏感なのは、大学の教育のおかげであると思感謝している。ただ、実際にせっかく大学を出ても、それを生かせず家庭の主婦になっている人が多いのは、私には残念に思える。大学の価値は偏差値などではなく、いかに卒業生が社会的に貢献するかにかかっているのだから(決して大学のために働けというわけではないが)。学業というのは、仕事をするための手段で決して目的ではないのだから、ちゃんとそれを卒業後も生かしていただきたい。」

14. 【社会福祉学科卒, E (再参入型)・14, フルタイム (専門) →出産退職→パートタイム (専門), 今の仕事を続けたい】

「2番目の子出産後、仕事を辞め、それでも何かしたいと自分の趣味を生かし、地域活動を続けてきました。そしてみどり会の交換台の紹介と、自分の今までの経験を生かせ、興味のあることがちょうど結びついて、今年から仕事(収入を伴う)をするようになりました。そうして最近、大学で勉強してきたこと、その後就いた仕事で学んだことが今、とても役に立っている気がしています。また、大学時代に頑張っていたサークル活動の経験も同じように自分の今の生活の原動力となっています。2番目出産後、悩んで決心した退職でしたが、今、仕事か育児かで悩んでいる人たちに、できれば両方頑張って!でも思い切って辞めたってアンテナを張ってできるところで頑張って生活していけば、何か得られる、自分に納得できる生き方が見つけれらるよ、といたい。」

15. 【児童学科卒, E (再参入型)・14, フルタイム (専門) →出産退職→パートタイム (専門), 今の仕事を続けたい】

「日本女子大学で4年間学び過ごしたことが、今の私のライフスタイルに大きく影響しているように思います。教職課程をとり、教職に6年間就きました。出産して退職しましたが、子育ての間ずっといつかまた「教える」という仕事に就きたいと思い続けていました。3番目の末っ子が小学生になったのを機会に、現在、通信添削指導員として家庭で仕事をしております。大学ではマンドリンクラブに所属していました。マンドリンアンサンブルの魅力が忘れられず、子どもの手が離れた4年前から社会人のマンドリンアンサンブルに所属し、活動を続けています。大学では都立高校から受験し、入学してきた同じような生活環境で育ってきた似た者同士7人の友人を得ました。卒業後もたびたび会い、結婚し、子供が産まれてからも、年に1回は会っていました。現在も子どものこと、家庭のこと、仕事のこと、何でもうち明けて話せる貴重な仲間です。将来母校に望むことは、やはり卒業生や地域の人々を対象にした学習講座の提供です。」

16.【教育学科卒，C（勤続型）・5，フルタイム（事務）→専攻や資格が生かせないため初職を退職→フルタイム（専門），今の仕事をやめるわけにはいかない】

「日本女子大学を卒業された方や他大学出身の同年代の方がどのような意識で，どのように現在生活をされているか，私も気になるところがあります。私は現在，職業をもっておりますが，社会の制度や仕事の内容上，なかなか子どもをもつ決心がつかず，40歳を目前にしております。流行に便乗したわけではありませんが，DINKSであり，そしてまた籍を入れない事実婚でもあります。式を挙げて9年目をすぎましたが，別姓制度が法律化されない限り入籍するつもりはなく，またそのため子どもをもうけるのも考えてしまうところです。さらに仕事は不規則であり，実力主義，結果主義の内容である以上，出産，育児に時間をとられるのは大変不安があります。果たして私の人生はこのままでよいのかと自問自答する日々ですが，同年代の女性はどのような生活を送っておられるのでしょうか。日本女子大学を卒業できましたことは私の人生等に大きく影響を与えていると思いますし，誇りにも思っております。」

17.【児童学科卒，D（再参入型）・10，フルタイム（専門）→結婚退職→パートタイム（専門），今の仕事を続けたい】

「結婚する時には，女性の生き方について真剣に考え，今結婚すべきかどうか悩みました。子育ては自分でしたいというはっきりとした考えはありました。自分の夢，可能性を試してみたい，ということもあり，かなり（今結婚すべきか…相手が地方にいたので自分の夢を置いて結婚して後悔しないかなど）悩んだものです。現在，保育園で仕事をしており（パート），子育てしながら働く女性と直接接しているわけで，いろいろ考えさせられることは多いです。20年くらいで世の中の意識（特に若い人たち）はだいぶ変わってきたようです。世の中で活躍している女性をみるとうらやましくもありますが，家庭や子どものことは相当犠牲にしている部分はあると思います。結婚して子どもを育てる中で，人間として当たり前の日々の生活（平凡なこと）の中に，人としての幸せがあるように私自身は感じていますが，人それぞれ価値観が多様化しており，それぞれの人生を選べる平和な時代であれば…と感じています。」

調査票

1997年1月

2-5

大学卒業後の生活・意識と大学評価に関する調査

日本女子大学総合研究所
調査責任者 渡邊 恵子
(日本女子大学人間社会学部教育学科教授)

この調査は、大学を卒業した女性が、どのような生活をおくり、現在どのようなお考えをもっておられるのかについておたずねするものです。ご回答はすべてコンピュータで集計・分析し、研究のためにのみ使用させていただきます。みなさまの回答が他の誰かに知られることは決してありません。どうぞ、ありのままにご回答下さい。ご回答は、特に断わり書きのない限り、あてはまる番号に○をつけて下さい。

- F. ご卒業の学部・学科・現在の年齢についてうかがいます。
大学院に進学なさった方、他の学部・学科に再入学された方も、1回目の卒業についてお答え下さい。

日本女子大学 学部 学科, 昭和 年卒業 現在 歳

6 7-8 9-10 11-12

I 職業についてうかがいます

- Q1. あなたは最終学校修了後、これまでに職業に就いたことがありますか。
あてはまる番号1つに○をつけて下さい。

1. 就いたことがある (フルタイム)	→ P3のQ6へ
2. 就いたことがある (パート・アルバイト・内職)	
3. 就いたことがある (自営 (家業を含む))	
4. 就いたことがない	

13

(Q1で1, 2, 3 (「就いたことがある」) と答えた方にうかがいます。)

- SQ1. あなたが初めて就いた職業の仕事内容はどれですか。
あてはまる番号1つに○をつけて下さい。

1. 専門 2. 事務 3. 販売 4. その他 ()

14

- SQ2. あなたが初めて就いた職業の入職経路はどれですか。
最も主なもの1つに○をつけて下さい。

1. 大学厚生課 5. 家業だった
2. 大学の先生・先輩の紹介 6. 自分ではじめた
3. 個人的縁故 7. その他 (具体的に:)
4. 広告

15

- SQ3. 最初の就職に際しては、日本女子大学の卒業生ということが1つの有利な条件となっていたと思いますか。
あてはまる番号1つに○をつけて下さい。

1. 有利な条件となっていたと思う
2. そういうことはなかったと思う
3. むしろ不利な条件だったと思う
4. どちらともいえない・わからない

16

Q2. あなたは最初の勤務先(会社等)を退職したご経験がありますか。
あてはまる番号1つに○をつけて下さい。

↓

1. ある	2. ない
-------	-------

 → 次頁のQ4へ

17

(Q2で1(「ある」)と答えた方にうかがいます。)

SQ1. 最初の勤務先を退職した時期はいつですか。

□に数字を記入して下さい。

19

--	--

 年

--	--

 歳の頃

SQ2. 最初の勤務先を退職した理由は何ですか。

最も大きな理由の番号にひとつだけ○をつけて下さい。

18-19

20-21

22-23

- | | |
|------------------|-------------------------|
| 1. 仕事がつまらないから | 6. 夫の転勤のため |
| 2. 専攻や資格が生かせないから | 7. はじめから短期間働くつもりだったから |
| 3. 労働条件が悪いから | 8. より魅力的な勤務先や仕事に他にあったから |
| 4. 結婚のため | 9. 仕事以外のやりたいことをしたいから |
| 5. 出産・育児のため | 10. その他 () |

Q3. あなたは現在職業に就いていますか。
あてはまる番号1つに○をつけて下さい。

↓

1. 就いている(フルタイム)
2. 就いている(パート・アルバイト・内職)
3. 就いている(自営(家業を含む))
4. 就いていない

 → 次頁のQ6へ

24

(Q3で1, 2, 3(「就いている」)と答えた方にうかがいます。)

SQ1. 現在の職業の仕事内容はどれですか。

- | | | | |
|-------|-------|-------|------------|
| 1. 専門 | 2. 事務 | 3. 販売 | 4. その他 () |
|-------|-------|-------|------------|

25

SQ2. 現在の職業の入職経路はどれですか。

最も主なもの1つに○をつけて下さい。

- | | |
|----------------|----------------|
| 1. 校楓会人材銀行 | 5. 家業だった |
| 2. 大学の先生・先輩の紹介 | 6. 自分ではじめた |
| 3. 個人的コネクション | 7. その他(具体的に:) |
| 4. 広告 | |

26

SQ3. その就職に際しては、日本女子大学の卒業生ということが1つの有利な条件となっていたと思いますか。

あてはまる番号1つに○をつけて下さい。

- | |
|--------------------|
| 1. 有利な条件となっていたと思う |
| 2. そういふことはなかったと思う |
| 3. むしろ不利な条件だったと思う |
| 4. どちらともいえない・わからない |
| 5. 非該当 |

27

(次頁のQ4へ進んで下さい)

Q 4. (現在職業をお持ちの方にうかがいます。)あなたが現在職業をもっている理由は何ですか。
第1位の理由に◎を、第2位の理由に○をつけて下さい。

- | | | |
|-------------------------|---------------|----|
| 1. 生計の維持や補助, 貯蓄のため | 6. 働くことが好きだから | 28 |
| 2. 自分自身の収入がほしいから | 7. 社会に貢献したいから | 29 |
| 3. 自分の能力を生かしたいから | 8. 家業だから | |
| 4. 生活に変化があって, 充実感がもてるから | 9. その他 () | |
| 5. 仕事を通じて友人や知人が得られるから | | |

Q 5. (現在職業をお持ちの方にうかがいます。)現在の職業について, 今後どのようにしていきたいですか。
あてはまる番号1つに○をつけて下さい。

- | | | |
|---------------------|-------------|----|
| 1. 他の仕事に移りたい | → 次頁IIのQ 1へ | 30 |
| 2. 今の仕事をやめるわけにはいかない | | |
| 3. 今の仕事をそのまま続けたい | | |
| 4. その他 () | | |

Q 6. (現在職業をお持ちでない方にうかがいます。)あなたが現在職業をもっていない理由は何ですか。
第1位の理由に◎を、第2位の理由に○をつけて下さい。

- | | |
|-------------------------|-------|
| 1. 適当な仕事がないから | 31-32 |
| 2. 夫や家族が反対するから | 33-34 |
| 3. 家事や夫・子どもの世話に専念したいから | |
| 4. 老人や病人の世話があるから | |
| 5. 自分の趣味を充実させたいから | |
| 6. ボランティアなどの社会的活動をしたいから | |
| 7. 時間や組織に縛られたくないから | |
| 8. 経済的に働く必要がないから | |
| 9. 疲れるから・健康上の理由から | |
| 10. その他 () | |

Q 7. (現在職業をお持ちでない方にうかがいます。)あなたは今後, 何か職業をもちたいと思いますか。

- | | | |
|---------------|-------------|----|
| 1. もちたいと思う | → 次頁IIのQ 1へ | 35 |
| 2. もちたいとは思わない | | |
| 3. わからない | | |

(Q 7で1(「もちたいと思う」)と答えた方にうかがいます。)

SQ.それはなぜですか。第1位の理由に◎を、第2位の理由に○をつけて下さい。

- | | | |
|-------------------------|---------------|----|
| 1. 生計の維持や補助, 貯蓄のため | 6. 働くことが好きだから | 36 |
| 2. 自分自身の収入がほしいから | 7. 社会に貢献したいから | 37 |
| 3. 自分の能力を生かしたいから | 8. 家業だから | |
| 4. 生活に変化があって, 充実感がもてるから | 9. その他 () | |
| 5. 仕事を通じて友人や知人が得られるから | | |

(次頁IIのQ 1へ進んで下さい)

II あなたのお考えについてうかがいます

Q 1. 世間では、女性と男性の違いについて、さまざまなことがいわれています。以下の記述について、あなたは
 はどう思われますか。A～Sそれぞれについて、あてはまる番号に○をつけて下さい。

	そう 思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう 思わない	
A. 男性は女性に比べて、人を使うのが上手である……	1	2	3	4	38
B. 女性は男性に比べ、臆病だ……	1	2	3	4	39
C. 家庭のこまごまとした管理は女性でなくてはと思う……	1	2	3	4	40
D. 女性のすぐれた思想家は、あまり出ないと思う……	1	2	3	4	41
E. 女性は、体力や精神力の点で、パイロットなど 人命を預かる仕事には向いていないと思う……	1	2	3	4	42
F. 女性は視野が狭い……	1	2	3	4	43
G. 一家の生計を支えられないような経済力のない男性は 男として失格である……	1	2	3	4	44
H. 女性は月経があるので、精神的に不安定である……	1	2	3	4	45
I. 男はむやみに弱音を吐くものではないと思う……	1	2	3	4	46
J. 女性は何かにつけて責任を回避しがちである……	1	2	3	4	47
K. 人前では、妻は夫を立てた方がよい……	1	2	3	4	48
L. 論理的思考は、男性の方がすぐれている……	1	2	3	4	49
M. 最終的に頼りになるのは、やはり男性である……	1	2	3	4	50
N. 女性は男性に比べ、感情的である……	1	2	3	4	51
O. 子育ては、やはり母親でなくては、と思う……	1	2	3	4	52
P. 女性は出産する可能性があるため、男性と仕事の上で 互角に並ぶのは無理である……	1	2	3	4	53
Q. 子どものことより自分のことを優先して考えるような 女性は、母親になるべきではない……	1	2	3	4	54
R. 男性は女性に比べ、攻撃的である……	1	2	3	4	55
S. 女は女らしく、男は男らしくするのがよいと思う……	1	2	3	4	56

Q 2. (お子さんをおもちの方にはうかがいます。)

(お子さんがすでに成長、成人された方も、お子さんが小さかった頃のことを思い浮かべてお答え下さい。)

お子さんを育てながら、次のようにお感じになる(なった)ことがありますか。A～Lそれぞれについて、あてはまる番号に○をつけて下さい。

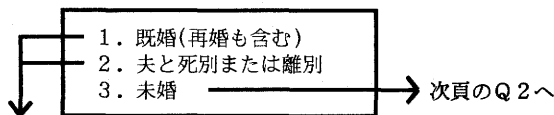
	よくある (あった)	時々ある (あった)	たまにある (あった)	全くない (なかった)	
A. 育児の自信がなくなる……	1	2	3	4	57
B. 充実感がある……	1	2	3	4	58
C. 自分の関心、時間を子どもにとられ視野が狭くなる……	1	2	3	4	59
D. 子どもこそ生き甲斐だ……	1	2	3	4	60
E. 子どもがいなければよかったと思う……	1	2	3	4	61
F. 自分のやりたいことができなくてあせる……	1	2	3	4	62
G. 子どもをもって自分も成長できた……	1	2	3	4	63
H. 育児ノイローゼになる心境に共感できる……	1	2	3	4	64
I. 自分の中で最も重要なのは子どもだ……	1	2	3	4	65
J. 何となくイライラする……	1	2	3	4	66
K. 子どもは自分の体の一部のような感じた……	1	2	3	4	67
L. 子どもさえいれば幸せだ……	1	2	3	4	68

Q 3. 以下の記述についてあなたはどのように思われますか。A～Xそれぞれについてあなたのお考えや感じ方に ②
あてはまる番号に○をつけて下さい。

	あてはまる	すこし	あまり	あてはまらない	あてはまらない
A. たいてい心を悩まされずに決心できる方だ……	1	2	3	4	2
B. 時々自分が役立たずだと感じる……	1	2	3	4	3
C. 自分で決心したことは、がんばることができる……	1	2	3	4	4
D. もう少し自分を尊敬できるならばと思う……	1	2	3	4	5
E. 自分の身の上を起こることを心配しない方である……	1	2	3	4	6
F. 周りの人からどう思われているのか気になる方である	1	2	3	4	7
G. 自分にうまくやれることなど全然ないといった気持ち になることがある……	1	2	3	4	8
H. 気後れせずにやりたいことをすることができる……	1	2	3	4	9
I. 私が何をすべきか、誰かがいてくれた方が安心 できる……	1	2	3	4	10
J. 他の人に何をしゃべったらよいのか迷うことが多い……	1	2	3	4	11
K. 自分自身を恥ずかしいと思うことがある……	1	2	3	4	12
L. 自分の能力に自信がある方だ……	1	2	3	4	13
M. グループで決められた通りにやる方が気楽でよい……	1	2	3	4	14
N. 他の人から相談をもちかけられることが多い……	1	2	3	4	15
O. グループの中で自分のやれる役割・仕事がある……	1	2	3	4	16
P. あまり親しくない人と話すには勇気がいる方である……	1	2	3	4	17
Q. グループで話がまとまらないとき、自分から口を はさむのは苦手である……	1	2	3	4	18
R. グループの人全員に気を配るようにしている……	1	2	3	4	19
S. 何があっても臨機応変にやれる方である……	1	2	3	4	20
T. グループのしっかりした人にまかせてしまう方である	1	2	3	4	21
U. 自分がグループの足手まといになるのではないかと 心配になる……	1	2	3	4	22
V. 人と気まずい雰囲気になったとき、何とか話の糸口 をみつけようとする方である……	1	2	3	4	23
W. グループのまとめ役や世話役をやらされることが多い	1	2	3	4	24
X. グループでやるより、ひとりでやる方がよい……	1	2	3	4	25

Ⅲ 現在の生活についてうかがいます

Q 1. あなたは結婚しておられますか。



(Q 1で1(「既婚」), 2(「夫と死別または離婚」)と答えた方にうかがいます。)

SQ1. 結婚された時(初婚), おいくつでしたか。 歳

SQ2. あなたはお子さんをおもちですか。 1. いる () 人 0. いない

SQ3. 結婚に際しては、日本女子大学の卒業生ということが1つの有利な条件となっていたと思いますか。

- | | |
|---|------------------------------|
| 1. 有利な条件となっていたと思う
2. そういうことはなかったと思う
3. むしろ不利な条件だったと思う | 4. どちらともいえない・わからない
5. 非該当 |
|---|------------------------------|

Q 2. 下に職業以外の7種類の社会的活動をあげてあります。あなたが、A. 過去にしたことがあるもの、B. 現在しているもの、C. 今後したいものについて、それぞれあてはまる欄に○をつけて下さい。

	A 過去にした	B 現在している	C 今後したい	
1. 趣味や資格を生かした活動				31-33
2. 社会的に承認された活動(調停委員, 民生委員)				34-36
3. 各種地域社会活動(PTA活動, 自治会・町内会活動)				37-39
4. ボランティア活動(社会福祉, 環境保護など)				40-42
5. 宗教活動				43-45
6. 大学開放講座・市民講座への参加				46-48
7. 市民運動・住民運動				49-51
8. その他 ()				52-54

Ⅳ 日本女子大学での教育についてうかがいます

Q 1. あなたが日本女子大学で受けた大学教育は、これまでの生活に役立っていますか。家庭生活, 職業, 社会的活動それぞれについて、あてはまる番号1つに○をつけて下さい。

	役立っている	まあ役立っている	あまり役立っていない	役立っていない	
領域 A. 家庭生活……	1	2	3	4	55
領域 B. 職業……	1	2	3	4	56
領域 C. 社会的活動……	1	2	3	4	57

↓

ABCとも
3または4と答えた方は
→ Q 2へ

(Q 1でひとつでも1(「役立っている」), 2(「まあ役立っている」)と答えた方にうかがいます。)

SQ. 特にどのようなことが役立っていますか。役立っていると答えた領域について、1番目に役立ったこと、2番目に役立ったことを1~11の中から選び、左の表に番号を記入して下さい。

領域	1番目に役立った	2番目に役立った
A. 家庭生活		
B. 職業		
C. 社会的活動		

1. 専門的知識や技能が身に付いた
 2. リーダーシップが身に付いた
 3. 自分の価値観を形成できた
 4. 生きていく上で精神的な支えを得た
 5. 人との付き合い方が身に付いた
 6. よい教員と出会うことができた
 7. よい友人を得ることができた
 8. 個人的に卒業生に助けられた
 9. 同窓会の存在に助けられた
 10. 校風が身に付いた
 11. 社会的に評価の高い大学を出た
- 58-59
60-61
62-63
64-65
66-67
68-69

Q 2. あなたは日本女子大学での生活にどの程度満足していましたか。

A~Hについてそれぞれあてはまる番号に○をつけて下さい。

	非常に満足	どちらかといえば満足	どちらかといえば不満	非常に不満	
A. 友人関係……	1	2	3	4	70
B. サークル・クラブ活動……	1	2	3	4	71
C. 授業やゼミなど……	1	2	3	4	72
D. 教員の指導……	1	2	3	4	73
E. 教員との交流……	1	2	3	4	74
F. 校風……	1	2	3	4	75
G. 施設・設備……	1	2	3	4	76
H. 職員の学生に対する対応……	1	2	3	4	77

Q 3. あなたは現在,大学時代の友人とどのくらいつきあっていますか。あてはまる番号1つに○をつけて下さい。

- | | |
|--------------|-----------------|
| 1. よくつきあっている | 3. あまりつきあっていない |
| 2. まあつきあっている | 4. まったくつきあっていない |

③
2

Q 4. あなたは大学時代の友人との関係を,どのようにお考えですか。
あてはまる番号1つに○をつけて下さい。

- | | |
|-------------------------------|---|
| 1. とても重要であり,大事にしていきたい |) |
| 2. 何らかの形で付き合いは続けていきたい | |
| 3. 大学時代の友人関係よりも,今の人間関係を大事にしたい | |
| 4. その他(具体的に: | |

3

Q 5. あなたは大学時代の先生に,どの程度影響を受けましたか。あてはまる番号1つに○をつけて下さい。

- | | |
|------------------|--------|
| 1. 非常に影響を受けた | → Q 6へ |
| 2. 少し影響を受けた | |
| 3. あまり影響は受けなかった | |
| 4. ほとんど影響は受けなかった | |

4

(Q 5で1(「非常に影響を受けた」), 2(「少し影響を受けた」)と答えた方にうかがいます。)

SQ1. どのような影響を受けましたか。あてはまる番号すべてに○をつけて下さい。

	すこし		あまり		
	あてはまる	あてはまる	あてはまらない	あてはまらない	
1. ものごとの考え方や学び方を学んだ.....	1	2	3	4	5
2. 研究や仕事に対する姿勢を学んだ.....	1	2	3	4	6
3. 人間関係の持ち方, 気配りを学んだ.....	1	2	3	4	7
4. 自分に自信がもてるように励まされた.....	1	2	3	4	8
5. 女性教員から女性のよさを学んだ.....	1	2	3	4	9
6. 男性教員から男性のよさを学んだ.....	1	2	3	4	10
7. 女性教員から生き方を学んだ.....	1	2	3	4	11
8. 男性教員から生き方を学んだ.....	1	2	3	4	12

SQ2. 大学の先生から受けた影響について,どんなことでも結構ですから,具体的にお書き下さい。

--

13

Q 6. あなたは日本女子大学の将来に対して,どのようなことを希望していますか。
あてはまる番号すべてに○をつけて下さい。

- | | | |
|----------------------------------|---|----|
| 1. 学部や学科の増設→(具体的に: |) | 14 |
| 2. 卒業生や地域の人々のための学習機会の提供 | | 15 |
| 3. 卒業生のための職業ネットワークの強化 | | 16 |
| 4. 大学院の充実 | | 17 |
| 5. 男女共学化 | | 18 |
| 6. 職業に役立つ教育内容の充実→(具体的に: |) | 19 |
| 7. 国際交流の活発化(留学機会の拡大,海外大学との連携の充実) | | 20 |
| 8. 施設・設備の充実 | | 21 |
| 9. その他(具体的に: |) | 22 |

Q 7. 今仮に,あなたに大学に入る年頃の女の子さんがいると仮定した場合,あなたはそのお子さんを
母校に入学させたいと思いますか。あなた自身のご意見に最も近いもの1つに○をつけて下さい。

- | | |
|---------------------------|--------------------|
| 1. 母校に入学してほしい | 3. 本人次第だが,母校はすすめない |
| 2. 本人次第だが,母校に入学してくれたらうれしい | 4. 母校はすすめない |

23

Q8. 図は、大学卒業後の女性のライフコース（生き方）について仕事と家庭（結婚・出産）の関係を中心に図式化したものです。下のSQ1～SQ6にお答え下さい。

勤続型	Aタイプ	結婚しない。職業をもち続ける。	仕事 1 →
	Bタイプ	結婚し、出産しない。職業をもち続ける。	仕事 2 → 結婚 → 3 →
	Cタイプ	結婚し、出産する。職業をもち続ける。	仕事 4 → 結婚 → 5 → 6 → 出産 →
再参入型	Dタイプ	結婚し、出産する。結婚で職業を離れ、育児後再び職業に就く。	仕事 7 → 結婚 → 8 → 9 → 10 → 仕事 →
	Eタイプ	結婚し、出産する。出産で職業を離れ、育児後再び職業に就く。	仕事 11 → 12 → 結婚 → 13 → 14 → 仕事 → 出産 →
退職型	Fタイプ	結婚し、出産しない。結婚で職業を辞める。	仕事 15 → 結婚 → 16 →
	Gタイプ	結婚し、出産する。結婚で職業を辞める。	仕事 17 → 18 → 結婚 → 19 → 出産 →
	Hタイプ	結婚し、出産する。出産で職業を辞める。	仕事 20 → 21 → 結婚 → 22 → 出産 →
後半就職型	Iタイプ	職業に就かず、結婚、出産する。結婚後初めて職業に就く。	23 → 結婚 → 24 → 25 → 仕事 → 出産 →
	Jタイプ	職業に就かず、結婚、出産する。育児後初めて職業に就く。	26 → 27 → 結婚 → 28 → 29 → 仕事 → 出産 →
無職型	Kタイプ	職業に就かない。結婚する。出産しない。	30 → 結婚 → 31 →
	Lタイプ	職業に就かない。結婚し出産する。	32 → 33 → 34 → 結婚 → 出産 →

SQ1. あなたのお母様はどのタイプにあたりますか。A～Lのアルファベットを記入して下さい。()タイプ 非該当 11

SQ2. 大学卒業の頃、あなたのお父様はあなたにどのタイプを望んでおられましたか。

A～Lのアルファベットを記入して下さい。()タイプ 非該当 15

SQ3. 大学卒業の頃、あなたのお母様はあなたにどのタイプを望んでおられましたか。

A～Lのアルファベットを記入して下さい。()タイプ 非該当 16

SQ4. あなたは大学卒業の頃、どのタイプを望んでいましたか。A～Lのアルファベットを記入して下さい。()タイプ 17

SQ5. 現在のあなたのタイプはどれに最も近いですか。A～Lのアルファベットを記入して下さい。()タイプ 18

SQ6. SQ5で選んだタイプの中で、あなたは現在どの段階にいますか。1～34の番号を記入して下さい。()番 19-20

*SQ4,5で該当する図がない場合は最も近いタイプの図を訂正して下さい。

Q9. 大学時代からこれまでをふりかえって、次のような点についてどの程度満足しておられますか。それぞれあてはまる番号に○をつけて下さい。

	満足	やや満足	やや不満	不満
A. これまでの自分のライフコース………	1	2	3	4
B. 現在の自分………	1	2	3	4

11

15

あとがき

本報告書は、日本女子大学総合研究所「女子大学の将来展望に関する総合的調査研究」の一環として実施した面接調査の結果を中心にまとめたものです。筆者らは、10代後半から20代はじめにかけての4年間を「日本女子大学」の中で過ごした卒業生が、現在どのような生活を送っているのか、また大学に何を求めているのかについて生の声を聞いてみたいと思い、インタビューを計画しました。回収された514名分の自由記述欄を読んでいると、多くの卒業生にお話を伺いたいという衝動に駆られました。今回は17名を面接対象と致しました。

インタビューでは、エネルギーで魅力的な卒業生に出会うことができました。仕事や家事・育児などでの多忙な中、様々な活動をされている姿には感動を覚えました。皆様には、年度末から4月はじめにかけての忙しい時期に、2時間あるいはそれ以上の貴重な時間をさいていただきました。調査の内容上、プライベートなことに話が及ぶこともありましたが、快く応じて下さったおかげで本報告書ができました。面接調査にご協力下さった皆様に、紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

村 松 幹 子

【執筆者】

小 林 多寿子 （日本女子大学人間社会学部現代社会学科助教授）
村 松 幹 子 （日本女子大学人間社会学部教育学科助手）

大学卒業後の生活・意識と大学評価に関する調査報告書（1）

——日本女子大学卒業生の調査から——

発行日：1998（平成10）年5月30日

著 者：小林多寿子・村松幹子

発 行：日本女子大学総合研究所

「女子大学の将来展望に関する総合的調査研究」プロジェクト

〒214-8565 神奈川県川崎市多摩区西生田1-1-1

日本女子大学人間社会学部教育学科研究室

TEL 044-952-6870, FAX 044-952-6889
